

DE
TELLURIBUS In Mundo Nostro Solari,
Quae vocantur PLANETAE:
ET DE TELLURIBUS In Coelo Astrifero:
Deque Illarum Incolis;
Tum de Spiritibus & Angelis ibi;
EX AUDITIS & VISIS
AB
EMANUELE SWEDENBORG

エマヌエル・スヴェーデンボルグ著

宇宙の諸天体

惑星と呼ばれているわが太陽系の天体 **tellures**
および星天の諸天体について、
さらにその住民、霊および天使たちについての見聞録

宇宙の諸天体について

1. 主の神聖なおん哀れみによって、わたしの霊の内部が、わたし自身に開き示されました。わたしはそれによって、この地球の近くにいる霊たちや天使たちだけでなく、他の諸天体の近くにいる霊や天使たちとも話すチャンスが与えられました。

実は、他の有人天体が存在するかどうか、またそれがどんなものか、またそこにはどんな住民がいるかを、わたしは知りたいと思っていました。それで主はわたしに、他の天体出身の霊や天使たちと語り、会話をするチャンスをお与えになりました。そして、ある霊や天使とは一日中、他の霊や天使とは一週間、また他の霊や天使とは何か月にもわたって、お付き合いをし、かれらの出身の天体、またはその近くの天体について、かれらから教わりました。そこに住んでいる住民の生活や、習慣、宗教、それに知る価値のある事柄をあれこれ聞きました。

わたしは以上の様子を、それなりに知ることができたので、その見聞を記録するのも悪くないと思います。次のことがらは知っておいていいと思います。すなわち、

霊たち天使たちは、みな人類に由来していることです (a)。

(a) 人類に由来しない霊や天使はいない。1880 参照 (訳注・脚注内の数字は、すべて『天界の秘義 Arcana Coelestia』からの引照)。また、かれらは自分の天体の近くにいることです (b)。

(b) ある特定の天体出身の霊たちは、自分の天体のそばにいる。その理由はその天体の住民であっただけでなく、かれらと同じような天性をもっていて、当該天体の住民に仕えるべき霊だからである。9968 参照。

かれらはそこに何があるか知っています。またかれらと話を交わすことができる程度に内部の開かれた人は、かれらから教わり得ることです。なお人は本質的には霊だから、それが可能です (c)。

(c) 霊魂は死後も生きるもので、それが人の中にあり、人自身を意味する霊である。そして来世では完全な形の人間として現れる。322、1880、1881、3633、4622、6054、6605、6626、7021、10594 参照。

さらにその霊たちとは、内部にかんしては、一緒になれることです (d)。

(d) 人はこの世にあるときから、すでにその内部では、つまり霊または靈魂の面では、自分の性格にあった霊たちや天使たちの真ん中にいる。2378、3645、4067、4073、4077参照。

したがって、内部が主によって開かれた人は、人が人と話すように、かれらと話すことができます(e)。

(e) 人は霊たちや天使たちと話すことができる。このわれわれの地球でも、古代人たちは頻繁にかれらと語り合った。67、68、69、784、1634、1636、7802参照。しかし今日では、人が本当の信仰を宿さず、主に導かれていない場合、かれらと語り合うのは危険である。784、9438、10751参照。

これがわたしに許され、いまや十二年にもわたって、毎日の出来事になっています。

2. 来世では、ごく当たり前のことになっていますが、多くの居住可能天体が存在し、そこに人がおり、そこから出た霊や天使がいます。真理を愛する思いから役立ちを望み願っている人は、だれでも他の天体の霊たちと話すことができる上、世界が多種多様であることも確認されます。また人類は一つの天体からだけでなく、無数の天体出身者からなっていることも知らされます。同時に、かれらにはどんな天性があり、どんな生活をしているか、かれらの神信心はどんなふうかも分かります。

3. わたしは、わたしたちの地球出身の霊たちと、これについて時々話しあいました。かれらは理性を働かせられる人であれば、いままで分かった様々な事柄に根差して、有人天体がたくさんあり、その天体出身の人たちも存在するのが分るはずだ、と言っていました。それは、合理的にも結論が出せることであり、その大きさでわたしたちの地球を凌駕する惑星がある以上、それなりの大地もあるわけで、それも太陽の周りをいたず徒らにまわって、たった一つの天体に僅かな光を送るだけのために造られたのではなく、それよりもすぐれた役立ちが存在するはずだからです。

神が宇宙を創造されたのは、人類を實在させ、そこから天界を造られる以外にはなく、人類こそ天界の苗床であることをだれしも信じなくてはなりません。そう信じれば、有人天体が他にもあって、それがどこにあっても、そこには人間が存在することを信じないわけにはいきません。

わたしたちの肉眼にも見えるように、諸惑星はわたしたちの太陽系の枠内にあります。それがまた有人天体であることは、大地の物体が物質であることから、はっきり分かりま

す。なぜなら、太陽の光を反射し、望遠鏡で見ると炎で焼けただ爛れた星には見えず、暗い部分の混在する土地のように見えます。同時に、それらの惑星もわたしたちの天体と同じように、太陽のまわりを黄道に沿って進んでおり、そこから年が生まれ、春、夏、秋、冬という一年の季節が生まれます。またわたしたちの地球と同じように、地軸の周りを回転し、一日と、朝、昼、夕、夜という時間が生まれます。それだけでなく、ある惑星には衛星と呼ぶ月があります。わたしたちの地球をまわる月があるように、一定の間隔で惑星の周りをまわっています。太陽から一番遠くにある土星の場合、大きな光の帯をまとっています。その帯は反射光ではあるけれど、土星に多くの光を与えています。以上を知って、合理的に考える場合、これらの天体が無駄な物体であると言える人がいるでしょうか。

4. また、わたしが霊たちと話した結果、次のように信じることも可能です。すなわち星天 **coelum astriferum** は限りなく広く、そこには無数の星があり、しかもその星の一つ一つは、わたしたちの太陽と同じく、それなりの、またその世界での、大小さまざまな太陽であることです。率直な考え方をする人なら、次のように結論をくだすでしょう。これだけ限りなく大きいものが、創造の最終目的、すなわち、〈神が天使や人間と住むための天界のみ国〉にいたる仲介的存在でないはずはないことです。

可視的宇宙を見れば分かるように、これだけの太陽をもち、無限の星でちりばめられたすばらしい星天は、もろもろの天体とそれに住む人間が実在できるようになるための単なる手段であることです。それが天界の王国 **Regnum coeleste** の出どころです。

合理的な人なら、以上から次のように考えざるを得ません。人類にこれほどの目的があり、しかもこれほどの手段が存在する以上、それが一つの地球からだけで天界 **Coelum** をお造りになるためではないことです。無限の神にとっては、天体が何千、あるいは何十万あって、それがみんな住民で埋まったにしても、何でもありません。

5. それだけではありません。天使的天界は、人間にある個々のものに相応しています。つまり各肢体、器官、内臓および各種情愛にも相応しているものが何万もあって、それこそ無限に大きいのです。そして天使的天界をあらゆる相応関係から見て、それが多数の天体の住民からなっていないなくては実在不可能なことを、わたしは教えられました (f)。

(f) 天界は主にたいして相応関係にあり、また人は個々全体にわたって、天界に相応する。したがって主のみ前にあっては、天界は大規模な像として、人を映し出している。それで巨大人 **Maximus Homo** と呼ばれる。2996、2998、3624～3649、3

6 3 6 ~ 3 6 4 3、3 7 4 1 ~ 3 7 4 5、4 6 2 5 参照。人と人のすべてが、総体として天界である巨大人に相応していることについての経験。3 0 2 1、3 6 2 4 ~ 3 6 4 9、3 7 4 1 ~ 3 7 5 1、3 8 8 3 ~ 3 8 9 6、4 0 3 9 ~ 4 0 5 1、4 2 1 8 ~ 4 2 2 8、4 3 1 8 ~ 4 3 3 1、4 4 0 3 ~ 4 4 2 1、4 5 2 7 ~ 4 5 3 3、4 6 2 2 ~ 4 6 3 3、4 6 5 2 ~ 4 6 6 0、4 7 9 1 ~ 4 8 0 5、4 9 3 1 ~ 4 9 5 3、5 0 5 0 ~ 5 0 6 1、5 1 7 1 ~ 5 1 8 9、5 3 7 7 ~ 5 3 9 6、5 5 5 2 ~ 5 5 7 2、5 7 1 1 ~ 5 7 2 7、1 0 0 3 0 参照。

6. 知り確かめることだけに精を出している霊たちがいましたが、かれらにとってそれだけが喜びです。かれらには、わたしたちの太陽系宇宙の外に出て見て回り、知識を深めることが許されています。かれらによると、この太陽系世界にある諸天体だけでなく、その外にある無限の数にのぼる星天宇宙にも、人間がいるということです。その霊たちは水星出身の霊でした。

7. 他の天体 **tellus** に住んでいる人たちの神信心について、一般的にそこには偶像崇拜者はおりません。みな主を唯一の神として認めています。神を見えざる神としてではなく、見える神として礼拝しています。その理由は、神がかれらに現れるさい、人の形をして現れることからきます。わたしたちの地球でもアブラハムや他の人たちに現れたのと同じです (g)。

(g) 他の天体に住む人たちが神を人の形で、つまりは主を礼拝している。8 5 4 1 ~ 8 5 4 7、1 0 1 5 9、1 0 7 3 6、1 0 7 3 7、1 0 7 3 8 参照。神が実際に人間になられたと聞いて喜んだ。9 3 6 1 参照。神については、人間の形をしている。神以外には考えることができない。8 7 0 5、9 3 5 9、9 9 7 2 参照。何等かの概念をもったものについては礼拝もできるし、愛することも可能であるが、何の概念ももてないものについては、それが不可能である。4 4 3 3、5 1 1 0、5 6 3 3、7 2 1 1、9 2 6 7、1 0 0 6 7 参照。

そして神を人の形で礼拝する人たちは、みな主によって受け入れられる (h)。

(h) 主は善のうちにあり、神を人の形で礼拝している人を受け入れられる。9 3 5 9、7 1 7 3 参照。

またかれらが言うには、何らかの概念をつかって捕えないかぎり、正当なやり方で神を礼拝することはできないし、ましてや神と結ばれることもない、そして神については、人

の形以外には捕えようがないということです。そうでない場合、神についての思考力に関する内的視覚が、ちょうど肉眼で際限のない宇宙を見たときのように、霧散してしまうと言います。そのようになると、考えが自然界のほうにのめり込んでしまうため、結局自然界を神として崇めることになります。

8. 主がわたしたちの地球で人間性をとられたと伝えると、かれらはしばらく考え、やがて、それが起こったのは、人類の救いのためだと言いました。

水星という惑星天体と、そこにいる霊・住民について

9. 全天界は、「巨大人 Maximus omo」と呼ばれる一人の人間を映しだしており、人間にある個々全体、つまり人の外部のもの・内部のものすべては、その巨大人すなわち天界に相応しています。この事象は、わたしたちの世界では知られていませんが、事実そのとおりであることをいろいろ説明してきました（f）。

ただし、この巨大人を構成するには、わたしたちの地球から天界に行く人だけでは、相対的に少なく十分とはいえません。巨大人は他の多くの天体出身者によっても構成されるはずですが、したがって、相応の点で質的にも量的にもどこかで不足が生じた場合、すぐさま他の天体出身者を招いて、バランスよくそこを埋めていくことを、主は配慮なさいます。こうして天界は成り立ちます。

10. 水星という惑星出身の霊たちが巨大人のなかではどのようなようであるか、これもわたしは天界から教わりました。それは記憶に関係があることです。単に現世的・物質的なものから抽象された事柄についての記憶です。わたしは実際かれらと話をするチャンスが与えられました。しかも何週間ものあいだで、その惑星にはどんな人がいるかを耳にし、またどんなふうにして生活していたかを調べるチャンスでした。したがって、かれらの経験を取り上げてみたいと思います。

11. ある霊たちがわたしのところにやってきました。天界から教わったことでは、かれらは太陽に一番近い天体で、わたしたちの地球では水星と呼ばれている惑星出身だそうです。かれらはやってくるがはやいか、すぐさまわたしがもっている記憶から問いかけてきました。（霊たちはこのようなことを実に巧みに実行することができます。人のところにやってくるなり、その人の記憶の中にあるものをことごとく見通します）（i）。

（i）霊たちは人の記憶のなかにあるすべてのものに入り込むこと、また霊たちの記憶から人に記憶が入るのではない。2488、5863、6192、6193、6198、6199、6214参照。天使たちが人の情愛や目的の中に入るのは、人がそれ以外には考えようも、欲しようも、行いようもない場合である。1317、1645、5844参照。

霊たちはいろいろなことを尋ねましたが、それには、わたしが以前いた都市や場所についての問いがありました。しかし気づかされたことは、かれらが知りたいのは、教会堂、宮殿、家屋、大通りなどでなく、わたしの承知していることがその場所で行われたか、そ

こで行われた政治など、そこにいた人の性向や習慣その他についてでした。このように場所と関係あるものは、人の記憶のなかにこびりついていて、そのため場所が思い出されると、引き続いて思い出されるわけです。

わたしはかれらの様子には驚きました。かれらはそこにある壮大なものについて質問しないで、ただ事柄や事件だけについて質問するからです。理由をたずねると、かれらは物質的なもの、肉体的なもの、現世的なものを眺めても何も楽しくないけれど、ただ事実 **Realia** を見るのは楽しいそうです。そこでわたしは、その惑星の霊たちが、巨大人の中では、物質的・現世的なものから抽象されたものを記憶することに関係があることが分かり確信を固めました。

12. わたしは次のように聞きました。その天体に住んでいる人たちの〈いのち〉は、現世的・肉体的なものにはまったく関心がなく、その地での民族の法規、法律、政体に関心があるということです。そして数え切れないほどある天界的な事柄に興味をもっています。その天体の人たちの中に霊たちと話し合う者が大勢いて、かれらは霊的なことがらや死後の生活の規律などをよく知っている、耳にしました。そこからもまた肉体的・現世的なものにたいする軽視が生まれます。死後の〈いのち〉を信じ、確信していますから、永遠・至福の天界的なものが関心の的だからです。現世的なものには、生活上の必要性からくる以外には関心がありません。そこに住んでいる住民が同様で、その出身の霊も、当然そうなります (b)。

13. 肉の感覚を越え高められた記憶によって、かれらがどれほど熱心に事物の知識をあえ喘ぎ求めているか、わたしにははっきりしました。わたしが天界的な事柄を知っているのに注目すると、かれらはそれらをみんな素早く通り越して、これはこうだ、あれはこうだと絶えず言いました。このような霊が人のうちにやってくると、その人の全記憶に入り、自分の都合のいいところを刺激します。かれらが人の記憶にあるものを、書物を読むように読み取るのに、わたしはたびたび気がついたのでした (k)。

(k) 人に付き添っている霊たちは、本人の記憶にあるすべてのものを所有している。5853、5857、5859、5860参照。

霊たちはこれを巧みに、しかも迅速に行うのは、鈍重で弛緩的なものの周りをうろついて、内部の視野を圧迫し滞らせるようなことがないためです。すべて現世的・肉体的なものは、自分が目的になっています。つまり自分だけを愛させるように仕向けます。しかしか

れらが直視するのは、もの自体です。現世的なものが付着していなければ、靈魂を高くもちあげ、ひろびろとした草原に連れていきますが、反面、物質的なものは靈魂を下降させ、制限し、閉じてしまいます。

霊たちにある知識欲、記憶増進欲は次のようなことから分かります。あるときわたしは未来に起こることについて書いていました。わたし自身、自分の記憶から内容を盗み見られないくらいの距離で、霊たちからは離れていました。わたしはかれらの前で、かれらに読まれることを快く思わなかったからです。かれらはそれにたいし非常に立腹し、通常の習慣に反して、わたしが最悪の人間であるなどと言って、わたしを脅そうとしました。そのいらつきを示そうと、わたしの右頭部に耳まで届くほど、ひとひね捻りの苦痛を与えました。しかしそれで害を受けたわけではありません。かれらはとにかく悪いことをしたわけで、次第に遠ざかりましたが、それでも立ち止まって、わたしが何を書いているかを知りたがっていました。以上はかれらの知識欲を示すものです。

14. 水星の霊たちは、他の霊たちに比べて、わたしたちの太陽系だけでなく、その外の天空の星座にある事柄までずっとよく知っています。一度それを自分なりに把握すると、それを蓄え、同じようなことが起こるたびに、それを思い起こします。以上から、霊たちには記憶が備わっていて、それが人間の記憶よりはるかに完全であることがはっきりしました。また霊たちは、聞いたこと、見たこと、感知したことを蓄えていて、それも自分の気にいったものは、格別そのようにしていることが分かります。例えば、今回出会った霊たちは、ものごとを知ることを **cognitiones rerum** に、非常なよろこびを感じます。気にいるとは愛している証拠で、あたかも自発的に起こるように流れ込み、蓄えられます。それ以外のものは入ってきません。ただ表面をかすっただけで、消えていきます。

15. 水星の霊たちは他の社会にやってくると、自分の知っていることをかれらから聞かされます。そして聞かされたあと、そこを去ります。このような交流は霊たちのあいだ、とくに天使たちのあいだに行われていて、例えばある社会にきて、受け入れられ愛される場合、自分が知っていることをすべて伝えて交流します(1)

(1) 天界ではあらゆる善の交流が行われている。なぜなら天界的な愛は自分のもっているものすべてと他の人のものとの交流させ、そこからかれらには英知と幸福が生まれるからである。549、550、1390、1391、1399、10130、10723参照。

16. 水星の霊たちは、他の霊に比較して、自分たちの知識がもとで傲慢になっています。そこでかれらにたいし、無数に知ったとしても、知らないことはまだ無限にあると注意されました。また知識は永遠に増えていっても、あらゆる普遍共通的なものを知ることにはならない、かれらには傲慢と魂のうぬぼれがある、それは適切ではないと言われました。しかしかれらは、自分たちは傲慢にはならないが、自分の記憶の能力からくる栄光があると応えました。こんなふうには、かれらとしては自分たちの欠点を弁解することができるわけです。

17. 声を出して話すことについては、それが物質的であるという理由から、嫌われま。したがって、仲介になる霊が不在の場合、かれらと話をするには、能動思考の表象 *species cogitationis activae* を使うしかありません。かれらの記憶は、〈純粹に物質的な想像〉ではない事柄についてであるため、自分なりにそれに近い思考対象をもってきます。思考力は、想像力を越えるもので、対象としては物質から抽象されたものが必要になります。しかしたとえそうであっても、水星の霊たちは、判断の能力をほとんどもっていません。かれらの楽しみは、裸の思考であって、判断にしたがった事柄とか、思考したあとの結論は歓迎しません。

18. かれらにたいして、自分たちの思考を何かの役立ちに提供したくないかと尋ねました。これも、思考は役立ちを目指し、役立ちこそ目的である以上、思考を楽しむだけでは十分ではないからです。思考だけでは、本人には役立ちが生まれず、自分の考えを伝えようとする相手にたいしてのみ、役立ちが生まれるものだからです。自分の思考に止まっているだけでは、英知の人には相応しくありません。なぜなら、思考は、生活上起こってくる事柄を探求するために役立つ補助原因であるに過ぎないからです。このように言っても、かれらは自分たちは思考を楽しんでおり、その思考こそ、かれらにとっての役立ちだと応えました。

19. かれらのなかには、他の天体の霊のように、人間として姿をあらわすのを嫌がる人もいます。水晶の球のように見られたいのです。実際にはそのような姿にはなりません。非物質的なものに関する知識は、あの世では水晶の表象をもっています。

20. 水星の霊たちは、わたしたちの地球の霊たちとは、まったく違っています。わたしたち地球の霊たちは物事 **res** にたいする関心はそんなにありません。むしろ物質的なものになりますが、現世的・肉的・地上的なものにたいして関心をはらいます。したがって、水星の霊たちとわたしたちの地球の霊たちとは一緒にいることができません。それで、たがいに出くわすと、かれらは逃げます。お互いのうちから発散する霊的なスフェアが、まるで対立しているからです。水星の霊たちが口にするのは、さや鞆を見たいとは思わない、その鞆からとりだされた裸の事物、つまり内部のものを見たいということです。

21. 楽しげにすごく明るく燃えている炎が見えました。それもしばらくのあいだ燃えていました。その炎は、以前の霊たちより、洞察力・思考力・話術においてずっと機敏な水星の霊たちがやってきたことを示します。かれらがやってきたとき、わたしの記憶にあったものの中を通り抜け、観察していきました。その素早さのために、わたしはそれに気づかずにいましたが、かれらは、あれこれ言っているのを聞きました。わたしが天界や霊界で見たことを言うと、かれらはもう以前から知っていると言います。わたしは、かれらの仲間の霊が大勢いて、やや背後に後頭部の領域の左側のほうにいるのを感じとりました。

22. 別の機会にわたしは、以上のような性格をもった多くの霊に会いました。ただわたしからある程度の距離を置き、右よりのやや前面にいました。かれらはわたしと話しましたが、仲介になる霊をとおして行いました。なぜならかれらの話は、考える速度と同じくらい速くて、その考えたるや他の霊の仲介がいなければ、人間のコトバに載せられないくらいです。驚いたことに、かれらは盛沢山の内容を迅速にすばやく話します。それが波打つ調子で多くの事柄を一度に話すことで、中身がよく理解されます。特記すべきは、かれらが右側にいたにも拘らず、かれらの話はわたしの左の目に映ることです。そのわけは、左眼は物質から抽象されたものの思考、すなわち理知に関する事柄に相応することです。右眼は英知に関する事柄に相応します (m)。

(m) 目は理性に相応する。理性は内的視覚であり、非物質的なものの視覚だからである。2701、4410、4526、9051、10569参照。左眼の視野は真理、すなわち理知に相応し、右眼の視野は真理の善、つまりは英知に相応する。4410参照。

かれらは話すときと同じ速度で、また聞いたことも理解しました。そしてこれはこうで、これはこうではないなどと言って、それについて判断を下しました。

23. 他の天体出身の霊がいました。その霊は、迅速にすばやく話せるため、かれらと巧みに話すことができました。ただしその霊は、話のなかに優雅さを感じさせます。かれらは、その霊が話すことを即座に判別し、その霊の話がある時はあまりにも優雅で、ある時はあまりにも巧みだと言います。かれらはその霊からまだ聞いていないことがあるかどうか、傾聴しようとしていました。そのさい、とりわけ話術や教養の風格からくる情愛で曇らせるものを払い除けていました。それも、そのようなものは事柄自身を覆い隠してしまい、その代わりに事柄の物質的な形でしかない音声は表面化します。実際のところ、その霊は物質的なものを心に置いており、音声のもつ意味より、音声自身を聞かせたかったわけです。したがって、精神よりも聴覚のほうが刺激される始末です。

24. 水星の霊たちは、一か所にとどまっていません。つまりある世界の霊たちの集まりの中だけにじっとしていません。むしろ宇宙をへめぐり巡ります。なぜなら、かれらにとっての記憶とは、絶えず増えていくものなのです。それでかれらはあちこち巡ることが許されていて、知識の得られるところへはどこでも行かれます。そしてこのようにして巡るうちに、物質的なもの、すなわち肉的・現世的なものを愛する霊にぶつかると、かれらを避け、そのようなことを耳にしなくてもいいところへ行きます。そこで、水星の霊たちの精神は感覚的なものを越えていて、内的な光明をもっていることがはっきりします。かれらがわたしの側にいてわたしと話していたときも、それを実際に感じるチャンスがありました。そこで、わたし自身感覚的なものから引き離され、自分自身の目の光が鈍くなり、ぼんやりし始めたことに気づきました。

25. その星の霊たちは、仲間・団体を組んで行きます。かれらが一緒になっていると、まるで一塊になっているように見えます。かれらは行動を一つにするよう、主によって結束されています。その中のだれか一人が知識をもっていると、それが全員に通じ、全員がもっている知識はだれにでも通じるといった具合で、天界における場合と同じようです
(1)。

かれらは物事にたいする知識を求めて宇宙を放浪します。わたしにはそれがよく分かりました。一度わたしから大部離れて姿をみせ、そこからわたしと話したことがあります。かれらは、

「今集合して、この世界のスフェアから天空の星の世界に脱出しようとしているのですが、そこには現世的・肉的なものに頓着しないで、そのようなものを超越している人たち

がいると知ったからです。わたしたちはそのような人たちと一緒にいたいのです」と言い、また次のようにも言いました。

「わたしたちは、どこへいくかは自分でも分かりません。でも、わたしたちがまだ知らない事柄、わたしたちの知識とマッチする事柄について教わるところへ、神のご計画によって連れていかれます。自分たちと一緒にになれる友人をどのようにして見付けられるのか分かりませんが、これもまた神のご計画に任せています」と。

26. かれらは宇宙を経巡り、わたしたちの太陽系の世界外にある諸天体や世界について、他の霊以上に知っています。それでわたしは、かれらとこのことについて話しました。かれらは言いました。

「この宇宙には、人間が住んでいる沢山の天体があります。狭い判断しかできない人がいることで、わたしたちは驚いています。全能の神が造られた天界が、一つの地球からやってきた霊や天使たちだけで成っているのでしょうか。神の全能に比べれば、たとえ何十万の世界、何十万の地球が存在しても、何ものでもないわけで、この地球人など微々たるものです」。さらに言ったことは、

「わたしたちはこの宇宙に何十万もの有人天体があるのを知っています。ただし、これが無限の神にとって何ものでもないのです」と。

27. 水星の霊たちは、わたしの側において、わたしが〈みことば〉を記し、その内的意味について説明したら、わたしの書いたことを感じとり、言いました。

「あなたが記した事柄はまだ少し粗雑です。ほとんどすべての表現が物質的に見えます」と。それにたいして、応えました。

「わたしたち地球の人間がここに書かれたことを読むと、高尚で微妙だと思い、そのほとんどが理解できません」と。わたしは付け加えて、

「わたしたちの地球には、行為するのは外部で、人を生かしているのは、内部人間であることを知らない人がたくさんいます。そして、感覚に惑わされて〈いのち〉が肉体に存在するものと信じ込んでいます。それで悪辣で不信仰な人たちは死後の〈いのち〉を疑っているのです。しかもかれらは、肉体が死んでからも生きる部分を、「**靈魂 anima**」と呼んで、「**霊 spiritus**」とは呼びません。そして**靈魂**とは何かとか、その存在の場がどこにあるかと議論し、また**靈魂**には物質的な肉体があつて、風に吹かれて消滅しても、また人が人として生きるためには、再び合体するものであるなど、それに似たことをさまざまに信

じています」と。以上を聞いていた水星の霊たちは、「それでも天使になれるのですか」と尋ねてきたので、次のように応えました。

「信仰と仁愛の善のうちに生活してきた人たちは天使になります。そのときはもう、外部つまり物質的なものの中にはなく、内部つまり霊的なものの中にいます。かれらもこのような状態になると、水星の霊がひたっている光以上の光に入るのです」と。

以上を分からせるため、この世でそのような生活を営み、わたしたちの地球から天界に入った天使が、水星の霊たちと話すチャンスを得ました。それについては次に述べます。

28. そのあと、水星の霊たちはわたしに、何枚もの紙を張り合わせて不揃いになった長い紙を持ってきました。それは、わたしたちの地球で見かける印字紙のように見えました。わたしは、「あなた方にはこのようなものがあるのですか」と尋ねたところ、「わたしたちにはないのですが、あなた方の地球にはこんな紙があるということを知っています」と言いながらも、多くを語りたがらない様子でした。そこでわたしが感じとったことは、かれらはわたしたちの地球における知識は紙上に存在するわけで、人の中にはないということ、紙が知っているわけで、人が知っているのではないと言わんばかりに、嘲笑している様子でした。しかも紙には様々な用途があることなども、教わってきていました。

しばらくして、かれらは戻ってきて、わたしに前と同じように印字された感じのもう一つの紙を持ってきました。それはもう張り付けたりして不揃いなものではなく、格好よくさっぱりしたものでした。そしてかれらは、「あなた方の地球には、このような紙、つまりそれからなる書物があるということが、よく分かりました」と言いました。

29. 以上を告げたことで、次の事象がはっきり分かりました。すなわち、来世にあって霊たちは、見たこと聞いたことを記憶にしまい込みます。同時に、わたしたち地球人と同じように、教わることも可能で、信仰にかんする事柄でも学び、こうして完成されていくことが出来ます。霊にしても天使にしても、内的になればなるほど、迅速かつ完璧に吸収し、より完全に蓄えます。これが永遠に続くわけですから、かれらにとっては、たえまなく英知が増えていきます。水星の霊の場合も、事物にたいする知識は絶えず増えていきますが、それは英知にはなりません。なぜならかれらが愛しているのは、媒体になる知識にすぎず、目的をめざす役立ちを愛しているのではないからです。

30. さて、それで水星という惑星出身の霊たちには、どんな素質があるのでしょうか。後述からやがてははっきりしますが、要するに次のようです。霊や天使たちがどれほど多く存在しても、かれらは人間です。そして人間 **humanum** は、天界の苗床です。しかも霊たちは、この世で人間として生活したときのような情愛と傾向をもっています。人の〈いのち〉はその一つ一つの特徴を引きずっていくからです (n)。

(n) 人の〈いのち〉はそのすべての特徴を蓄えたまま、死後 も存続する。4227、7440参照。死後、〈いのち〉の外部は閉じられたままである反面、〈いのち〉の内部が開かれる。4314、5128、6495を、本人の考えの個々全体はあらわになる。4633、5128参照。

したがって、各天体の人々の素質は、そこからやってくる霊たちの素質から分かることになります。

31. 巨大人の中での水星の霊は、物質からの抽象を記憶することに関係があるため、だれかが地上的なこと、肉体的なこと、単に現世的なことなどについて、かれらと話しても、全く聞こうとしません。そのようなことを聞くよう強制されると、それを避けるため、話題を他のものに変えるか、多くの場合反対のものに変えてしまいます。

32. わたしは、かれらの素質が上述のようであるかどうか、はっきり知りたいと思いました。それで、草原、耕地、庭園、森林、河川などを表象して見せることが許されました。(表象するとは、他の人の面前に、来世で生き生きと現れるものを想像上見せることです)。ところが、かれらは即座にそれらを変形させ、草原や耕地がぼんやりしてきました。表象によって、そこは蛇でいっぱいになり、澄んだ水は姿をみせず、河川は黒ずんできました。わたしは、どうしてそんなふうにするのか尋ねました。すると、そのようなものについては考えたいと思わず、地上的なものから抽象されたことを知るリアルなものについて考えたいと言います。それもとくに、天界に実在するものを知りたいのだそうです。

33. そのあとわたしは、わたしたちの地球にいるのと同じような大小の鳥を表象してみせました。霊界 **altera vita** では、このようなものも生き生きと表象することができるからです。鳥が表象されるのを見て、まずそれを変化させたいと思ったようです。しかしやがて喜んでいく様子になり、おとなしくなりました。鳥はものごとを知ることを意味し、何かを感じとる力がそのとき流れてきたからです (o)。

(o) 鳥は合理的なもの、理知的なもの、思念、概念、認識を意味する。40、745、776、778、866、988、993、5149、7441参照。

それでかれらは変化させることを止め、自分たちの記憶に概念を向けていくことを断念しました。そのあと、かれらの眼前に、灯と明りできらめく魅力この上ない庭園を表象することが許されましたが、そのときかれらはそれに目を止め、じっとしていました。明りのついた灯は、善をもとにして輝く真理を意味するからです (p)。

(p) 明りのついた灯は、善をもとにして輝く真理を意味する。4638、9548、9783参照。

それで物質的なものにたいしても、それをじっと眺めることができるのが分かりました。ただその物質的なものが、霊的な意味内容を含むときに限ります。霊的意味をもつものは、物質的なものからさほど抽象されていません。なぜなら霊的意味を表象するものだからです。

34. わたしはかれらと羊や子羊について話しました。ただしかれらは、このようなものについては聞きたがりません。地上的なものとして感じ取ります。つまり子羊が意味する純真無垢とは何か、理解しないからです。わたしは天界では、表象として子羊が純真無垢を意味すると言いました (q)。

(q) 天界と〈みことば〉での子羊は、純真無垢を意味する。3994、7840、10132参照。

そのときかれらは、純真無垢とは何か分からないと言いました。ただ単語としてしかそれを知らないのだそうです。理由は、知識の目的としての役立ちではなく、知識だけでき受け止めてないからです。それは純真無垢とは何かを内的な感知力で知ることができないためです。

35. 水星の霊たちの中から、他の霊たちに遣わされ、わたしの所にやって来た者がいました。それはわたしの場合、どんなふうに行われているかを知るためでした。それは、地球の霊のなかの一人が仲間に向かって、自分は真理しか話さないなど、かれらが行っているように、質問する人にまる反対のことを言って反論することはないと言ったためです。地球出身霊でそのようなことをする者がいると、罰せられるからです。

するとそのとき、当の霊たちを遣わしたグループが遠くにいて、そのような場合罰せられるなら皆罰せられる、なぜなら、役立ちを持続させるため、それ以外のことは出来ない

からだと応えました。そして自分も水星の人たちと話すときは、そのようにしていると言いました。それは騙すためではなく、知識欲をそそるためだと言います。それは、まる反対のことをいって反論し、はっきりしたやりかたでものごとを隠すとき、知識欲がそそられ、それを調べてみようという熱意から、記憶も完成されるということです。

わたしは別の時、同じことを、かれらと話しました。そしてかれらが自分たちの天体の人たちと話すことを知っていたので、そこに住んでいる人たちはどんなふうに教育を受けるのか尋ねました。かれらは応えて、人を教えるとき、物事をそのまま教えないで、物事についてある種の感知性をそそるようにすると言います。それによって、探求欲や知識欲が育まれ増していきます。何にでも応えることは、そのような欲を減じさせることとなります。更に加えて、真理がよりはっきり現れてくるためにも、反対のことを言うてみるのだそうです。真理はすべて対立したものに関係し、そこから現れてくるからです。

36. かれらは習慣として、知っていることを、だれかれに言うことはありません。それでも各自が知っていることを皆から教わりたいと思っています。ただしかれらは、自分たちの社会のあいだで何でも交流をおこない、一人が知っていることは全員が知り、全員が知っていることは、そこにいる各自が知っているようにします

(1)。

37. 水星の霊たちは知識を豊富にもっているため、ある面では傲慢さがあります。これ以上知ることはいくら沢山のことを知っていると思っています。ところが、わたしたちの地球の霊たちがかれらに向かって、知っていることは少なく、僅かであると言いました。知らないことは知っていることに比較すると、無限であること、そして知らないことを知っていることに比較すると、大海の水と小さな泉の水のようなものだ、知らないことはあまりにも多くて、知っていることはほとんど何もないことを知り、認め、感じることこそ、英知の始めだと言いました。

それがよく分かるため、ある天使的霊がかれらと話すチャンスが与えられました。天使霊はごく一般的に、かれらが何を知り、何を知らないかを伝えました。知らないことは無限であり、永遠にいたるまで、物事の普遍的共通性 *communia rerum* を知ることは決してできないと言いました。その霊は天使的な概念を使って、かれらより遥かに迅速に話しました。しかも、かれらが何を知り、何を知らないかを指摘しましたので、目を丸くするばかりでした。

そのあとで、わたしはかれらと一緒にだった他の天使が喋っているのを見ましたが、その天使は右の方にある程度の高さに姿を表わしました。その天使はわたしたちの地球出身の天使でした。その天使はかれらが知らないことを数多く数え上げ、そのあとかれらに覚えのない状態の変化をとおしてかれらと話していました。そのとき天使がかれらに、一つ一つの状態の変化には限りのないものが含まれていて、しかもその最も小さい変化にもそれがあるともしました。

かれらはそれを聞いて、自分の知識を鼻にかけていたため、自己卑下を感じ始めていました。このような卑下は、かれらの渦巻き状態が下へくだっていくことで表されます。

(なぜならかれらの一団は、そのとき渦巻き状態で姿を表しており、へそ臍の下の領域で左に向かう前面に距離を保っていました)。そしてその渦巻きは中心が空洞で両脇が高くなっていました。そこではまた相互補足的な運動があるのにも気がつきました。

それが何を示すか、また自己卑下によって何を考えているのか、かれらに言われたことは、両脇が高くなって見えるのは、まだ自己卑下をしていない人たちのことだそうです。それからわたしは、その渦巻きが分離していくのを見ましたが、まだ自己卑下をしていない人たちは、そこで他の者から離れ、自分の天体 **orbs** に向かって連れていかれました。

38. 水星出身の霊たちが、わたしたちの地球出身のある霊のもとにやってきました。その地球出身の霊は、この世にあるあいだ、教養の豊かきで有名でした(それはクリスチャン・ウォルフでした)。霊たちは、かれからいろいろ情報を得たいと思っていました。ところがかれが話すことは自然的人間の感覚的事物を越えることがなく、喋りながらも、名声を気にしており、しかも(だれしも来世では自分を取り戻すわけで)、この世にいたときと同じように、様々のものを系列にまとめたがり、そこから絶えず他のことを結論づけようとします。水星の霊たちにとって真理だと見えず認められないことを根拠に、多くのことをまと纏めあげ、このつな繋がりがそれ自身としても、結論と符合しないのを、「権威の曖昧性 **obscurum auctoritatis**」と名づけています。水星の霊たちはそこでかれに質問するのをやめました。それでただ、これはどう呼ぶかとか、あれはどうかという程度の質問で終わらせたわけです。しかもそのような質問にたいしても、物質的な概念を使って答えようとし、霊的なものがないので、かれのもとを離れました。

来世ではみな、この世で神を信じていればいるほど、霊的概念をつかって話しますが、神を信じていなければいらないほど、物質的に話します。いま、解明の好機と、来世における学者の運命について触れてみます。それにも、真理のため真理を知る愛に促され、超現

世的役立ちのために、自分なりにそれを瞑想して、理知を汲みとる人がいます。それにたいし、学者名のためにだけ真理を知ろうする人は、そのような固有の瞑想でなく、他のものから理知を吸収します。つまり学者の名声のためにだけ真理を求める人たちは、この世での榮譽や利得のために、超現世的役立ちのためではありません。そのような人たちについて経験したことに触れておきます。

左脇に沿って左耳にいたるまで、下のほうから突き抜けてくるある種の音を感じとりました。わたしはそこで懸命に何かを行っている霊たちがいるのに気付きました。それがどのような霊であるか知ることができませんでした。かれらは懸命にやったあと、わたしと話しあいましたが、かれらは論理学者、形而上学者だと言います。

しかもかれらはそのようなことに思考力を費やしましたが、それも学者と思われ、名誉と富とを得るためだったそうです。しかし今、惨めな生活を送っていると言います。それはそれ以外の目的をもって知識を獲得しなかったし、その知識によって自分の理性を開拓しなかったからだと嘆いていました。かれらの話し方はにぶく、いっこうに響きません。

そうこうするうちに、わたしの頭の上で、二人の者がたがいに議論を交わしていました。一体だれなのか聞いてみると、そのうちの一人は文筆の世界で格別著名な人で、アリストテレスと思わせるものがありました。もう一人はだれか口にされませんでした。そのときかれは、この世にいたときにあった状態に移されましたが、だれでも自分がこの世でもっていた〈いのち〉の状態に移されるのは簡単です。自分の〈いのち〉の状態は、すべて自分自身が担っているからです。

しかもわたしが驚いたことには、その人はわたしの右耳に自分をあてがって、そこで話しましたが、それはしわがれてはいても、健全なものでした。かれの話の感じからわたしが気づいたのは、かれは最初に上ってきたスコラ学者とは、全く違った性格をもった人ということです。しかもかれは、自分の思考の中から、自分が書いたことを全部排除してしまい、そこから自分の哲学を生み出したそうです。かれは、哲学用語を見つけ出し、思考の材料に適用しましたが、それは「単語の形式 *formulae vocum*」ともいわれるもので、内的なものはそれで描かれていました。以上のものにたいし、理性・思考がどう関わるかを知りたがり、かれはその情愛の喜び・願望に促されて、かれの霊が命じることに忠実にしたがいました。それでかれは、わたしの右耳に自分をあてがったのです。

それはスコラ学者と呼ばれているかれの弟子とは違ったやり方でした。弟子たちはむしろ、思考から用語にむかうのではなく、用語から思考にむかいます。したがって、まったく逆です。しかもその多くは、思考にも至らず、用語だけに固執します。かれらが適用す

る場合、自分が願っていることを確認するため、鵜呑みにしたことを固めようという欲望から、形だけの真理を虚偽に应用します。つまり、かれらにとって哲学的な事柄は英知を味わう手段であるより、むしろ気を狂わせる手段になってしまいます。光の代わりに暗闇に襲われています。

それでわたしは分析的な科学について、かれと語りあいました。かれが何巻もの書物で記すことができる以上のことを、一人の少年が半時間たらずで、もっと哲学的、分析的、論理的に話すことができると、わたしは言いました。その理由は、法則が靈界に由来するものであれば、人間の思考や言語は、すべて分析的であると言ったのです。そして哲学用語を出発にして人為的に話す人の場合は、繊維質や筋肉の運動について学んだ知識を出発にしてダンスを学ぼうとしている人に似ていると言いました。そのような人は、踊っているあいだ、精神が固くなって、ほとんど足を動かすことができません。しかしそのような知識がない人は、あらゆる運動繊維を、肉体全体に分散させることができます。それによって、肺臓、横隔膜、両脇、両腕、首、その他の器官にあてはめて考えられます。それを全部記述するには、書物が何巻あっても十分ではありません。

それと同じことが、用語をもとにして考える人にも当て嵌まります。それを実際に証明するのは当人です。そのような方法で考えることを学ぶなら、ものごとの進行秩序が逆になるとわたしは言いました。さらにだれでも愚か者になりたければ、そのように進行してみたらいいとつけ加えました。しかし役立ちについては、内面から考えてもらいたいものです。

それから、かれはわたしに、最高の神について、かれがどのような考えをもっているか示しましたが、その神は、頭のまわりに光輪をもった人間の顔として、みずからを表わしています。そして現在その人間自身が主であることを知っているそうです。光輪はみずからの力による神性 *Divinum ab Ipso* をあらわし、その光は天界だけでなく、宇宙にゆきわたり、配慮と支配を行っておられると言います。それにつけ加えて、天界にたいする配慮と支配を行っておられる以上、宇宙も配慮・支配しておられます。なぜなら、両者を分離することはできないからです。つけ加えてかれが言ったのは、かれは唯一の神を信じていますが、その属性と性質は、他の人が神々を拝み、その神々の名前で特徴づける数だけ存在しているそうです。

一人の婦人が姿を見せ、手をさしだして、わたしの頬をなでようとしています。わたしがそれに驚いていると、かれはわたしに向かって言いました。かれがこの世にいたとき、このような婦人がよくかれに姿を現したそうです。そしてかれの頬を撫でるようなしぐさをし

ますが、その手は美しかったということです。天使霊がいうには、このような人は古代人には時として現れたそうで、かれらは「パラス」と呼びました。かれにも現れましたが、それはある霊たちが出所になっています。その霊たちとは、人が古代に生活していたとき、哲学がないまま、思想概念を喜びつつ、思考作用におぼれた霊のことです。このような霊たちがかれのそばにいて、かれが内面から思考したため、かれと喜びを共有し、そのような婦人として表象的に姿を表したということです。

最後にかれは、人の霊魂、または「プニューマ」と呼ばれた霊について、どのように考えていたかを教えてくれましたが、それはエーテル状の目には入らない〈いのち〉であると言います。そしてかれは次のように言いました。

「わたしは自分の霊が死後も生きることを知っていました。なぜなら霊の本質には、思考する能力があるために、内部は死ぬことがないからです。それ以外には、自分の霊についてはあまりはっきりした考えがなく、むしろぼんやりしていました。それは、ある程度古代人からの言い伝えがあっても、自力でしか霊魂について知ることがなかったからです」と。

ついでながら、来世ではアリストテレスは健全な霊の間になっている反面、かれの追従者たちは愚か者の間になっているということです。

39. わたしは、わたしたちの地球出身の霊が、水星出身の霊のところにおいて、おたがいに話し合っているのを見ました。そのとき地球出身の霊たちが質問していました。その質問の中で、水星の霊たちがだれを信じていたかを尋ねていました。すると神を信じていたと応えました。それからその信じていた神についてそれ以上のことを尋ねましたが、かれらは応えたりません。なぜなら、質問には直接には応えないのが、水星の霊たちの習慣だからです。

すると今度は水星出身の霊たちのほうから、わたしたちの地球出身の霊に、だれを信じているのか質問がきました。地球の霊は主なる神を信じていると言いましたが、水星の霊たちは、

「わたしたちにはぴんと来るのですが、地球の霊たちは何の神も信じていませんでした。ただ口では、自分たちが神を信じていると習慣的に言っていますが、実際には信じていません」と。（水星の霊たちは非常に繊細な感知力をもっています。つまり絶えず感知力という手段を使って、他の人たちが知っていることを探求する性格があるからです）。わたしたちの地球の霊たちは、この世で教会の教義にもとづく信仰を告白してきましたが、信

仰にもとづく生活を送ってきませんでした。信仰の生活を送らなかった人たちは来世では信仰がないこととなります。なぜなら本人のなかにはその信仰が存在しないからです

(r)。

(r) 教義に根差した信仰を告白しても、信仰的生活を送っていない人には、何の信仰もない。3865、7766、7778、7790、7950、8094参照。この世にいるあいだ意識しなくても、かれらの内部は信仰の真理に反している。7790、7950参照。

かれらはこれを聞いて、黙ってしまいました。それはその時かれらに与えられた感知力によって、その通りであることを認めたからに他なりません。

40. かつて水星の霊たちは主を見ることが許されていたのを、天界から聞いて知っている霊がいました。それでわたしの周りにはいる霊たちが、かれらにそれが許されていたことを覚えているかどうかを尋ねると、覚えているということです。ただそれについて何の疑いも挟む余地のないほどかどうかは、知りませんでした。

そのようなことをお互い話し合っているうちに、天界の太陽がかれらに姿を現しました。(天界の太陽とは主を指しますが、内奥の第三天界の中にいる人にしか、それが目に入らないそうです。その他の人はそこからの光を見ています)。太陽を見て、それが主なる神ではないと言います。み顔を見ていないからだそうです。そのあとも、霊たちはお互いに話し合っていました、何を話しているのか、わたしには聞き取れませんでした。

そのとき突然、再び太陽が現れました。その太陽の真ん中にはちうん日暈をまとして主がおられます。それを見て、水星の霊たちはふかぶかと頭を垂れ、静かになりました。そのときまた、この地球の霊たちにも太陽を通して主が現れましたが、かれらはこの世にいるあいだ、すでに主を見ていました。かれらの中から一人また一人と主を告白し、それが主ご自身であると、沢山の者が順番に告白しました。かれらはまた全会衆の前で告白していました。そのときまた、主が太陽をまとして、木星出身の霊たちにも現れました。かれらは、木星にいて宇宙の神としてかれらに現れたとき見たので、それが主であると、はっきりした声で言っていました(s)。

(s) 主が天界の太陽であり、すべての光はそこからくる。1053、3636、4060参照。主への愛が支配している主の天界の王国にいる人たちには、主が現れる。1521、1529、1530、1531、1837、4696参照。右眼の領域の上、中位の高さに現れる。4321、7078参照。〈みことば〉のなかの太陽は、神的愛の面

から見た主を表す。2497、4060、7083参照。この世の太陽は、霊や天使たちには姿を現さない。その代わり、天界の太陽すなわち主の側とは反対方向の背後に、何か暗いものとして現れる。9755参照。

41. 主が姿を現された後、右の前方にむかって去っていく者がいました。かれらは進みながら言いました。

「かつて見たこともないほど、明るく純粋な光を見ました。それ以上の光も見たことはありませんでした」と。

その時は、夕方でした。以上のようなことを口にした者は沢山いました（t）。

（t）天界には大きな光があり、それはこの地上の昼間の光より、遥かに高い程度の光である。1177、1521、1533、1619～1632、4527、5400、8644参照。天界にあるすべての光は、天界の太陽である主からくる。1053、1521、3195、3341、3636、3643、4415、9548、9684、10809参照。神の真理は、主の神愛に属する神の善から発しているが、天界ではそれが光として現れ、天界にあるすべての光を供給する。3195、3222、5400、8644、9399、9548、9684参照。天界の光は、天使たちの視力と理性を照らしている。2776、3138を参照。天界で光と熱のうちにあると言うと、英知と愛のうちにいることを意味する。3643、9399、9401参照。

42. この世の太陽は、霊にとって、まったく姿を現さないか、光さえないことを知っておかなくてはなりません。霊や天使たちにとっては、この世の太陽の光は、深い暗闇です。この世にいたとき太陽を見ているので、霊たちには感知できますが、それでもかれらには考えの中では何か黒々としたものとして、記憶にとどまっています。しかもだいぶ遠くの背後にあって、頭の領域の少し上の高さにあります。

その太陽の世界内にある惑星は、太陽にたいする関係から、それなりの固定した位置にしたがって現れます。水星は背後にあって少し右寄りです。金星は左にあって多少後ろになります。火星は前方左側です。木星は同じく左側の前方でも、ずっと遠くにあります。土星はかなり遠くにあって、はっきり前方に見えます。月は左で相当高いところです。諸衛星は、その所属する惑星に対して左側です。

以上が霊たち天使たちの考えのなかでの諸惑星の位置です。

また霊たちは、自分たちの惑星に沿って姿を現し、その惑星の外にいます。とりわけ水星の霊にかんして言えば、かれらは一定の方位に現れるのでもなく、一定の距離をとるわけでもありません。むしろあるときは前方に、あるときは左側に、あるときは多少背後の方に現れます。その理由は、水星の霊は知識を獲得するため、宇宙を巡回することが許されているからです。

43. あるとき水星の霊たちが球体の左側に姿を現しました。そのあと、渦巻状になって広がっていきました。わたしはかれらがどの方向にいくのかと、びっくりして見ていました。この地球にくるのか、あるいは他の天体だろうか。やがて注意してみると、かれらは右側に折れ、回転しながらある天体、すなわち金星の方に近付いていきました。それは金星の前方の領域でした。しかしそちらの方に行ってから、金星人は悪人なので、そこに行きたくはないと言います。それで水星の霊たちは金星の後方の部分に折れていきました。そのとき、そこにいる人たちは善人なので、そこにとどまっていたと言いました。それが行われたとき、大脳 **Cerebrum** (訳注・Cが大文字になっている) のなかで、著しい変化が行われたのに気づきました。それからくる強力な作用でした。

そこで生まれた結論はこうです。すなわち惑星でもその部分出身の金星霊は、水星霊とウマがあうということです。つまりかれらは非物質的なものの記憶にかかわっていることです。これは水星霊のかかわる非物質的なものへの記憶に関係があります。だからこそ、かれらがそこにいたとき、金星の霊から比較的強い作用を感じたことになります。

44. わたしは水星の霊たちがどんな顔付き・体つきをしていたのか、わたしたち地球人と似ているかどうかを知りたいと思いました。そのとき、わたしの眼前に、この地上の女性とまったくよく似た女性が現れました。美しい顔立ちをしていて、地球の女性よりも小さい感じです。背丈は同じくらいで、体つきはもっとすらっとしています。頭には飾り気のない布で覆われていても、気品があります。男性も姿を現しましたが、地球人より、やはりすらっとした体つきをしています。その男性がまとっている衣服は濃紺で、体にぴったりです。そこには折り目やひだ襷がありません。それから牡牛や牝牛も姿を現しましたが、わたしたちの地球のそれとあまり違いありません。ある程度、牡鹿や牝鹿に似ていて、やや小さい感じです。

45. 水星の霊たちに、かれらの太陽がどんなふうに水星から見えてくるか尋ねました。かれらは大きく見えると言います。他の惑星から見るよりは大きく見えるそうです。それが分かるのは、太陽にかんして、他の霊たちから聞いたから知っていると言います。気温については、暑くもないし寒くもなく、中くらいだそうです。その時、かれらに次のように言うチャンスがありました。水星は他の惑星より太陽に近いので、過度に暑くならないよう、主がそのように配慮されたわけです。熱は太陽に近いからというより、大気の高さと層からくるもので、それは温暖の季節でも、高山では寒いということだけでなく、太陽光線の照射が直射か斜めかによって、熱も変化することからも明らかです。以上は水星の霊や住民について知らされたことです。

木星という惑星天体と、そこにいる霊・住民について

46. 木星の霊や天使たちとは、他の惑星出身の霊・天使たちより、比較的長いあいだお付き合いしたので、その惑星に住んでいた霊・天使たちの〈いのち〉の状態については、記憶にとどめることができました。かれらが木星出身であったことを、多くの事象から、また、天界からも教わりました。

47. 木星という天体または惑星は、霊や天使たちには姿を現しません。霊界には、この世での大地がかれらに姿を見せるようなことはありません。ただその天体出身の霊や天使が姿を現すだけです。木星出身の者は、左の前方にある程度の距離で姿を現し、しかもそれが恒常的です（前42節参照）。そこはまた惑星が存在するところでもあります。それぞれの天体出身の霊たちは、自分の出てきた天体のそばにいます。それは単に、かれらは住民だったからです（人はだれしも死んだ後霊になります）。しかもその霊たちは似た天性をもっていて、住民の側にいて、かれらに仕えることができるからです。

48. かれらはこんなことを話しました。

「わたしたちが、前世で住んでいた大地には、その土地が養うことができるだけの大きな人口がありました。しかも肥沃だったため、産物に溢れていました。自分たちは、生活の必要以上に欲ばることはありませんでした。しかも必要でないものは、役立ちにも関係ありません。なにしろ非常な数の人口でした」と。

また、次のようにも言いました。

「わたしたちが一番心をかけていたのは、幼児教育でした。そして幼児を最大の優しさで愛しました」と。

49. それからかれらは、次のように話してくれました。

「木星では、民族、氏族、家族で分かれています。そしてみんな個々別々に身内といっしょに住んでいます。そのためわたしたちの付き合いは親しい間柄だけで、ある人が他の人の財産を欲しがるとはなりません。また他の人の所有物の何かを欲しがるとはならず、心に浮かんできませんし、ある手段でそれを手に入れようなども考えられませんし、侵略したり強奪したりなど、もつての他です。そのようなことは人間性に対する大罪で、恐るべきことだと思っています」と。

わたしがこの地球には、戦争、強奪、殺戮があると言おうとしたのですが、そのときかれらは顔をそむけ、聞こうともしませんでした。

この地球でも、最古代人は同じように暮らしていたと、わたしは天使たちから聞きました。天使たちが言うには、

「みな民族、氏族、家族に分かれていて、当時みんな自分の財産に満足していました。他の人の財産を利用して富を築きたいとか、自己愛に根差して支配したいなど思いもよらないことでした。したがって、古い時代にあっては、特に最古代は、それ以降にくらべ、ずっと主に受け入れられていました。そのような状態でしたから、当時は純真無垢が支配していて、それに英知が伴っていました。そして各自が善に根差して善をなし、正義に根差して正義を行っていました。自分の名誉のためとか利得のために、善や正義を行うなど、関知しないことだったのです。また当時は真理しか口にしませんでした。しかも真理に根差して話すというより、善に根差して真理を語るというわけで、それは結局意志から遊離した理知でなく、理知と一体になった意志に根差したものでした。古代とはこんなふうだったのです。したがって当時は天使たちは人間と語りあいました。そして天使たちは、人間の精神を肉体的なものから引き離さんばかりに、天界に向けて拉致することもできましたし、あちこち案内しては、天使たちがもっている幸福と喜びを分かち合うため、壮大なもの、楽しませるものを示すこともできました。

このような時代のことは、古代の文筆家たちに知られていて、かれらは「黄金時代」また、「サトゥルヌス時代」と呼んでいました。このような時代が存在したわけは、かれらは民族に分かれ、民族は氏族に、氏族は家族にわかれ、それぞれの家族が独立して生計を営んでいたことです。それで当時は他人の遺産に手をだしたり、その財産を自分のものにして、自分の配下に置こうなど、考えもおよばないことでした。自己愛や世間愛などは、はるか縁のないことでした。当時は各自が自分のもので満足していましたし、他の人のもっている財産にも喜びを感じていました。

しかしこのような場面も変わり、時が経つとともに、反対方向に転じました。そして支配欲と所有欲が心に侵入してきました。それで人類は自分を守るため、王国や帝国を造ろうと集合しました。かつて心に刻まれていた仁愛や良心の掟が消えてしまったので、暴力を制圧するために法律を作りました。それで名誉や利得が報酬となり、その剥奪が刑罰ということになりました。このようにして状態が変わった結果、天界自身が人間から取り去られ、現代にいたるまで、それがますます遠ざかっていきました。そして天界が存在し、

地獄が存在するということさえ分からなくなり、その存在を否定する人すら出てきた始末です」と。

このような話がなされたわけは、木星の人たちがどんなふうな状態かを地球人と比較しながら説明するために他なりません。木星の人たちには、素直さや英知がありますが、それについては次の節で詳しく述べます。

50. しばらくのあいだ木星の霊たちと付き合った結果、かれらは他の多くの天体の霊たちよりずっと素直であることが、わたしにははっきりしました。かれらがやって来た時の顔合わせにしても、それからの滞留や流入なども、表現できないほど優しく甘味です。情愛の交流による流入をとおして、来世では各々の霊の性格が現れます。優しさや甘味さで素直であることが分かります。人を傷つけまいとすることからくる優しさ、人に善を為すことを愛することからくる甘味さがあります。わたしたち地球の善霊からも優しい甘味な流入がありますが、それと木星の霊たちの流入は、いちじるしく違っているのにわたしは気づきました。

かれらは仲間同士でも軽い衝突があつて、そのときはそれが淡くて明るい光線のように見えます。それは稲光のようでもあるし、ピカピカ光ってさまよ彷徨う星の束のように見えます。ただしかれらの衝突はたちまち調整されます。ピカピカ光りつつ彷徨う星は偽りを意味します。ピカピカ光りつつも固定した星は真理を意味します。したがって、前者は衝突を意味することになります (u)。

(u) 〈みことば〉での星は、善の認識と真理の認識、つまりは諸真理を意味する。2495、2849、4697参照。来世では固定した星は諸真理を表し、さまよ彷徨う星は偽りを意味する。

51. 木星の霊たちが側にいると、かれらの接近や流入に含まれる優しさや甘味さでそれと分かるだけでなく、最大限に顔に影響する流入によってそれが分かります。その流入で顔が快活で笑いを帯びてきます。それもかれらが側にいるあいだ、ずっとそうです。かれらは言います。

「わたしたちは、木星の住民のところに行って、精神的な静けさと楽しさを吹き込みたいと思うと、住民の顔に影響します」と。

かれらがわたしに吹き込んだ静けさと楽しさが、肺と心臓を満たすのを感じました。欲望や未来にたいする心配などは、不安や不快感を引き起こし、精神を様々な方向に動かし

ますが、それが取り去られます。そこからわたしは、木星の住民の〈いのち〉がどんなふうだったか分ってきました。住民たちの天性は、霊たちを見れば分かります。霊はそれぞれ自分の〈いのち〉をこの世から持ち運んでいき、霊になっても、その〈いのち〉を生きるからです。

なおかれらには内面の至福・浄福な状態が存在していることに気づきました。これに気づいたのは、かれらの内部が閉じられておらず、天界に向かって開かれているのを感じとったからです。内部が天界に向かって開かれていればいるほど、神の善を受け入れるに相応しくなり、同時に至福の思いと内的幸福を受け入れます。それに対し、天界の秩序のうちに生きていなかった者たちは、様子が大部違います。かれらの場合、内部が閉じられていて、外部がこの世にたいして開かれています。

52. 木星の住民がどんな顔をしていたかも、わたしに示されました。わたしが見たのは住民自身ではなく、木星に住んでいたときと同じような顔付きの霊たちです。その顔を見せてもらう前に、許しを与える明るい雲が見えた後、かれらのうちの天使が一人現れました。そしてその時二人の顔が見えてきました。その顔はわたしたち地球人の顔に似ていて、明るく、美しい顔をしており、その顔から誠実さと謙虚さが光り輝いていました。木星の霊たちがわたしの側にいたとき、わたしたち地球人で、普通より小柄の顔が見えました。そうなったのは、その霊たちから、自分たちの顔のほうが大きいという考えが流れてきたためです。木星に人間として住んでいるとき、死んだ後は顔が比較的大きく、形も丸くなると信じているわけで、その考えがかれらの心に刻まれ、それがずっと残って、霊になったとき、自分にとっても大きな顔となって姿を現します。

やがて顔が大きくなると信じていた理由は、かれらに言わせれば、顔は体ではないということ。顔をとおして、見たり聞いたり話したり考えたりしていることを表すからです。このようにして顔をとおして精神が輝き出るわけで、顔については精神の形であるという考えをもっています。しかもこの世での命のあと、遥かに英知をもつようになることを知っているため、精神の形である顔が、いっそう広くなくとも信じることになります。なお死んでからは、かれらの顔を熱くする火を感じるようになるかと信じています。かれらの中で英知にすぐれた人が分かっているように、そこからかれらが帰結することは、火は霊的意味では愛を意味し、愛は〈いのち〉の火であること、またその火から天使たちには〈いのち〉がいただけることを知っています(x)。

(x) 〈みことば〉における火は双方の意味での愛を意味する。934、4906、5215参照。神聖かつ天界的な火とは、神の愛であるとともに、その愛に属するあらゆる情愛である。934、6314、6832参照。地獄の火は自己愛と世間愛、およびその愛からくるあらゆる情欲を指す。965、1861、5071、6314、6832、7575、10747参照。愛は〈いのち〉の火であり、そこから現実的に起こる〈いのち〉そのものである。4906、5071、6032参照。

そのなかでも天界的な愛のうちに生きてきたものには、望むものを所有し、自分の顔が熱するのを感じとります。そのとき、かれらの精神の内部は、愛で燃えます。そのため、木星の住民は自分たちの顔をよく洗い清めます。そして注意して太陽の熱から保護します。それで青味を帯びた木の皮から造られた覆いを頭に巻いたり、顔を覆ったりします。かれらは、わたしの目をとおしてわが地球人の顔を見て、その顔が美しくないと言います

(y)。地球人の顔の美しさは外面の皮膚に依存していて、内部をもとにした繊維のうちにはないと言います。顔にあざがあつたり吹き出物があつたり、醜く見える人がいるのに驚いて、木星にはこのような人はまったくいないと言います。むしろ顔は快活に笑って微笑んでいるそうです。そして唇の周りがすこしばかり出ていました。

(y) 霊や天使たちは、この太陽系の世界にあるものを、じかに見ず、わたしの目を通して見ている。

53. 唇の周りが出ていて笑顔なのにも理由があつて、顔を使って話し、それも特に唇の周辺を使うため、自分が考えてもいないことを口にする見せ掛けはしないし、顔を強張らせることもなく、開けっ広げにしているためです。

幼い頃から見せ掛けを行うことを学んでしまった場合は違います。顔から自分の考えが外に漏れないように、内から顔を収縮させています。外部が開けっ広げになることはなく、こざ小賢かしさの命ずるまま、開放したり収縮したりします。唇の繊維やその周辺の繊維を観察した結果、真理はこうです。顔にある一連の繊維細胞は多岐にわたって複雑で入り込んでおり、それは食べたり、声を使って話したりするために造られているだけでなく、精神的な思想を表現するためにも造られているわけです。

54. また考えていることが、どのように顔をとおして現れるかが示されました。愛からくる情愛は表情とその変化をとおして示され、そこにある思考内容は、顔の内面の形による多種多様性で表されます。それ以上のことを描写することはできません。

木星の住民にも言語がありますが、それはわたしたちの言語のように音声によるものではありません。一つのコトバはもう一つのコトバを助けます。そして、顔による話しコトバの〈いのち〉が、音声によるコトバに灰めかされていることです。

わたしが天使たちから聞いたことは、それぞれの惑星にあつて、あらゆるコトバの出發は顔を通して表すコトバだったそうです。そこにはまた二つの源泉があります。それは、唇と目です。そのようにしてコトバが生まれてきたわけは、人が考えたり欲したりすることを具体的に肖像化するため顔が形造られたからです。人の顔が精神の肖像であるとか、指標であると言われるのはそのためです。これは、最古代または初代にあつては、正直というものが存在していましたし、人は顔からそれが輝き出るということで、自分が欲することしか考えなかったし、それ以外のことを考えたいとも思わなかったわけです。

このようにして、精神の情愛や思考が生きたもの、円満なものになり得ました。そして、形をとって目にも現れますが、そこで各種各様のものが同時に表現されます。このようなコトバは、音声によるコトバより、優れているわけです。これも、視覚は聴覚に先んずるもので、例えば野原の景色を目撃したあとで、それを耳にしたり、音声で表すものを理解したりするからです。

またそれにつけ加えて、次のように言いました。

「このような話し方は、その時代の人たちが交流していた天使たちの話し方とうまくマッチしていました。顔が語り、精神が顔をとおして語るとき、それが人間の最終的で自然の形態の話し方であることです。口を使い、音声を通して語るとき、そうはいきません。最古代人には、音声による話し方があり得なかったことは、だれにでも理解できます。なぜなら、言語音声は、直接的に注がれるものではなく、人為的な発明によるもの、事物にたいして適用されるものだからです。これは時代の変遷とともに生まれたものなのです」と (z)。

(z) この地球にも、内的呼吸を媒介に、顔や唇による話し方が存在した。607、1118、7361参照。他のある惑星天体の住民に、同じような話し方があった。4799、7359、8248、10587参照。この種の話し方の完全性と優秀性について。7360、10587、10708参照。

正直や公正が人間に存在するあいだ、このような話し方もまた存続しましたが、人が自分を愛し、隣人を愛さなくなると、精神はそれ以外のことを考え、それ以外のことを口にし始めました。そしてそのときを境にして、顔を変えず、しかも偽るようになって、音声による話し方が増えました。それ以来、顔の内面的な形が変わり、引き締まり堅くなりました。それにおよそ〈いのち〉のないものになり始めました。そればかりか、外面は自己愛の炎で燃えながらも、他人の目には生き生きしているかのように見え始めたのです。内在の〈いのち〉が欠けていることは、人の目にはつかず、その内部を見る天使の眼前には、姿をあらわします。このようにして、顔とは違うことを考え話す人たちになりました。現在は思慮からくるとされている仮装、偽善、二心、下心などは、そのような結果をもたらしました。

しかし来世ではそうはいきません。来世では顔と違うことを言ったり考えたりすることが許されていません。そこでの不調和は一つ一つの音声のなかで明らかに感じとられます。そして感じとられ次第、そのような不調和をもっている霊は仲間から放逐され、そして罰せられることとなります。そのあと、いろいろなやり方で、考えている通りを口にし、欲している通りを考えるように、つまりバラバラにならないような状態に戻されます。本人が善人であれば、善を欲し、善に根差した真理を考え口にするよう、悪人であれば、悪を欲し、悪に根差した偽りを考え口にするようになります。そうならない限り、善人もそれ以前に天界に上げられることはないし、悪人も地獄に落とされることはありません。それは他でもなく、地獄には悪と悪からでる偽りしかなく、天界には善と善からでる真理しか存在しないようになるためです。

55. その他わたしは、木星出身の霊たちから、木星の住民について種々教わりました。たとえば、かれらの歩き方、食べ物、住居についてなどです。その歩き方は、地球や他の天体の住民のように直立して歩かず、動物のように這うこともせず、前進するときは、てのひら掌で支えるようにします。そして交替で足の上に半分ほど体を載せます。また前進にあたって三歩行く毎に側面と背後に目をやります。その時わずかに、這うような感じで上体を曲げます。なぜならかれらにとって、顔以外のところを他の人に見られるのを恥とするからです。このようにして歩く時も、わたしたちがするように、いつも顔を上げています。それは天地の両方を見るためです。地上を見るため、うつむき加減にならないようにします。こうすることはかれらにとって呪われたものと呼ばれるからです。顔を上にあ

げる習慣がつかないで、そのようにする人たちは最低な人間としてかれらの社会から放逐されます。

かれらが座っているときは、上半身を直立させている点、わたしたち地球人と同じように見えます。ただし両足を十字に組んで座ります。座っている際も、歩いている時と同じように、背後からでなく正面から見られるように、極力注意を払います。自分たちの心がそこに現れることで、自分の顔を見てもらいたいと思っています。これも、心とは違う自分の持ちあわせない顔を決して見せないからです。そこに居あわせる人は自分にたいしてどんな感情をいだいているか、とくに現れてくる友情が本物か、わざとか、それを隠さないからこそ、はっきり分かります。かれらの霊たちによって、それがわたしにはっきり示されました。それがかれらの天使たちによっても確認されました。かれらの霊たちにしても、他の霊のように直立して歩かず、むしろ泳いでいる人が、両手の助けを借りて進みながら、ひょいひょい周りを見回しているようです。

56. 熱帯に住んでいる人たちは、もちろん腰の周りを覆ってはいますが、裸で歩いています。そして裸でいるのを恥ずかしがってはいません。なぜならかれらの心は純潔で、夫婦でなければ愛しあわないし、姦淫を恐ろしいこととします。地球出身の霊たちは木星の住民がそんなふうにして、しかも裸で歩いていると聞くと、嘲り、卑猥な目で見ただけでなく、木星人の天界の〈いのち〉より、そのような部分にだけ関心を示すので、それと知ってかれらはびっくりします。木星の霊たちは言います。

「それは天界的なものより、肉体的、現世的なものの方が関心の的になっており、だらしなさが心を占めている証拠です」と。それでまた地球の霊たちにむかって言いました。

「純潔と純真無垢の状態で生活している者にとって、裸でいるのは恥でもつまづ躓きでもありません。それは淫らで恥知らずの人にとっては、恥ずかしいことなのでしょう」と。

57. 木星の住民たちがベッドに横になるとき、かれらは顔を正面つまり部屋の中に向け、背後の壁の方に向けません。このように顔を主の方に向けるわけは、顔を背後にすると、主から顔をそむけることになるかと信じているからだ、と木星の霊たちがわたしにその理由を言ってくれました。わたしもベッドにいるとき、そのようなことが何回かありましたが、それがどこからくるのか、以前は全く知りませんでした。

58. かれらは時間をかけて食事をします。それは食物からくる楽しみのためでなく、そのときの会話の楽しみからくるからです。かれらが食卓に座るときは、腰掛けや台、高く盛り上がった芝生、草の上にも座りません。座るのはある樹木の葉の上です。それがどんな木の葉か言いたがりません。それでわたしはあれこれと推量で木の名前を口にしました。わたしがイチジクの葉と言ったとき、そうだと応えました。それにかれらが付け加えて言うには、食べ物を準備するとき、味で決めるのではなく、何よりも役立ちにしたがって決めるのだそうです。かれらにとって役立つ食べ物はおいしいとのこと。これについて、かれらのあいだで話し合いがありました。これは人間に適していると言います。健全なる精神は健全なる肉体に宿ると人の心に刻まれているためだそうです。

味が心を支配してしまっている人の場合は違います。そこで肉体が病んでいきます。あるいは少なくとも内部で病んでいます。それで心も病んでいることになります。なぜなら精神は、肉体にある内面の各部分の受け皿の状態にしたがっているからです。それはちょうど目や耳の状態にしたがって、視覚や聴覚も働くのと同じです。

贅沢や快樂に生命の喜びすべてをおくのは気違いじみています。そこから、思考や判断に関する事柄にたるみが生まれ、肉体やこの世的な事柄のなかではずる狡さができます。こうなるとケダモノと同じです。そのような人はケダモノとたいして変わりがありません。

59. わたしに、かれらの住居が示されました。それは木造の低い住まいです。しかし内部には、青白色の樹皮が使われています。それに周りの天井には、天界に似せて星々のような点が見えます。かれらの望みは、家の中にも星々を従えた可視的天界の模造をとり入れることです。星々を天使たちの住まいと信じているためです。そして、上部が丸くなったテントがあります。それは長方形に伸びていて、内部はまた青い天空が星でちりばめられています。そこにしばらく集まりますが、それは太陽の熱でかれらの顔がやられないためです。自分たちのテントを造り、綺麗にするようにかれらはたいそう気をつけます。そのテントのなかでかれらは食事をします。

60. 木星の霊たちがこの地球の馬を見たとき、それが馬らしい丈夫さと背たけを備えていながら、わたしには普通の大きさでも、小さい姿をしていると言います。これは木星の馬について木星霊がもっている考え方に由来します。かれらは言いました。

「わたしたちにも同じ馬がいます。しかしずっと大きい体をしています。馬は野生で、しかも森にいたりします。馬をみると恐ろしい感じですが、人に害を与えるようなことはありません」と。また付け加えて、

「自分たちにとって、生来のあるいは自然的な恐れが馬にたいしてありますが、それでその恐怖心の理由を考えてみるチャンスがありました。馬は霊的意味では科学的知識によって形づくられた理知を示します（a a）。

（a a）馬は理知を意味する。2760、2761、2762、3217、5321、6125、6400、6534、7024、8146、8148参照。また黙示録にある白い馬は、〈みことば〉の理解を示す。2760参照。

かれらが恐れているのは、現世に根差した知識をとおして理知性を高めることで、そのため恐れが流入が起きます。かれらは人間の教養にかかわる科学的知識に関心がないわけで、これは後述する部分ではっきりします。

61. 木星の霊たちは、わたしたち地球の霊たちと交際するのを望みませんが、それは気質も習慣も違うからです。かれらは言います。

「地球の霊たちは、ずる賢くて、悪をしかけるに素早く巧みです。善についてはほとんど知らないし考えません。それに、木星の霊たちは地球の霊たちよりずっと英知があります」と。またわたしたちの霊については、

「たくさんのお話をしますが、あまり考えません。ですから内面から深く多くのことを感じとることができないのです。それに善が何か分かっていません」と。

こうして結論としては、

「地球の人たちは外面的な人間です」と。

あるとき、わたしたち地球人の悪霊が自分なりのあくらつ悪辣なやり方で行動し、わたしの側にいる木星の霊たちに害を加えることが許されました。かれらはしばらく我慢していましたが、とうとうこらえ切れなくなったこと、またこれ以上悪い人はいないと信じるにいたったと白状しました。なぜなら、かれらの想像力も思考力も乱し、自分自身しぼられているようにしか見えないし、神のみ力によってそこから解放していただく以外にはないということです。

わたしは〈みことば〉の中にあるわが主のご苦難についての部分を読みましたが、そのとき、ヨーロッパ出身の霊たちが、木星の霊たちをあざむこうとして酷く躓きになることを注いできました。それはいったいだれか、また現世で何が起こったかが調べられ、それ

は、ある説教者であることが分かりました。自分たちを、主の修道会出身者またはイエズス会員と呼んでいる者がその中に多くいました。わたしは言いました。

「かれらは世に生きていたとき、主のご苦難についての説教で民衆を涙にさそうことができた」と。また、つけ加えました。

「かれらは世にあって、それ以外のことを考え、それ以外のことを話し、それ以外のことを心に抱き、それ以外のことを口にしました。しかし今かれらは、そのように欺瞞的に話すことは許されていません。なぜなら霊になってからは、考えた通りに話すことが余儀なくされているからです」と。

木星の霊たちは、内面と外面のこのような不一致が人間に存在することについて、びっくり仰天しました。口にして話すことと、考えていることが違うなど、かれらにとって不可能だそうです。わたしたちの地球出身者にも天使になった者がおり、全く違った心もっていると聞いて、かれらは驚いていました。わたしたち地球では、みなそれと同じだと、その時かれらは思っていたからです。それにたいして、そんなふうにならない人もたくさんいること、またある人たちのように悪に根差さず、善に根差して考える人もいて、善に根差す人は、天使になっていると言いました。

そのとおりであることが分かるためでしょう。わたしたち地球出身の天使たちからなるコーラス隊員が、次々と来て、一つの声に合わせて主に栄光を帰しました（b b）。

（b b）多くの霊たちが同時に一つ心で話すとき、コーラスと言う。2 5 9 5、2 5 9 6、3 3 5 0 参照。かれらが話すときの同心同意について。1 6 4 8、1 6 4 9 参照。来世ではコーラスによって、同心同意が始まる。5 1 8 2 参照。

わたしのそばにいた木星の霊たちは、そのコーラスによって非常にさわやかにされ、あたかも天界にむかって引き込まれていったように見えました。そのコーラスによる栄光の合唱は一時間あまりも続きました。そのときかれらが感じた喜びは、わたしにも伝わり、感じることができました。かれらはその喜びを他の場所にいる仲間にも伝えると言っていました。

6 2. 木星の住民は、生活のなかで起こってくる事柄について、善く正しく考えることが英知であると思っています。そのような英知は幼児の時代から始まって、両親から吸収します。そして両親のもとで英知が増すため、英知にたいする愛がもとになって、英知は順次子孫に伝えられていきます。わたしたち地球上で考えられているような諸科学につい

では、ほとんど何も知りませんし、知ろうともしません。そのような知識を「陰」と呼んでいます。それは太陽の下にある雲のようなものと考えます。諸科学については、わたしたち地球の出身者から知らされるわけで、地球出身者らは、科学的知識をもとにして自分が知者になったと吹聴します。

このように自己宣伝をする地球出身の霊たちは、単に記憶に関するような事柄に、英知があると思ってきました。たとえば、とりわけヘブル語、ギリシャ語、ラテン語についての知識、文学界で記録されたこと、評論、純粹実験にかかわること、またとくに哲学用語にかんすること、それ以外にもこれと似たようなたぐいです。そのような知識を英知への手段として使うのではなく、その知識自身が英知だと、かれらは思っています。かれらは諸科学を自分の合理的な能力を開拓するための手段として用いたわけではなかったため、来世では感知力がほとんどありません。ただ用語の中でものを見、用語から出発してものを見ます。このように見る者にとって用語それ自体は、理性の視野を覆うかさば嵩張りであり、雲のようなものです

(前38節参照)。それが元になった学問のせいで、傲慢になっていて、いっこうに感知力がありません。教会や信仰にかんすることを弱体化するか壊滅させるための手段として科学を使用した人は、自分自身の理性を徹底的に破壊してしまっています。そして、フクロウのように、真理を偽りと見、善を悪と見るように、暗闇のなかで物を見ています。

木星の霊たちは、以上のような人たちとの会話から、諸科学は陰をふやし、人を盲目にするという結論をくだしました。それにたいし、かれらには次のように言われました。

「地球では諸科学は、理性的な開眼をおこなわせるための手段です。そしてこのような理性の視力は、天界の光のうちにあるものです。ところが、単に自然的・感覚的な事柄が支配的であるため、かれらにとって諸科学は心を狂わせるための手段になっています。それは、神に対抗して自然を置き、天界に対抗して現世を置くことを確認する手段です」と。さらに言われたことは、次のとおりです。「諸科学は、そのものとしては霊的な宝庫です。それを所有している者は、この世の宝を所有しているのと同じです。ただしこれは、自分や隣人や国家に益する手段にもなるし、また悪を行うための手段にもなります。また、衣装にも似ています。衣服としての用途や装飾のために役にたちますが、同時に、ただ衣装だけで誉れを得たいと思っている人の場合のように、うぬぼれのために使うこともできます」と。

木星の霊たちは、以上をよく理解していました。しかしかれらが驚いていたことは、人間でありながら、人は手段に執着し、英知そのものより英知にいたる手段を優先すること

です。またそのような手段に溺れてしまって、それを越えて自分を高めようとしなければ、自らを曇らせ盲目にするわけですが、それを理解しないことです。

63. 下界 *inferior terra* から、わたしのところまで上がってきた霊がいました。それでわたしに向かって、

「あなたが他の霊たちと話していた事柄を耳にしましたが、霊的〈いのち〉また、その光について言われていることは、何も理解できませんでした」と言いました。

それで教わりたいかどうか尋ねたところ、そんな気持ちはないと言います。それを聞いてわたしは、その霊は以上のことが理解できまいとの結論をくだしました。かれは非常な愚か者でした。その男は現世にいたあいだ、学問では著名な人たちの中にいたと天使たちが言っていました。かれは寒がっていました、それはかれの呼吸からはっきり感じとれるものでした。それはかれのもつ光が単に自然的で、霊的なものが何もない印でした。なぜなら、諸科学によって、天界への光の道を開かないばかりか、閉ざしてしまっていたからでした。

64. 木星の住民たちはわたしたち地球人とはちがったやり方で理知を獲得します。それだけでなく、〈いのち〉からくる天性も違うため、ながく一緒にいることができません。地球人を避けるか、地球人を追い出すかします。かれらにはスフェア霊気があって、これは霊的なスフェアとも呼べるわけで、一人ひとりの霊からたえず流出します。むしろほとぼしり出ます。それはかれらの情愛の活動、さらに思考の活動から出てくるもので、それは〈いのち〉自身から出るものです (c c)。

(c c) 〈いのち〉の霊気ともいべき霊的なスフェアは、一人ひとりの人間、霊、天使から流出し、溢れ出、かれらを取り巻いている。4464、5179、7454参照。それが情愛の〈いのち〉から、さらに思考の〈いのち〉から溢れる。2489、4464、6206参照。来世では、その仲間づくり *consociationes* は、スフェアに基づいてなされ、分離離反 *dissociationes* についてもスフェアの違いからくる。6206、9606、9607、10312参照。

来世での仲間造りはすべて、スフェアにしたがって行われます。そのスフェアがマッチすれば、同心一致で一緒になり、和合しなければ、その不一致に応じて取り除かれます。木星出身の霊や天使たちは、巨大人の中では思考の想像性 *Imaginativum Cognitionis* の部分に関係します。したがって、内的部分の活動状態です。それにたいし、わが地球人の

霊は、身体の外部的部分にある各種各様の機能を受け持ちます。その機能は統治することを望んでも、思考の活動や想像性を内面から流出させることができません。そのため、両者のあいだには〈いのち〉のスフェアのあいだに反発があります。

65. かれらの神礼拝にかんして言えば、わたしたちの主を、天地を支配する最高神として認めることが基本になります。その方を唯一の主 **Unicus Dominus** と呼びます。肉体に〈いのち〉を宿しているあいだ、その方を認め、その方に仕えます。死後はその方を探し求めて、見つけます。その方はわたしたちの主と同一の方です。

唯一の主である方が人であることを知っているか尋ねると、かれらは皆その方が人であることを知っていることと応えました。なぜなら木星では多くの者が主を人として見るそうです。主は真理についてかれらに教えをたまわり、かれらにたえず導きを与え、善に根差し主仕える者には、永遠の〈いのち〉を与えられます。さらにかれらは、主がどのように生活を送り、どのように信仰するかを啓示されたと言いました。そして啓示されたことは、両親から子供たちへと伝えられ、そこから家族全員に教えが伝わり、一人の父から全民族に伝わっていくものであると言っています。かれらはまた、次のように付け加えて言いました。

「わたしたちにとって、教義は自分の精神に刻印されたように思えます。それで結論として言えることは、人に備わっている天界の〈いのち〉について、他の人が言っていることが本当かどうかは、そこから感じとられるだけでなく、自明のこととして認めています」と。

かれらは、唯一の主がわたしたち地球でお生まれになったことを知りませんでした。ただその方が人であるとともに、宇宙を支配しておられること以外は、あまり関心がないそうです。わたしが、

「わたしたちの地球では、イエス・キリストとお呼びしています。キリストとは油を注がれた人、すなわち国王という意味で、イエスとは救い主という意味です」と言うと、かれらは、

「わたしたちは主を国王として仕えているわけではありません。王政と言っては、現世的な印象が強いからです。ただ主を救い主として仕えています」と。

ところで、わたしたち地球出身の霊たちがいて、かれらの唯一の主がわたしたちの言う主と同じかどうか疑いを起こしましたが、かれらは、太陽の中に主を見たこと、その方が木星で見た方と同じだと気づいて、その疑いを晴らしたそうです（前40節を参照）。

あるとき、わたしの側にいた木星の霊が、かれらの言う唯一の主がわたしたちの主と同じかどうかの疑いを、一瞬引き起こしましたが、そのとき流れてきた疑いは、またたくまに消えていきました。それは地球出身のある霊たちから流れてきたものでしたが、そのときわたしが驚かされたことは、一瞬疑っただけで、かれらはずいぶん恥ずかしい気持ちを表すことです。そしてわたしに向かって、ある種の不信を引き起こしはしまいかと、公言しないように言いました。しかし現在は他のだれよりも、それをわきま弁えているそうです。

その霊たちは、ただお一人の主 **Unicus Dominus**こそ唯一の人 **Solus Homo** であること、すべての人はその方に根差して、「人」と呼ばれていると聞いて非常に感動し、喜びました。しかもその方の像になればなるほど、すなわちその方を愛し、隣人を愛し、その結果善の中にいればいるほど、人になるということです。なぜなら、愛と信仰の善こそ、主の像だからです。

66. わたしが主の愛と主の栄化について記してあるヨハネ第十七章を読んでいるとき、わたしのそばに木星の霊たちがいました。そこに記してあることを耳にして、聖性がかれらの心を満たし、そこにあるすべてが神聖 **divina** であると告白しました。

そのとき、不信仰だったわたしたち地球の霊たちがいて、たえず躓きになることを暗示してきました。降誕された幼児は、人間として生活し、十字架につけられたりして、他の人間と同じように見えたと言いました。しかし木星の霊たちはそれには注意を払わず、言いました。

「自分たちが恐れ嫌っている悪魔とはこのような人です」と。さらに加えて、

「かれらの心の中には、天界的なものはまったく何もありません。自分たちがカスと呼んでいる地上的なものだけです」と。また、

「わたしたち木星世界で、裸で歩いていたと聞いて、すぐ卑猥さが頭を占領したり、話を聞いても、天界的な生活については、まったく何も頭に浮かばないことから、よく分かりました」と。

67. 木星の霊たちが霊的なことがらで、どれほどはっきりした感知力をもっているかが、わたしにはよく分かりました。それは主が曲がった情愛をどのようにして良い情愛に変えてくださるか表象されたからです。かれらは理知的な精神を美しい形で表象しましたが、そのとき情愛の〈いのち〉に相応しい活動の形をそれに刻み込みました。言葉では言い表せないほど巧みにそれを行い、しかも上手にしあげたので、天使たちが褒めたほどで

す。そのとき、わたしたち地球出身の学者たちが居合わせました。かれらは理知的なものを科学的な用語に押し込めてしまっており、形相、実体、物質、非物質その他について、多くを記し、考えた人たちでしたが、以上のものを役立ちに応用することは一切できません。それに表象そのものも理解できていない始末です。

68. 木星天体では、だれかが唯一の主について曲がった意見をもつことがないよう、非常な注意が払われます。だれかが主について歪んだ考え方をするようになったと知ると、すぐさまかれに注意が与えられます。そして警告が与えられ、ついには罰をもって駆逐されます。よく見て知っている者が次のように言いました。

「もしこのような考えが、ある家族のなかに入ってきたとします。そうすると、その家族は中心から外されます。それは同僚たちによる死刑ではなく、呼吸の停止です。かれらにまず死の宣告を下してから、霊たちによって〈いのち〉が取り去られます。木星では、霊たちがその悪い霊たちと話し、かれらが悪事を働いていたり、あるいは後述するような悪事を意図した場合、懲罰を与えることになっています。したがって、もし唯一の主について悪いことを考え、改心しない場合、かれらに死の宣告が下されます。このようにして木星では主への信心が保たれますが、主はかれらにとって最高の神であるのです。

69. かれらは言いました。

「わたしたちには祝祭はありませんが、朝、日の出、夕方、日没にはいつも、わたしたちのテントのなかで、唯一の主に聖なる礼拝をささげます。また、わたしたちなりのやり方で賛美します」と。

70. わたしはまた、次のようなことを教わりました。木星でも自分を聖者と自称している人がいるそうです。かれらは、目下が増えても、自分を主人と呼ぶよう罰をもって命令します。宇宙の主を礼拝することを禁止しますが、それは自分たちが仲介的主人であって、宇宙の主にたいしては自分たちの公的祈りがあると言います。わたしたちの主である宇宙の主にたいしては、他の人たちのように唯一の主とはいわず、最高の主といますが、それは自分たちも主と自称しているからに他なりません。

かれらはこの世界の太陽を「最高の主のみ顔」と呼びます。太陽こそ最高の主の住居と信じており、そのため太陽も拝んでいます。ほかの住民たちはかれ等には背を向け、交際することを望みません。なぜなら、太陽を拝んでいるだけでなく、主と自称し、しかも目

下のものに仲介的主人として仕えさせているからです。霊たちは、かれらの頭にある覆いをわたしに見せてくれました。それは鈍い色をした塔状のキャップでした。

来世では、このような人は、左側のある程度の高さに姿を現します。そこで偶像のように座っていて、側にいる目下の者たちは、最初仕えています。しかしあとになって、目下の者たちから嘲笑されるようになります。驚いたことには、そこでかれらの顔はまるで火がついたように輝いていました。それも自分が聖者だと思っているところからきます。しかしたとえ顔が火のように輝いてみえても冷えきっており、熱くなろうと一生懸命です。かれらから輝き出ている火は、自己愛の火であり、無知の火です。

熱くなろうとしているとき、かれらは木を切っているように見えます。切っているときは、その木の下に何か人間的なものが現れますが、そうすると、かれらはそれを崩そうとします。このようになるのは、功績と聖性が自分のお陰と思っているところからきます。この世でそのようにしていると、来世では自分でも木を切っているように映ります。他のところで述べているように、それはわたしたち地球出身者の中にもそのような人がいます。それをはっきりさせるため、わたしはかれらについても、ある実験を試みてみました。

「足の下にある下界には、また慈善や行いを自分の手柄にしていた人がいます。多くは自分では木を切っているように見えます。かれらがいるところは普通より寒く、それぞれの労働に応じて、暖を得ているようにかれらには見えます。わたしはかれらと話し、『そんなところから出たいとは思いませんか』と言うと、『まだ労働によって手柄を積んでいません。その状態が終わったら、ここから出ていきます』と言います。

かれらは、救いを得ることを手柄と考え、霊的になれません。また手柄は主からでなくエゴからくるもので、自然的です。かれらはさらに自分を他の者の上に置き、中には他の者たちを軽蔑する者もいます。かれらは来世で、他の者以上のよろこびを得られない場合、主にたいして憤ります。したがって、かれらが木を切っていると、木の下に主の何かがあるように見えます。これは憤りからくるものです」と（d d）。

（d d）主にたいしてだけ功績と正義がある。9715、9975、9979、9981、9982参照。行いが手柄と思ったり、自分がやった善によって天界を褒美として得たいと思う場合、来世では仕えられたいと思うし、決して満足しない。6393参照。隣人を軽蔑したり、報酬を受けない場合、主ご自身にたいして怒りをいさぐ。9976参照。来世でのかれらの運命について。942、1174、1877、2027参照。下界にあって、木を切っているような姿で現れる人の部類について。110、4943参照。

71. 木星天体では、霊たちが住民と会話し、かれらを教え、また悪いことをした際は懲戒するのが普通です。それについてかれらの天使たちから、わたしはいろいろ話を聞きましたので、それを順序よく記録しておきます。

木星で霊たちが人と会話をする理由は、かれらが天界について、また死後の〈いのち〉についてできるかぎり考え、この世の〈いのち〉についてあまり心配しないところからきます。かれらは死んでも生きること、そしてこの世で形成された本人の内部の状態に応じて、幸福な境涯にいたることを知っています。

わたしたち地球でも古代では、霊や天使たちと会話することは、同じような理由から珍しいことではありませんでした。そのころ人は、この世については僅かながら、天界についてよく考えました。しかし、人が内的な人間から外的になり、同様に天界についての考えは僅かで、この世についていろいろ多くのことを考え始めてから、時が来て天界との生きた交流が閉鎖されてしまいました。それに天界や地獄の存在だけでなく、死後も生きる霊的人間の存在さえ信じなくなって、いっそうそのようになりました。現在では、肉体がそのものの力で生きていて、自分の霊によって生きてることさえ信じません。したがって、人が肉体とともに復活するという信仰をもっていなければ、現在復活にたいする信仰は何もないことです。

72. 木星の住民の側には霊が付き添っています。たとえば懲戒する霊、教導する霊、管理する霊がいます。懲戒する霊は左側面に集中し、背後に回る傾向があります。そこにいて、人の記憶からその人の考えていることや言っていることを全部引き出します。霊たちにとってこれはたやすいことです。なぜなら、人の方向にむかっていくと、その人の記憶のなかに入っていくからです (i)。そして本人が悪いことをしたり、悪いことを考えたりしたと分かると、その人を諫めます。そして関節、足、手などに、苦痛をもって懲戒します。あるいは腹部近辺に苦痛を与えます。しかも、許され次第、霊たちはそれを巧みに行うことができます。かれらが近づくと、怖さを伴った恐れをもって人を打ち始めるため、人は霊がきたことに気がつきます。

霊でも、人にやってきて脅しで人を打つことができるのは悪霊です。特にこの世にいたとき、盗人だった霊です。そのような霊が、出身天体の住民のところにやってくると、どんなふうになるか分かるよう、そのような霊がわたしにも近づいてくるのが許されました。その霊が近づくと、怖さを伴う恐れがわたしの心を占領し、これがはっきり認められました。それも、その霊が側にいることを知って、内的でなく外的に恐怖を感じたので

した。その霊は雲間に流れる星をともなって、漠然とした雲のように見え、現われました。流れ星は偽りをあらわし、固定した星は真理をあらわします。

(u)。その霊はわたしの左側面に背後にむけて集中してきました。そしてわたしの記憶から引き出し、しかもわたしの行状や思考を悪く解釈して、わたしを責め始めました。

ところが、それが天使たちによって妨げられ、わたし自身木星出身ではないと感じとって、わたしと会話し始めました。そしてかれが人のところにやってくると、その本人が行ったこと、考えたことの個々全体が分かると言います。そしてその本人を激しく責め、いろいろな苦痛で懲戒するのだそうです。

また別のときに、このような懲戒役の霊がわたしのところにやってきて、身体の中央の下の左側面に集中して、前の霊とおなじように、わたしを罰しようとしてきました。これもまた天使たちによって禁じられました。そして同天体出身の人間にたいし、悪いことをしたり、悪事を意図したりした場合、許されている種類の罰だと、わたしは教えられました。関節の痛み以外に、腹部中央あたりの押さえつけるような痛みもあります。また、窒息するほど波状的に呼吸停止がおこなわれます。時にパン以外は何も食べられないという禁断状態があります。ついには、このようなことを絶えず行うことで死の脅迫さえあります。そのときは、妻、子供、友人からくる喜びが奪われ、それによって起こる苦しみが暗示されます。

73. 教導を担当する霊たちは、かれらの前面寄り左側面に集中します。その霊たちはとが咎めることはあっても、優しくそれを行い、むしろどのように生活を営むべきかを教えます。漠然とした姿で現れますが、前掲の霊たちのように雲のようではなく、袋状の衣服を身につけています。前者が懲戒者 *castigatores* と呼ばれたのにたいし、後者は教導者 *instructores* と呼ばれています。このような霊が居合わせる場合、天使霊たちも居合わせます。天使霊たちは頭部に居をかまえ、ある特殊なやりかたで頭部を満たします。天使霊たちが頭部に現存するときは、やわらかな呼吸でそれと分かります。なぜなら天使霊たちは、人がその接近・流入によって、苦痛や心配をわずかでも感じることはないかと心配します。天使霊たちは、懲戒・教導を担当する霊たちを監督します。そしてかれらが主のみ許し以上に悪いことをしないよう、霊たちが真理を語るよう指導します。わたしの側に懲戒霊がいるときは、天使霊たちもそこに居合わせます。そしてわたしの顔を絶えず快活で微笑みを浮かばせるようにし、唇のまわりを浮き出させ、わたしの口を少しばかり開かせます。天使たちは、主のお許しさえあれば、流入によってこれを簡単に行います。出身天

体の住民にたいしては、霊たちが居合わせると、このような顔付きをさせるものだそうです。

74. 懲戒と教導のあとで、人が再び悪いことを行ったり、悪事を考えたり、また真理の掟に基づいてこれを抑制するようにならない場合、懲戒の霊はふたたびやってきて、いっそう厳しい罰を与えます。ただし天使霊は、行いのなかにある意図とか、考えの中にある意志にしたがって、その罰を軽減するようにします。

そこで、かれらの頭部に居をかまえている天使たちは、人間にたいしての判決では、それを許したり、和らげたり、抑制したり、流入を与えたりする役割を担っていることがはっきりしました。それでも次のように言われました。

「わたしたちは判決を下すことをしません。主おひとりが裁き主です。懲戒霊や教導霊が命令することは、すべて主からわたしたちに向けて流れてきます。だからそれがわたしたちからきているように見えるのです」と。

75. 木星の霊たちは人と話しますが、反対に人が霊たちと話すようなことはありません。霊たちも人にたいし、これこれのことをもう行わないようにと教える言葉程度です。人は他の人にたいし、霊が自分と話したことを洩らしてはいけないことになっています。そのようなことをすると、あとで罰せられます。その木星の霊たちは、わたしの側にいたとき、最初わたしが木星人だと思っていました。しかし、わたしがその霊たちと順番に話をかわし、しかも話の内容を公表し、それを他人に伝える希望のあることを知って、別人のもとにいるのに気がついたわけです。霊たちにとっては、木星以外の人たちを懲戒したり教導したりすることは許されていません。

76. 霊たちが人のそばにいる場合、二つの印が現れます。霊たちは白い顔をした古代人を目にしますが、それは真理以外の何も話してはならないし、正義以外の何も行ってはならない印です。また、かれらは窓にも顔を見ますが、それは今いるところから降りるよいうという印です。古代人はわたしにも姿を現わしたし、窓にある顔も見かけました。霊たちはそれを見て、わたしからただちに離れていきました。

77. 今述べたような霊以外に、それと反対のことを教え込もうとする霊がいます。かれらはこの世にいたとき、悪辣だったため、ある人たちの社会から放逐されました。その

霊たちが近づくと、顔に近づいては消える飛び火のようです。人の背後にむけ下のほうに位置をしめませんが、上のほうに向けて喋ります。天使たちのもとで、教導霊の言ったことと反対を言います。つまり言われた通りの生活でなく、むしろ気ままに許されているからなど、それに類することを言います。先行する霊たちが去ったあと、すぐやってくるため、人はその霊がだれでどのような正体なのか分かり、そのような霊を放っておきます。しかしこのようにして、悪とは何か、善とは何かを学びます。なぜなら善が何かは悪をとおして学び、こうして善がどんなものかもその反対をとおして知ることになります。ものが感知できるのは、多様なやり方と程度にしたがい、その丸反対のものから区別する相対的な反省によります。

78. 懲戒霊や教導霊は、自分を聖者とか仲介主 **dominus mediator**（前70節参照）と呼んでいる人には、木星にいる他の同様の人になりたいするように、近づきません。自分が教えられることに我慢できないし、訓練をもって矯正されることもないからです。自己愛がもとでそのようになるわけで、柔軟性がありません。霊たちは言います。「そのような人は、冷たいので分かります。その冷たさを感じて、その人から離れます」と。

79. また、木星出身霊のなかには、炉清掃人 **caminorum purgatores** と呼んでいる霊がいます。服装がそれに似て見えるし、顔が煤けて見えるからです。その霊がどんな霊か、許されて描いて見ることにしました。そのような霊でわたしのもとに来た者がいました。そして天界に入ることができるよう、自分のために執り成してくれるように懇願してきました。そして、「わたしは、木星の住民を非難しただけで、悪いことをしたとは知りませんでした」また、「非難したあと、その人たちを教えました」と付け加えました。

それからわたしの腕の下の左脇に接触してきて、うわずったような声で話しかけてきました。その霊はれんびん憐憫を起こさせることが出来ました。しかしわたしは次のように応える以外にはありませんでした。「わたしは何もお役にはたてられません。それはただ主だけがお出来になることです。それに執り成しもできません。それがお役にたつかどうか分からないからです。しかし、天界に入るにふさわしい方であれば、希望をもってもいいことです」と。

それからその霊は木星出身の素直な霊たちのなかに入れられました。ところが霊たちは、その霊が性格が違うので、自分たちの仲間にはなれないと言ってきました。それでもかれは、天界に入らせてもらいたいとすこぶる熱心に願いましたので、この地球出身の善霊た

ちの社会に入れられました。ところがまた善霊は、かれは自分たちとはいっしょになれないと言います。というのは、天界の光の中で黒色のものがあったとしても、その霊はそれが黒色ではなく、赤茶色だと言います。それからわたしに向かって言われたことはこうです。

「このような人は、巨大人すなわち天界では、精嚢胞 *vesiculae seminales* の部分を構成するために受け入れられます。精嚢とは、精子が集められるところで、そこで精子の繁殖力が分散しないように維持保存するため、それなりの物質で覆われます。その物質は子宮の入り口で取り除かれますが、それは内部に保存されている精子が妊娠するため、すなわち卵子が受精するために役立つからです。精子を覆うその物質には、推進力がありますが、それは役立つために精子を残し、自分を脱ぎ捨てようとする熱望のようなものです。

その霊にもそれと同じような傾向が現れました。依然としてわたしのところに、みずばらしい身なりで来て、天界にどうしても入りたいと再度言いました。しかも自分がそれに相応しいものと、今こそ感じとったと言い、やがて迎えられる印になることを聞いたと言います。そのとき天使たちはかれに衣服を脱ぎ去るように言いましたが、かれは熱願のあまり、これ以上速くはできないほどすばやく、衣服を脱ぎ捨てました。これを見ても、精嚢に相応する地域にいる人たちがどれ程激しい願望をいただいているかが表象されます。このような者も天界に入る準備ができると、衣服を脱がされて、きらびやかな新しい衣服を身につけて、天使になるそうです。

イモムシがそれに似ていて、卑しい状態を経過し、サナギになりやがてチョウになりますが、そのとき別の衣装が与えられ、それと同時に青色、黄色、銀色、金色の翼が与えられます。そのときになると、空中を自分の天界のように飛び、結婚を祝い、卵を生み、自分の種の繁殖を希望する自由を獲得します。またその折りは、各種各様の花の蜜や香りからおいしく、甘い食べ物がかれらに提供されます。

80. 木星出身の天使たちについては、前節ではまだ触れていません。かれらは木星の人間のところに行って、頭部に居を定めます（これについては75節参照）。かれらは自分たちの内部天界での天使にはなっておらず、外部天界の天使霊または天使になっています。それでその天使たちの性格がわたしには発見できたため、かれらについて知ったことを記します。

恐怖を起こさせる木星霊がいて、わたしの腕の下の左脇に迫り、そこから話しかけてきました。ただしその霊の話し方はギシギシしていて、単語は正確に区切っていないので、明確でなく、意味を把握するまでには、長い間待たなくてはならず、またある種の恐怖を

あいだに置きながら話します。そして天使たちがやって来たら、かれらを快く迎えるようにとわたしに忠告します。しかしそれに対して、応えが与えられました。すなわち、わたしにとってそんなことをする必要はない、わたしのもとに来れば、みなそれなりに迎えられればいいとのことでした。

そうしているうちに木星の天使たちがやってきました。そしてわたしとの会話から、かれらは地球出身の天使たちとは全然違うのをぴんと感じとることができました。かれらの話し方は単語を発音するのではなく、概念によるもので、それはわたしの内部のものを通して、あらゆるところからみずからを注ぎ入れるような概念でした。なおその概念は顔に向かって流れ入り、部分部分は顔に同調していきます。それも唇から始まって、あらゆる方向から周辺にむかって伸びていきます。その概念は、単語の代わりになるものですが、明確に区別されていて、しかも僅かで済みます。

そのあとかれらは、あまり明確でない概念をとおしてわたしと話しましたが、それは全く間を置かずに行なわれました。わたしの感知力にとっては、単語から抽象した意味だけに注目する場合、ある人がもつ語義 *sensus vocum* のようでした。そのような話し方は、わたしにとって以前より理解しやすく、また豊かな内容をもったものでした。以前と同様、顔に向かって流入があり、その流入は、話し方の性格の面で、ずっと連続的でした。それは以前のように唇から始まらず、目から始まりました。そのあとで、かれらが話したときはもっと連続的で豊かなものでした。そのとき顔はそれに相応しい動きで連動することができませんでしたが、大脳への流入を感じると同時に、そのときも同様に行なわれたように思えました。

最後にかれらが話したときは、文章がただ内部理性にだけ入ってくるような感じでした。その内容には淡いオーラ黎明の光のような雄弁さ *volubilitas* がありました。わたしはその流入を感じましたが、一つ一つが明確に区分されていません。この種類の話し方は流動的な様子をしています。第一種のもものは、流れる水のようにであり、第二のものは一層稀薄なもののようにです。第三番目のものは、比較すると大気のような感じでした。そして第四番目のものは、稀薄なオーラのようにです。

前に触れたように、わたしの左脇にいた霊は、ときどき合間に口をさしはさみましたが、まずはわたしが天使と話すときは、謙虚に振舞ってくれと言いました。そこに、わたしたちの地球出身の女性霊がいて、気に入らない話を持出したからです。その左脇の霊は、天使たちが何を喋っているのか分からなかったが、わたしの左耳に近づいてきたとき、分

かったそうです。そのときかれが聞いた話は、以前のようにギシギシしておらず、他の霊たちの話のように聞けたということです。

81. あとでわたしたち地球にあるめばしいことについて、わたしは天使たちと語りました。とりわけ地球での活字、また、〈みことば〉や、〈みことば〉に由来する教会諸教義についてでした。そこでわたしは、〈みことば〉や教義は、広めていくようなものとして存在すると同時に、こうして学ばなければならないことを伝えました。それにたいして、かれらは文字や活字でこのようなものが普及できることに驚いていました。

82. 木星の霊たちは、準備を終えたのち、天界に引き上げられ天使になるときに、どんなふうなことが起こるか、わたしは目撃するチャンスが与えられました。エリヤが引き上げられたと同じように、燃える明るい車と馬が姿を見せます。燃えるように明るい車と馬が姿をみせるのは、天界にはいるよう教育され準備ができたことを表象します。車は教会の教義的なことがらを意味し、明るい馬は照らされた理性を示します（e e）。

（e e）車は教会の教義的なものを意味する。2760、5321、8215参照。馬は理知的なものを意味する。2760、2761、2762、3217、5321、6125、6400、6534、7024、8146、8148、8381参照。黙示録にある白い馬は、〈みことば〉の理解を示すことは、2760参照。表象的な意味でエリヤは〈みことば〉を表す。2762、5247を参照。教会の教義もその理解もすべて〈みことば〉に由来するものであるため、エリヤはイスラエルの車また、その騎士たちと言われる。2762参照。したがって、エリヤは火の車と火の馬たちによって引き上げられた。2762、8029参照。

83. かれらが引き上げられる天界は、木星にたいし右のほうから現れます。こうしてわたしたちの地球天体出身の天使たちがいる天界からは、切り離されています。その天界にいるかれら天使たちは、金色の星でちりばめた輝かしいブルーの衣服を着ています。それもこの世にいたあいだ、その色を愛したからです。またかれらはその色が天界の色そのものであると信じていました。それもとりわけ、愛の善のうちにいたためで、その色は愛の善に相応します（f f）。

（f f）赤い炎の地をもとにしたブルーは、天界の愛の善に相応する。また明るい白色をもとにしたブルーは、霊的な愛の善に相応する。9868参照。

84. わたしにとくとう禿頭が見えましたが、ただそのてっぺん天辺の部分は骨張っていました。一年以内に死ぬことになっている人は、これを見るそうです。かれらはそのとき準備中ということです。そこでは、配偶者、子供、また両親を残して去ることを除いては、死を恐れませんが、なぜなら死後も生きること、天界に行く以上〈いのち〉を失わないことを知っているからです。それでかれらは死ぬことを「死」とは言わず、「天界化される caelificari」と言います。

木星では、本当の結婚愛の中に生活し、両親にふさわしく子供たちの面倒を見た人たちは、病気で死なず、夢のなかにいるような感じで、静かに息を引き取るそうです。そしてこのようにして、この世から天界に移住します。そこでの人間の寿命は、わたしたち地球の年をかぞえて、多くの場合三十年です。

時間の経過からいって、かれらがはやじに早死する理由は、その天体が支えることができる以上の人口に、人の数が増えていかないためです。同時に、その年齢を経た後、まだそれだけの年齢を経していない人のように、霊や天使によって指導を受けるまでもないわけです。そのために、霊や天使たちも年配者のところへは行きません。かれらはわたしたち地球人よりも早く成熟します。それから青春期の花が咲くとすぐ配偶者といっしょになります。それからは配偶者を愛し、子供達の面倒を見ることを楽しみとします。他の楽しみもまた楽しみと呼びますが、比較的外面的なものです。

火星という惑星天体と、そこにいる霊・住民について

85. 火星の霊は、この太陽系天体の出身であるとともに、その中でも一番善良です。多くの面から見て天界的人間のようで、この地球にかつていた最古代教会出身の人たちとよく似ているからです（g g）。

（g g）この地球で最初のしかも最古代の教会は天界的な教会であって、あらゆる教会の中でも第一のものであった。607、895、920、1121、1122、1123、1124、2896、4493、8891、9942、10545参照。天界的教会とは、主への愛が基本になっている教会であり、霊的教会とは、隣人への仁愛と信仰が基本になっている教会のことである。3691、6435、9468、9680、9683、9780参照。

86. 火星天体は、霊たち天使たちの考えでは、他の天体と同じようにいつも同じところに姿を現します。それは腹部の領域にあって左前面にある程度の距離を保っています。こうしてわたしたち地球の霊たちのいるスフェアの外にいるわけです。

ある天体の霊たちは他の天体の霊たちとは分離されていますが、それはある特定の霊は巨大人のなかで、ある特定の領域にかかわるものだからです（f）。こうしてかれらは様々に異なる状態のもとにいることとなります。状態にいろいろな違いがあることによって、あるいは右に、あるいは左に、あるいは遠く、あるいは近くに、お互いがお互いから別れて見えてきます（h h）。

（h h）来世での距離は事実上の現象 *apparentiae reales* で、天使や霊たちの内部の状態におうじて、主によって見えるものとなる。5604、9104、9440、10146参照。

87. 霊たちは、そこからわたしのほうにやってきました。そしてわたしの左の額に集中し、そこでわたしにたいしコトバをかけてきましたが、そのコトバが理解できませんでした。それは淡く柔らかな流入でした。それ以上淡い流入を感じたことはありません。たしかに最高に柔らかな流入でした。

そのコトバが流れてきたのは、最初左の額でした。そして左耳の上の方へ行き、それから左の目に流れ続けてきました。そして少しずつ右の方に移り、そこで途絶えましたが、やがて左の目から離れ、唇のほうに移りました。唇に移ってから口を通して入ってきまし

た。その経路で口の中に入り、エウスタキ氏管を通して大脳に入りました。流れがそこに達したとき、わたしはかれらのコトバを理解し、それでかれらと話し合うチャンスが与えられました。

かれらが話す間、わたしの唇が動くのが分かりました。それから舌も少し動きましたが、それは内部言語と外部言語とのあいだに相応があるためです。外部言語とは、耳の外膜に向かっていくはっきりした音節言語を言い、そこから耳の中にある小器官、膜、繊維などを通じて大脳にきます。

以上から分かったことは次のようです。火星の住民の話し方は、わたしたち地球人のそれとは開きがあり、音声によらず、ほとんど黙ったまま、比較的簡単な筋道で、内的聴覚または内的視覚に染み透っていくやり方をとります。このようにすることは、いっそう完全であるとともに、いっそう豊富な思考概念をもつため、霊や天使たちの話し方に接近することになります。また話すときの情愛自身も、かれらの顔に表され、情愛にとまなう思考は目に表れます。かれらにとって、思考と会話、情愛と顔は一体になって働いています。違ったことを考えたり、言ったり、欲したり、また違ったことを顔に表したりすることは、非道なことと考えます。かれらは偽善とか、ごまかしの見せ掛けや下心など、何のことか知りません。

このような話し方がわたしたち地球でも最古代の人に存在したことが、あの世にいるある人たちとの会話で知らされました。参考までに、わたしが耳にしたことは、次のとおりです。つまり、わたしには流入によって示されましたが、その流入を記録することはできませんし、最古代教会出身の人たちは、どんな話し方をしていたかも言えません（g g）。かれらの話し方は、わたしたちの時代の音声による話し方のように、区切って発音するものではありません。むしろ黙ったままで行われます。それも外的呼吸によらず、内的呼吸を使って行われるため、思考的話し方 *loquela cogitativa* になります。

かれらの内的呼吸がどんなものか感じとることができました。臍から発して心臓に向かって進み、話すときは音声を伴わず、唇を使います。外部にある道筋で相手の耳に入りますが、鼓膜と呼ばれている特定の部分を振動させるわけではありません。むしろある種の内部にある道筋をとります。それは現在エウスタキ氏管と呼ばれ、そこにある特定の部分を用います。この話し方によると、従来の音節または音声によるより、気持ちの内容また思考概念をずっと豊かに表現することができることを示されました。従来のものはやはり呼吸によるものですが、外部的な呼吸です。なぜなら、呼吸を利用しないで、単語を発音したり、コトバを交わすことは、ありえないからです。

ところで、かれらにとって内部呼吸を使ったものは、はるかに完全です。それは内部のものになれば、それだけ完全性が高まり、思考概念に適用しやすいし、それだけ適合性があります。もちろんそれに、唇のかすかな動きや、それに対応する顔の動きなどもあることは当然です。これも、かれらは天界的な人間でしたから、何を考えても、かれらの顔面や眼からそれが輝き出しました。しかもその顔や眼はそれに伴って変化したわけです。顔は情愛のいのちに応じて形を変え、眼はその光を変えていきます。自分の考えること以外のことを顔に表すことが決してできません。それは、かれらの話方は、霊人そのものによる内的呼吸であり、天使たちとはお付き合いできるし、また会話も可能だったからです。火星の霊たちの呼吸についても、わたしは交流によって分かりました（i i）。

（i i）霊たち天使たちの呼吸について。3844、3885、3891、3893 参照。

わたしが感じとったのは次のとおりです。かれらの呼吸は、胸部から臍にかけての領域から出ます。それから胸をとおって流れますが、それには口のほうに向かって感じ取れないほどの呼気が伴います。わたしは以上から、また他の多くの実験にもとづく記録から、かれらには天界的資質があり、それはこの地球での最古代教会出身の人たちと変わらないものであることが分かってきました。

88. 巨大人の中での火星霊は、理知的なものや意志的なものとの中間に関係づけられることを、わたしは教わりました。それは情愛からでる思考のことで、かれらの中でも最良の人たちは思考からでる情愛に関係します。それ故に、かれらの顔はその思考と働きを一つにしている、人前でとり繕うことはできません。それが巨大人のなかで関係してくるため、かれらに相応するのは大脳と小脳のあいだの中間地帯です。なぜなら、大脳と小脳が霊的作用の面で結ばれている人は、顔は思考と働きを共にしているからです。したがって顔面から思考の情愛が輝きでます。そして眼からも出るある種の印を伴って、情愛からは思考の共通項が輝きでます。それでわたしの側にかれらがいたとき、わたしはかれらの頭の前の部分が後頭部に引っ込んでいたのに気がつきました。すなわち大脳が小脳の方に寄っていたわけです（k k）。

（k k）わたしたち地球人の顔をみると、古代では小脳から流入を受けていた。その際、顔は人の内部にある情愛と働きを一つにしていた。ところがその後、人が自分がない情愛を顔面で繕うようになったとき、大脳から流入を受けるようになった。それ以来時間の経過によって顔が変化してきた。4325、4328 参照。

89. あるとき火星の霊たちがわたしの側において、わたしの精神のスフェアを占めていました。そのときわたしたち地球からの霊たちが、かれらもそのスフェアに入る望みでやってきました。しかしそのとき、地球の霊たちは全然適応できなかつたため、まるで気が狂ったようになりました。

巨大人の中で、地球の霊たちは外部の感覚に関係をもっています。かれらの考えはこの世と自分に向いており、火星の霊たちの考えは自分から離れて天界と隣人に向かっています。そこであい対立することになります。しかしながらそのとき、火星の天使霊がやってきました。それで、かれらの到来によって交流が失われました。こうして、わたしたち地球の霊たちは退いていきました。

90. 天神的霊は自分たちの天体にいる住民の生活について、わたしと話しあいました。かれらには、国家の支配はなく、大小の社会に分かれていると言います。そして気質があう者同士で社会を形成しているそうです。しかもその気質は、顔つきとコトバ遣いで分かるそうで、それもめったに騙されることはありません。そこではかれらは友人同士です。

またかれらは、お互いの仲間づくりは楽しく、社会のなかで起こってくることを相互に話しあうと言います。とくに天界にあることがらについて話すそうですが、それは、かれらの中で天界の天使たちとあきらかな交流をもっている者がたくさんいるからです。かれらの社会のなかで悪いことを考え、そのため悪い意志をもつことがあれば、かれらは社会から分離させられます。そのような者は孤独で放っておかれますが、かれらはしばらくは社会の外で悲惨な生活を、岩地のようなところで送ります。しかし、それにたいする面倒はもはや見ません。

ある社会では、様々な方法を使ってこのような者を反省させようとしませんが、それが徒勞と分かると、社会から切り離します。そのようにして、支配欲や利得への欲望が入り込まないように気をつけます。これはつまり、支配欲にかられてある社会を束縛する者が生まれ、それが他の多くの社会をも手中に治めさせないためであるとともに、利得への欲望にかられて、他の人の財産を奪わせないためでもあります。

そこでは、だれもが自分の財産で満足し、自分の名誉で満足して生きています。それは正しい心で、隣人を愛して、耳を傾けるということです。それで悪い考えをもったり、悪い意志をもったりする人を放逐しなくては、このような楽しさや平穏な精神状態は消滅してしまいます。しかも自己愛や世間愛の始まりの段階でそれに賢明に厳しく対応しなければ、それができません。帝国とか王国はこのような愛から生まれました。帝国や王国のな

かでは、人を支配したり他人の財産を欲しがったりしない人は少数です。なぜなら、正義や平等を愛するために、正義や平等を行う人は少数だからです。まして仁愛そのものから善を行う人はさらに少数です。多くは法律違反、生活の支障、利得、名誉、名声の損失を恐れてそれを行います。

91. その地の住民の神にたいする信心は、わたしたちの主を認め、礼拝していると言います。そして主こそただひとりの神であって、天界と宇宙を治めておられるのは、その主であると言っています。さらにすべての善は主に由来し、自分たちを導かれるのも主ご自身であり、しかもかれらの天体では、わりに頻繁に主が姿を現わされると言います。

そのとき、かれらに言ったことは、わたしたちの地球でも主が天地を治めておられるのを、キリスト信者たちはマタイ福音書28・18の「天においても地においても、いっさいの権能はわたしに与えられている」の〈みことば〉から知っているが、火星出身のかれらのように信じていないということです。それにたいしかれらは、自分たちの中は低劣で地獄的なものしかなく、あらゆる善は主のものであると信じているそうです。さらにかれらは、自分自身からは悪魔でしかないこと、主がその地獄から引っ張り出してくださり、たえず引き止めていてくださっていると述べていました。

あるとき、主のみ名が口にされたとき、その霊たちは表現できないほど内心から深ぶかと、へりくだ遜っているのをわたしは目撃しました。そのようにへりくだ遜るのは、自分たち自身から出発すると地獄にいる他なく、神聖そのものである主に目を上げることなど、自分たちはそれに全く値しないと考えるからです。その考えは信仰から出ており、非常に深刻なもので、あたかも自分から抜け出ているような感じでした。そしてかれらはそのような考えのなかに、ひざまず跪いたまま浸っていましたが、主がかれらを地獄からひきあげて、立ち上がらせられたような感じでした。このような遜りから立ちあがると、かれらは善と愛に満たされ、その結果こころに喜びがいっぱいになっている様子でした。このようにして遜っているとき、主に向かって顔を向けることもしません。そのさいは敢えて顔を上げることもせず、顔を逸らせました。わたしの周りにいた霊たちは、このような遜りをいままで見たことがないと言っていました。

92. 火星出身の霊たちの中には、わたしの周りにこんなに沢山の地獄霊がいて、わたしに話しかけているのに驚いている霊がいました。しかしそれには応えがあり、かれらにそれが許されているのは、霊たちがどんな性格か、どうして地獄にいるか、地獄にいるの

はかれらの〈いのち〉に呼応する事実を、わたしがよく分かるためだそうです。さらに、かれらの中には、この世に暮らしていたとき、わたしの知っていた人が多く居ると言われました。しかもある人は当時高位に上げられていましたが、心には現世しかなかったそうです。いずれにしても、極めて地獄的な悪霊がいましたが、わたしに呪いを呼び寄せることが出来ませんでした。ずっとわたしは、主によって守られていたからです。

93. その天体の住民の一人がわたしに現れました。実は住民ではなく、住民に似ている人でした。その顔はわたしたち地球の住民の顔に似ていましたが、ただ顔面の下の部分が、黒々としていました。それはあごひげ顎鬚があるからではありません。その人には顎鬚はなく、黒い肌をしているためそのように見えました。しかもその黒い部分は両側の耳の下まで広がっています。顔面の上部は、わたしたち地球人の顔のような肌色をしていて、まったくの白ではありません。それから、その天体では木の実を食べるのだとかれらは言いました。それは、かれらの土地に生えているある種の丸い実で、それ以外にも野菜を食べるそうです。またそこでは、ある種の木の皮から作った衣服を身につけています。このような樹木があるため、それで機織りをしたり、にかわ膠で固めることもできます。また、液体で火を作ることを知っており、それで夕方や夜は明りをともすことができることも、話してくれました。

94. わたしはすこぶる美しい炎を見ました。それは各種各様の色をしており、そのときは明るい白色から赤味を帯びた紫に変わりましたが、色彩は炎のせいであざやかに赤く染まっていました。手を見ると、その手には以上の炎がついています。最初は手の甲に炎が見えたのが、あとで見ると手のひらに炎がついています。そこから手のまわりまで明るく光っていました。それがある時間のあいだ続きました。それから、炎のついた手は遠くのほうに移り、そこでじっとして光り輝いていました。その明るい光のうちに手も見えなくなり、その炎は鳥に変わりました。そして色彩も同様にゆらめきましたが、その色調は次第に変わっていき、同時に鳥にある命の力も、色調とともに変わっていききました。

その鳥は、最初わたしの頭の周りを飛び回っていましたが、そのあとやしろ社のように見えるある狭い部屋の前面に向かいました。前面に向かって飛べば、それだけ〈いのち〉も失われていきます。そしてついにその鳥は石になりました。当初は大理石の色をしていたのが、あとで鈍い色に変わりました。〈いのち〉を失った状態でも飛んでいました。

その鳥が頭の周りを飛び回っていたあいだ、依然として〈いのち〉の活力は維持されてきました。そのとき下の腰の領域から胸の領域に上ってきた霊が見えてきました。その霊は、そこから前述の鳥を連れていきたい様子でした。その鳥があまりにも美しかったので、わたしのまわりにいた霊たちが引き止めました。なぜなら、みんなはその鳥に釘づけになっていたからです。

しかし、下のほうから上がってきた霊は、自分のもとには主がおられるということ、だからそうするのは主の力によるものだと、他の霊に一生懸命説得しました。ほとんどの者はそんなことを信じませんでした。その霊が鳥を連れて行くのをこれ以上妨げませんでした。その時に天界の流入があって、その霊はその鳥を止め置くことができませんでした。しばらくして、手から自由に放してやりました。

このようなことがあってから、わたしのそばにいてその鳥を目撃し、じっとその変化に注目していた霊たちは、その鳥についてお互いに話しあい、それは暫くのあいだ続きました。かれらはそれが、天界的な何かを意味するとしか考えられない、と言いました。炎は天界の愛とその情愛を意味することが分かりました。炎のあった手は、〈いのち〉とその力を表します。色彩の変化は英知と理知がもつ〈いのち〉の多様性です。鳥も同じような意味がありますが、炎が天界の愛とその愛に属するものを意味するのにたいし、鳥は霊的愛とその愛に属するものを意味します。（天界の愛は主への愛であり、霊的愛は隣人への仁愛です）（g g）。鳥に色彩と〈いのち〉の変化があり、それでついには石になってしまったことは、理知面で霊的〈いのち〉は次第に変化することを意味します。

さらに、下の腰の領域から胸の領域にあがってきた霊たちは、自分たちが主のうちにいると根強く思い込み、起こってくる事柄は例え悪であっても、主のお望みで起こったと信じていることが分かりました。しかしこのようなビジョンがだれを意味するかは、どうしても分かりませんでした。

最後に天界から教わったことはこうです。火星の住民たちにとって、手にあった炎は、かれらの多くが浸っている天界の愛のことだそうです。また最初色彩豊かで生命の活力をもっていた鳥は、かれらの霊的愛を示すものです。その鳥も石のようになり、何の〈いのち〉もなく、ついには漠然とした色調になったのは、愛の善から離れて行った住民のことで、悪のなかにながらも、自分たちが主のうちにいると信じている者です。起き上がって、鳥をもって行きたい様子を見せた霊もおなじです。

95. 石になった鳥は、それはかれら天体の住民で、思考と情愛の〈いのち〉を巡り巡って、ついにはほとんど何の〈いのち〉もないほどに変えてしまった者を表象しています。それについてわたしは、次のようなことを耳にしました。

わたしの頭の上のほうに一人の霊がいて、わたしと話しあいました。その音声から、まるで眠っている状態のように感じられました。このような状態でかれは沢山のことを喋り、目覚めているときより、ずっと賢明に話していました。つまりかれは天使たちが話す場合の媒介者であることが分かったのです。そして、そのような状態でその霊は感じとり、天使たちの言ったことを再生するわけです

(11)。

(11) 霊や天使たちの社会から他の社会に派遣された霊を通して交流が行われること、またそのような派遣霊を代霊 *subjecta* という。4403、5856、5983、5985～5989参照。

その代霊は本当のことしか喋りません。他のところから流入があつて、それを受入れても再生しません。わたしはその霊にたいして、本人の状態について尋ねましたが、かれが言ったのは、自分の状態は平和な状態 *status pacificus* だということです。そして未来にかんして何の心配もなく、自分が天界と交流するという役立ちを提供するのが、自分の状態だそうです。さらに、かれらは巨大人のなかでは、大脳の二つの半球の間にある経洞 *sinus longitudinalis* に該当するとわたしに言いました。その部分は静かなところで、大脳の両半球から揺さぶりをかけても、静けさを保っているところです。

わたしがその霊と話し合っているとき、別の霊たちが、その霊がいた前頭部に向かって侵入し、その霊より先に出てきたため、前の霊は一方の側面に後退し、かれらがそれに代わりました。新来の霊たちはおたがい話し合っていました。わたしの周りにいた霊たちは何を話しているか理解できず、わたしもかれらが何を話しているのか分かりませんでした。かれらは火星出身の霊たちで、おたがいに話し合うのに長けておりましたが、居合わせた霊たちは何のことか分からず、何も感じ取れないということを、わたしは天使から教わりました。

わたしは、このような話し方が存在することに驚きました。すなわち一つのコトバがみんなに行き渡りますが、そのコトバは思考から流れてくると同時に概念から構成され、その音声は霊界で聞こえるほどだそうです。また、唇や顔で表す概念をある方法で形成しますが、他の人には理解できないような概念だと聞きました。またその瞬間たくみに思考をひっこめますが、それはまず何らかの情愛があらわにされないようにするためです。その

わけは、もし何らかの情愛が感じ取られたとすると、思考があらわにされるからです。思考は情愛から流れるもの、情愛の中に存在するものだからです。

さらに、愛の〈いのち〉でなく認識だけで天界的生活をおくっている火星の住民たちは、全員とは言わないまでも、このような話し方を考案したわけで、霊になってからも、このような話し方を保っていることを教わりました。とりわけ石の鳥で表されたのはかれらです。顔の形を変え、唇を動かし、情愛を抜きにして、他の人に思考が届かないようにして話すやりかたは、コトバから魂を抜き取ってしまうようで、コトバが虚像のようになり、次第にかれら自身までそのようになっていきます。かれらがお互いに何を話しているか、他の人たちには理解されないと思っても、天使的霊はかれらが話すことを逐一感じ取ります。それは、ある考えを本人から隠しておくことは不可能だからです。

この現象は、生きた経験でかれらにも示されました。わたしたちの地球の悪霊たちが、他人に害を加えても恥ずかしいと思わない事実について、わたしは考えていました。この流入は、わたしのそばにいた天使的霊から来たもので、その天使的霊は、火星霊たちの話を感じ取ったのでした。火星の霊たちは、それこそ自分たちがお互いに話し合っていたことであったことを認め、驚いていました。その他にも、かれらが自分たちの考えを隠そうと思いつつ、考えたり話したりした多くのことが発覚されました。

そのあと、かの霊たちは上の方からわたしの顔に流入を及ぼしてきました。その流入は柔らかな線状の雨に似たものとして感じ取られました。それは真理と善への情愛に浸っていない印で、線状のもので表象されます。かれらのいた天体の住民たちは、おたがいそれと同じような話方で話すことを、そのときはっきりわたしに向かって言いました。

そのときかれらに向かって言われたことは、それが悪であることです。なぜなら、内部のものを窒息させ、内部から退いて外部に向かいますが、その外部もまた〈いのち〉の欠けたものだからだそうです。とりわけ、そのような話方は正直な話方ではありません。正直な人であれば、他の人が分かるようなこと以外には話したり考えたりしないものです。それも、だれもがつまりは全天界までも知ってくれることを希望します。それにたいし、他の人が自分たちが何を話しているか知って欲しくない場合、その人は他人を裁いているわけで、自分たちについては良く、他人については悪く思っています。それが習慣化すると、教会、天界はおろか、主ご自身についても悪く思い、話すようになります。

認識を愛しながらも認識に呼応した〈いのち〉を愛せない場合、巨大人のなかでは頭蓋にある内部組織に関わるようになるそうです。かれらは、情愛を抜きにして話し、思考を

自分の方に偏らせて他人から隠すことを常とします。それは以上の組織を表し、しかも骨質化した組織です。霊的〈いのち〉がないことは、何の〈いのち〉もないことです。

96. 石の鳥で表されたのは、ただ思考だけで、愛の〈いのち〉が欠けている者のことで、それはかれらには霊的〈いのち〉が欠けているためです。それでここで補足の代わりに付け加えたいのは、天界の愛のうちであり、そこから認識を行う人に限り、霊的〈いのち〉があることです。また愛はそれ自身として、その愛に属するあらゆる認識的なもの *cognitivum* を含みもっています。

たとえば地上の動物や、天界の動物すなわち鳥を例にとれば、そのような動物には自分なりの愛に属するあらゆる事柄についての知識がそなわっています。その愛は、自分を養うこと、安全に居住すること、子孫を殖やすこと、雛を育てること、またある動物には冬に備えることもそうです。そのように、かれらには必要な知識はすべて備わっています。つまり知識はかれらの愛に内在しており、それなりの器に受け止められるよう流入を及ぼしているようです。ある動物に備わっているこのような知識があまりにも素晴らしくて、人は感嘆せざるを得ないほどです。その知識は生来のもので、いわゆる本能のことですが、これはかれらが浸っている自然的な愛からきます。

人がもし神への愛と隣人への愛という本来の愛のうちであれば（この愛こそ人間の固有な愛で、動物と区別されるところで、天界的な愛です）、そのとき人は、必要とするあらゆる知識の中にあるだけでなく、あらゆる理知と英知の中にあります。なぜならこのような知識・理知・英知は天界から、すなわち神に発して、天界をとおって流れ入ってきます。

しかし、人は以上のような愛の中でなく、それと反対の愛の中に生まれてきます。すなわち自己愛と世間愛の中に生まれてきます。だからあらゆる無知と無知識の中に生まれてくる他ありません。神よりの手段で、ある種の理知・英知に導かれますが、それでも自己愛と世間愛が取り除けられて、神への愛と隣人への愛への道が開かれないうえ、実際にはたいしたことはありません。

神への愛と隣人への愛は、それ自身のなかにあらゆる理知と英知を含みもっています。そのことは、この世にあってそのような愛の中にいた人を見れば分かります。かれらは死後天界にやってきて、そこで以前まったく知らなかった事柄を知り味わいます。そこで他の天使たちと同じように考え話し、それは耳で聞いたこともなく、心に上ったこともないこと、すなわち言語を絶することを考えたり、話したりします。なぜなら、そのような愛は、以上を受入れるような能力がそれ自身そなわっているからです。

土星という惑星天体と、そこにいる霊・住民について

97. 土星が位置する天体出身の霊たちは、前方で比較的遠くに現れ、膝の領域の下の方になります。その方向に目が開かれると、霊たちの大群衆が見えてきます。かれらはみな土星出身です。かれらは土星のその部分からも見え、それも右寄りです。わたしはかれらと話す機会が与えられ、そこで、かれらが他の天体の霊とくらべてどんな性格かを知ることができました。かれらは正直で謙虚です。自分たちが小さいと思っているため、来世でも小人の姿をしています。

98. 信心にかんしても、かれらは非常に謙虚で、それは礼拝中自分たちを無きに等しいと思っているからです。わたしたちの主を礼拝し、主を唯一の神として認めます。ときには、主もまたかれらに天使の姿、つまりは人間としてお現れになります。そのさい、み顔から神性が輝きでて精神に影響を与えます。

土星の住民たちも一定の年齢にたつると、霊たちと語りあい、かれらから主について、また主にどのようにお仕えするか、またどのように生きるべきかを教わります。ある人が、土星出身の霊を騙して、主への信仰や、主にたいするへりくだ遜りや、道徳的な生活から引き離したいなどと思うとき、死んだほうが良いと言います。そのときかれらの両手に小さな刀が現れます。その刀で自分の胸を突き刺したいと思っているように見えます。なぜそのようなことをするのか尋ねると、主から離れるより死んだほうが良いと応えます。わたしたち地球出身の霊たちが、そのことでかれらを嘲り笑い、破廉恥なことをするようにそのか唆すと、かれらは、自殺するつもりはないけれど、これはかれらの精神の意志が及ぼす見掛けにすぎないと応えます。つまり、主にお仕えすることから身を引くより、死んだほうが良いということです。

99. ときとしてわたしたち地球出身の霊たちがかれらのところに行って、どの神を礼拝しているのか尋ねるそうです。それにたいして、かれらは地球出身の霊が狂っている、どの神を礼拝しているかと尋ねるほど狂った質問はないと応えました。宇宙には唯一の神しか存在せず、主こそ、その唯一の神であると言わないことには、狂いも甚だしいということです。主こそ全宇宙と全天界を支配しておられるからです。天界を治めておられる方は世界も治めておられます。なぜなら、世界は天界によって管理されているからです、と。

100. 大きな夜の光 **Lumen nocturnum** をもって、主と呼んでいる者が、かれらの天体にもいるそうです。しかしかれらは他の者から隔離されていて、他の者はいかに我慢できないと言います。夜の光とは、土星の周りを距離を保って取り巻いている巨大な帯、および土星の衛星と呼ばれている複数の月からきます。

101. 群れをなしてやってくる霊たちがいて、頻繁にかれらのもとにやってきては、土星ではどんなふうになっているかを知りたがっているという話を聞きました。そしてかれらから、あらゆる手段で情報を嗅ぎ取ろうとします。かれらの話を聞くと、狂っているわけではありません。役立ちのためというより、ただ知らないがために知ることを望むそうです。この霊たちは、水星から、つまり太陽に一番近い天体から来ており、認識を楽しむだけで、それから得られる役立ちではないと、あとで教わりました。

102. 土星の住民や霊たちは、巨大人の中で、霊的人間と自然的人間の媒体的感覚に関わっています。自然的なものから退いて、霊的なものに近づくところです。したがって、このような霊たちは天界に引き上げられるか、取り去られていくように見えながら、今のところ止められている格好です。なぜなら霊的意味をもつものは天界にあり、自然的意味でしかないものは、天界の下です。

わたしたち地球の霊たちは、巨大人の中では自然的・身体的な意味に関係するため、自然的人間が信仰と仁愛の中にいない場合、霊的人間と自然的人間のあいだには、どれほどの敵対と衝突があるかを経験で明らかに知らされました。

土星の霊たちが遠方から視界に入ってきました。そしてその際、かれらの間と地球の霊たちの間で生きた交流がありました。地球の霊たちはかれらにとって、まるで気でも狂っているかのように感じとられました。

地球霊は土星霊たちにたいし、信仰および主についても、下品な考えを注入して土星霊を脅かし始めました。地球霊たちは悪口とてきがいしん敵愾心に浸り、土星霊の真ん中に踏み込んで、自分たちが漬かっている狂気で、悪を注入しようと、やっきになりました。ところが、土星霊たちは少しも恐れません。かれらは守られていて平穏です。わたしたち地球の霊たちは、かれらの真ん中であって、もだえ、息苦しくなりました。こうして一人はこっちへ、もう一人はあっちへと身を投げ出し、たがいにバラバラに分かれていきました。

そこに居合わせた人たちは、霊的なものから切り離されている自然的な人間が、霊的なスフェアに入ると、どんなふうになるか、つまり気が狂ってくるのが感じ取られました。霊的なものに縁のない自然の人間は、この世をもとにしてしか味わうことがなく、天界からは何も味わえません。この世だけをもとにして味わっている人は、感覚で把握しないなら何も信じようとしません。しかも信じているとすれば、感覚からくる錯覚を元にして信じており、そのような錯覚は霊界からの流入によって取り除かれなければ、虚偽を生むこととなります。したがって、そのような人にとって、霊的なものとは何ものでもなく、「霊的なもの」と呼ばれるのを聞くだけで耐えられないほどです。それゆえに霊的なスフェアの中におかれると、このような人は気が狂ってきますが、この世にいるときは違います。そのときは、霊的なことがらについては自然的に考えるか、耳を背けるかします。聞いていても傾聴していないわけです。

自然的人間は、霊的なものの中に身をいれること、つまり上っていくことが出来ないことが、以上の経験からはっきりしました。それにたいし、信仰の中にいる人は、霊的〈いのち〉の中におり、霊的人間が自然的人間のなかに注がれているわけであり、そのスフェアで考えます。流入は霊的流入です。すなわち霊界から自然界へ入っていくもので、その逆ではありません（mm）。

（mm）流入とは霊的なものである。物理的あるいは自然的なものではない。したがって、霊界から自然界に流れ込むもので、自然界から霊界に流れ込むものではない。3 2 1 9、5 1 1 9、5 2 5 9、5 4 2 7、5 4 2 8、5 4 7 7、6 3 2 2 参照。見かけでは、人間の外部から内部に入るように見えるが、それは錯覚である。3 7 2 1 参照。

1 0 3. その他、わたしは土星の霊たちに土星住民について、かれらの社会生活がどんなふうか、いろいろ教わりました。かれらは家族単位に別れており、それぞれの家族は他の家族と分離されていて、男は妻や子供達といっしょに生活しているそうです。また結婚すると、両親の家から離れ、それからは両親の家のことについては心配しません。したがって、土星出身の霊たちは二人ずつで姿を現します。食べ物や着物については、ほとんど心配しません。かれらの土地が生産する果物や野菜を食糧にします。軽装でいるのは、皮膚が厚く、寒さを防ぐ厚い上着をきているためです。またそれだけでなく、土星の人たちは、みな死後も生きることを知っています。したがって、自分の肉体上のことには価値を置いていません。ただ生命のために役立つ限りで、その生命も維持して主に仕えるため

だと言います。それで、死体を埋葬することはありません。むしろそれをそのまま放置して、森からとってきた樹木の枝で覆います。

104. 土星の巨大な帯は、わたしたち地球からは土星の地平線の上に掛かっており、位置を変えていくように見えますが、それについて質問すると、その帯はかれらには帯のようには見えず、天空にあって、いろいろな方向にむかう雪のかたまりに過ぎないと言いました。

金星という惑星天体と、そこにいる霊・住民について

105. 霊たちと天使たちの考えでは、金星天体は、わたしたちの地球からある距離を保って、左のやや後方に姿をみせます。霊たちの考えではと言ったのは、この世の太陽も天体も、霊たちには現れないからで、霊たちもそれらがただ存在していると考えているだけです。天体については、考えだけから、この世の太陽はなにか黒々としたものとして背後から出現しますが、それもこの世におけるように回転しているのではなく、同じ場所にじっとしている様子です（前42節参照）。

106. 金星には性格が相反する二種類の人種がいます。柔和で人間的な人種と、柔和でなくややどうも獐猛ともいえる人種です。柔和で人間的な人種は、金星天体の一方から姿をみせ、柔和でなくやや獐猛ともいえる人種は、こちらに面する部分から姿をみせます。そのように姿をみせるのも、かれらの〈いのち〉の状態に準じているのをここで知っておく必要があります。なぜなら〈いのち〉の状態はすべて、その場所での空間と距離の現れ方をするからです。

107. 金星天体の一方の側から姿を現した者の中で、わたしの方にやってきて、わたしの頭上で見える姿を示した者がいました。わたしはかれらとあれこれ話をしました。その中でもかれらは、この世にいたとき、わたしたちの主を自分たちの唯一の神として認めていたし、今はいっそう認めているということです。それから、金星では主を目撃したと言い、またどのように目撃したかを示しました。

非物質的なものの記憶は、水星の霊に関係がありますが、この霊たちは巨大人の中では、その非物質的なものについての記憶に一致調和する物質的なものの記憶に関係があります。それゆえ水星の霊たちは、この金星の霊たちと一番よくウマがあっています。したがってかれらが一緒にいるときは、わたしの大脳の中で、そこからくる流入によって、著しい変動と力強い作用が感じられました（前43節参照）。

108. こちらを眺める部分から現れ、柔和でなくやや獐猛な霊たちとは、わたしは言葉を交わしませんでした。天使たちから、かれらがどんな性格で、その獐猛な性格はどのようにしてできたかなどを聞きました。かれらが喜ぶのはただ強奪すること、できる限

り強奪したものを食べることです。強奪したものの中から食べることを考えただけで嬉しさが高まり、それが伝わってきましたが、最高の嬉しさとして感じとられました。

そのように獰猛な性格をもった住民たちがわたしたちの地球にも存在することが、諸民族の歴史から明らかです。それはカナンの地にいた住民たちの話です（サムエル上 30・16）。またダビデの時代のユダヤとイスラエル民族についても、かれらは毎年遠征して、諸民族から奪い、戦利品を食べては喜んでいました。

また、金星の住民たちは、大部分が巨人で、わたしたちの地球人は、かれらの臍の高さしかないと言われました。さらに彼らは、愚かであって、天界のものを求めず、永遠のものに関心がなく、ただ地上のもの自分の腹を満たすものしか心にないと言います。

109. かれらはこのようなありさま故、来世にやってくると、諸悪やもろもろの偽りによって著しく汚染されます。彼らのいる地獄はその天体の近くに現れますが、わたしたち地球の悪人がいる地獄とは交流がありません。なぜなら、おたがいは全く違った資質と能力をもっているからです。したがってまた、かれらの悪と偽りは全く違った種類のものです。

110. このような者の場合、救われるためということで、荒廃 *vastatio* の場所におります。そこでは絶望のどん底に落とされます。なぜならこのような種類の悪や偽りは沈黙することも取り除くこともできないからです。この絶望の状態、かれらは自分たちが野獣である、忌むべき人間である、憎しみである、断罪されている等と言って叫びます。この状態にあって、かれらの中で天界に反抗して叫ぶ者がいます。しかしこのようなことも絶望から出ているものであり、無視されます。かれらが際限なく怒り狂うようなことがないよう、主は和らげられます。かれらの肉体は死んだようになって、その極限の状態を通り越すと、最終的には救われます。

またかれらについて、金星天体に住んでいたとき、仲介的な方ではない最高創造神を信じていたと聞きました。でも救われてからは、主こそ唯一の神であり、救い主であり、仲介者であることを教わります。

わたしはかれらの中で、極限まで耐えたあと、天界に上げられた人を見ました。わたしは、かれらが天界に上げられたとき、かれらから歓喜の優しさを感じとりました。それはわたしの目から涙がでてくるほどでした。

月の霊と住民について

1 1 1. わたしの頭上に現れた複数の霊がいました。かれらから雷鳴のような声が聞こえましたが、それは雷光のあと雨雲から発する雷鳴そっくりでした。わたしは、霊たちの大群衆がいてこのような音で声を出す術を心得ているのだと思いました。わたしの側にいたごく単純な霊たちは、かれらのことを嘲り笑っています。それでまた非常に驚きました。しかしそのような嘲笑の理由もはっきりしました。音をたてた霊たちの数は多くなく、少数でしかも子供のように小さかったからです。かれらは以前このような音で単純な霊たちを脅かしましたが、まったく何の害も加えることはありませんでした。

かれらがどんな人なのかを分からせるため、声を出した高みから下りてきた者がいました。それでまた驚いたことに、一人がもう一人を背におぶっています。このようにして二人でわたしのところに近付いてきました。かれらは顔立ちは醜くなく、他の霊たちより面長です。七歳くらいの背丈でも体はずっと頑丈です。つまりは小人です。天使たちはわたしに、かれらが月出身だといいました。負われている者のほうがわたしの方にやってきて、わたしの腕の左脇下に近付いて次のように言いました。

「わたしたちが声を出すと、雷鳴のような音になります。なぜなら、わたしたちに悪をたくら企む霊を脅かし、またそれで逃げていく場合もあるからです。それで行きたい方にむかって安全に移行することができます」と。

かれらの音声をもっとはっきり分からせるため、かれらはわたしのもとから、他の者たちのところに戻りましたが、視界から全く見えなくなるほどではありません。そして同じように音をたてました。かれらの声は腹部から何かを吐き出すような感じで音を出します。

そこで、月の住民は他の天体の住民のように肺臓からではなく、腹部を使って話し、腹部に蓄積された空気を使ってするから、このようになっていることを感じ取りました。それは、月は他の天体のまわりを取り巻いているのと同じ大気によって、囲まれていないためです。

わたしは次のように教わりました。月の霊たちは巨大人の中では、楯状または剣状の軟骨に関係があることです。その軟骨の手前で肋骨が結合し、またその軟骨が出发点になって白色筋膜がくだってきており、その筋膜は腹部の筋肉の支えになっています。

1 1 2. 月に住民がいることや、木星、土星の周囲の衛星つまり月にも住民がいることを、霊たち天使たちは知っています。そこからきた霊たちに会ったことがない者、その霊

たちと話したことがない者も、そこは同じ天体だから、その天体にも人間がいることに疑いをさしはさみません。天体のあるところには、人間もいるわけです。天体が存在するのは人間のためです。しかも目的なくして最高の創造神によって造られなかったものは何もありません。そして創造の目的は人類であることは、僅かでも理性をもとに考える人には、すべてははっきりすることです。

主は他の天体でなく、なぜわれわれの 地球に生まれることを望まれたか

113. 主が他の天体でなく、わたしたちの天体で生まれ、人間性を取られることを望まれたことには、沢山の理由があり、わたしはそれについて天界から教わりました。 主要な理由は〈みことば〉のためです。すなわち〈みことば〉は、わたしたちの地球では書き記すことができ、しかも記されたものは全土に流布することができます。そして一度流布されたものは、後代のあらゆる子孫に伝わります。こうして、来世におけるすべての人のためにも、神が人になられたことが明らかになります。

114. 主要な理由が〈みことば〉であったということは、それが神の真理そのものだからです。それは神がましますこと、天界があり、地獄があり、死後の〈いのち〉があることを教えます。そして、天界に行き着いて、永遠にまで幸福になるためには、どのように信じ生活すればいいかを教えてくれます。

以上のすべては、啓示がなかったなら、つまりこの地球で〈みことば〉がなかったなら、全く知られていなかったでしょう。人はその内部にかんしては、死ぬことができないように造られているからです。(n n)。

(n n) ただ自然の光明だけでは、主について、天界と地獄、死後の人間の〈いのち〉、人の〈いのち〉が霊的・永遠的になるための神の真理については、何も分からない。8944、10318、10319、10320参照。その証拠には、〈みことば〉が存在し、その〈みことば〉を通し以上の教えが与えられている土地に生まれても、またその中には学者もいながら、以上を信じない者が多くいる。10319参照。だからこそ天界からの啓示が必要であった。なぜなら人は天界に行くように生れてきているからである。1775参照。

115. わたしたち地球では〈みことば〉が記録されることが可能だったわけは、最古の時代から書く技術が存在したためです。最初は樹皮でした。そして羊皮紙となり、そのあと紙になり、最終的には印刷できるようになりました。これは主が〈みことば〉のためになさったみ摂理です。

116. このようにして〈みことば〉が地球上どこでも普及可能になりました。それも諸民族の交流が、全世界のどこへでも、旅行だけでなく航海によって可能になったことです。そして一度記された〈みことば〉は一民族から他の民族へと、伝えられるところはどこにでも持って行かれるようになりました。

117. 一度書き記されたものは、子々孫々にまで伝え保存されますが、こうして何万年も伝え保存されてきたことは、周知のことです。

118. こうして神が人になられたことが明らかにされました。

これは、〈みことば〉の存在価値にとって第一の最も本質的なことです。なにかの形をもってしなければ、神を信じ、神を愛するなど、人間にはできないからです。したがって、見えない方とか掴みどころのない方として考える者は、自然のほうに考えが落ち込み、やがては何らの神をも信じなくなります。それで主の思し召しで、この地球にお生れになることになり、それを〈みことば〉で明らかにされましたが、それはこの地球上の人に知らせるだけでなく、その〈みことば〉をとおして、他の天体出身の霊や天使たち、それからわたしたち地球出身の異邦人たちにも、伝えられるようになりました（oo）。

（oo）来世で異邦人は天使たちに教わり、この世で自分たちの宗教をとおして善良な生活をした人は、信仰の真理を受け、主を認めるようになる。2049、2595、2598、2600、2601、2603、2661、2863、3263参照。

119. わたしたち地球にある〈みことば〉は、天界を通して主から与えられたもので、天界とこの世とを一つにするものであることを、知らなくてはなりません。それゆえ、〈みことば〉の文字にあるすべてと、天界の神的なものとのあいだには、相応があるのです。〈みことば〉は、その最高・内奥の意味では、主について、天界と地上における主のみ国について、主に発し主にむかう愛と信仰について、さらに主に発し主にむかう〈いのち〉について記されています。わたしたち地球における〈みことば〉が読まれたり教えられたりするとき、天界の天使たちには以上のような内容が提示されます（pp）。

（pp）天界の天使たちは、地上の人間とは違ったふうに理解されること、また天使たちにとっては内的・霊的意味で理解されているのにたいし、人間には外的・自然的意味で理解されている。1769～1772、1887、2143、2333、2396、

2540、2541、2545、2551参照。また〈みことば〉は天界と地上とを繋ぐものである。2310、2495、9212、9216、9357、10375参照。したがって、〈みことば〉は純然たる相応にもとづいて記された。1404、1408、1409、1540、1619、1659、1709、1783、8615、10687参照。〈みことば〉の内奥の意味では、ただ主のみ国について記されている。1873、2249、2523、7014、9357参照。

120. 他の天体ではすべて、霊や天使によって、口頭で神の真理が表されました。それについては、この太陽系の諸天体住民について前述したとおりです。しかしこれは家族のあいだに限られていました。なぜなら、大形の天体では、家族単位で分かれて住んでいたからです。したがって霊や天使たちによって以上のようにして啓示された神の真理は、家族を越えて長年のあいだ伝えられることはありません。継続的に新しい啓示が与えられないなら、神の真理はくつがえ覆されてしまうか、消滅してしまいます。それにたいし、神の真理が〈みことば〉として、そのすべてが完璧な姿で保存されるわたしたち地球の場合は違っています。

121. 主はどの天体出身者であっても、神を人の姿で認め礼拝する者は、すべて認め受入れてくださることを知る必要があります。なぜなら人の姿をもった神こそ主だからです。主は諸天体の住民たちには、天使の姿、つまりは人間の姿でお現れになるわけで、その天体出身の霊や天使たちが地球出身の霊や天使たちから、神は現実に人であると聞き、それを〈みことば〉として受けがい、そのとおりであることを認め喜んでいきます。

122. 以上に引き続き、次の事柄を付け加えます。すなわちわたしたち地球の住民や霊たちは、巨大人のなかでは自然的・外的な感覚に関係することになります。しかも自然的・外的感覚はいのちの内部が完結する最終末端部で、そこで内部がその全体像として落ち着くところです。それと同じく、〈みことば〉と呼ばれている文字の上での神の真理が、他の天体でなく、この地球に与えられたのは、以上のような理由からです（q q）。

（q q）文字上の意味での〈みことば〉は自然的である。8783参照。つまり、自然的なものこそ末端部であり、そこで霊的なものまた天的なものが終わりを告げ、それがあたかも基礎の上に載っているようになる。それがいない場合、外的・自然的なものが欠けた

〈みことば〉の内的・靈的意味は基礎のない家のようになる。9430、9433、9824、10044、10436参照。

主は〈みことば〉であるとともに、すべてが秩序に基づいて実在するため、その始めであり終わりです。すなわちこの地球に生まれることを意図され、〈みことば〉となられることを望まれました。それについてヨハネが言っています。

「〈みことば〉は始めに神のもとにあった。すべてはそれによって出来た。それによらないで出来たものは何もなかった。そして〈みことば〉は肉となって、わたしたちの間に宿った。わたしたちはその方の栄光をみたが、それは父から生まれたひとり子としての栄光であった。神を見た者は一人もいない。父のふところにいますひとり子、その方が父を現わした」（ヨハネ1・1、2、3、4、14、18）。

〈みことば〉とは、神の真理の面での主です。また神の真理は、主から発します（r r）。

（r r）〈みことば〉とは神の真理の面での主であり、神の真理は主からくるものである。2859、4692、5075、9987参照。また神の真理によってすべてが創造され出来上がった。2803、2884、5272、7835参照。

しかしながら、この種の秘義 *arcanum* が、理性をつかって分かる人は、ほんの少数です。

星天における諸天体について

123. 天界にいる者は、この太陽系の天体出身の天使や霊たちだけでなく、宇宙におけるこの世界外天体出身者である天使や霊たちと言葉を交わすことができます。またそのような天使や霊たちだけでなく、そこに住んでいる住民とも言葉を交わすことができます。ただそのような住民の中でも、天界からの会話に耳を傾けることが出来るほど内部の開かれた人だけができることです。同じくこの世に生きている間、主から霊や天使たちと言葉を交わすチャンスが与えられた人もいます。なぜなら人はその内部では霊だからです。この世で持ち歩いている肉体はただ、最終部である自然すなわち地上にあるこのスフェアの中での機能をはたすために存在しているに過ぎません。

しかし、天使や霊たちと、みずから霊となって話すことは、だれにもできることではありません。ただ信仰と愛において天使たちとお付きあいできるような人だけです。その信仰と愛が主に向かっていないかぎり、そのお付きあいはできません。なぜなら人は主にたいする信仰と愛をとおして、すなわち教義の真理および主のみ力による生活の善をとおして、結ばれるからです。そして一度結ばれると、地獄からの悪霊たちの嘲笑侮蔑から守られます。それ以外の人の場合、その内部がそれほどまで開いていません。なぜなら、主のうちにいるわけではないからです。

以上のような理由で、現在天使たちと話し言葉を交わす人がわずかしきません。それが証拠には、現在霊や天使の存在を信じる人がほとんどいないし、さらに一人ひとりの人間に付添っていることなども信じてもらえません。また霊や天使たちを通して、人は天界と結ばれ、その天界をとおして主と結ばれることも信じておらず、さらに人がその肉体の面で死んだあとと霊として生き、以前同様に人間の形をしているなども、ほとんど信じてもらえません。

124. こんにちの教会では、死後の〈いのち〉についても、天界についても、天地の神である主についても、信仰がまったくない人が沢山います。それでわたしの霊の内部を主が開いてくださいました。それはわたしが肉体の中にいるあいだ、天界で天使といっしょになって、かれらと話を交わしたり、そこでの驚くべきことを目撃して、それを記録することができるためです。それは今後だれかが、「いったい天界から下ってきて、わたしたちに天界のことを話してくれた人がいるだろうか」と言い逃れできないようになるためです。

それでも、当初心の中で天界と地獄について、また死後の〈いのち〉について否定した結果、さらに以上についても抵抗し、否定するに違いないことを、わたしは知っています。なぜなら、一度心の中で信仰を拒否した人が信じるようになることは、カラスの羽が白く変わるより難しいことです。そのわけは、このようなことについては、いつも否定を出発に考え、肯定から考えることがないからです。それにもかかわらず、少数ではありますが、信仰をもっている人たちのため、天使や霊たちについて今までも申し述べており、これからも伝え続けるつもりです。同時に、それ以外の人のある程度までの承認を得るため、また人の知識欲を喜ばすためにも、今また天空の諸天体について願うところは、ここに記録することです。

125. 人が遠く隔たっている天体を見たり、感覚経験を通じて何か言及したりすることは、天界の秘義を知らない人にとって、信じられないことかも知れません。ただし自然世界に実在する空間、距離、およびそれに由来する進展は、その起源や第一の原因から考えると、内部状態の変化であることを知らなくてはなりません。そして天使や霊たちにとっては、それが内部状態の変化として映ります (s s)。

(s s) 来世では、場所における運動、発展、変化は〈いのち〉の内部状態の変化である。同時に、霊や天使たちにとっては、それが現実にそのものとして、実際に見えてくる。1273～1277、1377、3356、5605、10734参照。

そしてかれらもこのような内部状態の変化をとおして、ある場所から他の場所へ、ある天体から他の天体へ、また宇宙の果てにある天体にまで、見掛け上 **apparenter** 移動できるのです。同じく人間も、自分の身体はその場所にとどまりつつ、霊にかんしてはそうにできます。それがわたしに起こったことです。つまり、主の神的慈悲によって、わたしは人間として他の人と交わりつつ、霊として霊たちと交わるチャンスが与えられました。人が霊にかんしてこのように移動できることについて、感覚的な人はそれが理解できません。なぜならそのような人は、空間と時間の中において、みずからの変化進展を時空をとおして計るからです。

126. 宇宙を見ると非常に多くの星座が見えてくることから、世界は多様であることが、だれの目にもわかります。学界では知られていることで、それぞれの星座は、それなりの位置で太陽系を構成しており、それなりにわたしたちの地球の太陽のように固定し位

置つけられていながら、遠距離のため星のように小さく見えます。したがってわたしたちの世界の太陽と同じように、自らの周りに衛星を備えています。その衛星はわたしたちの眼には映りませんが、それは非常な遠距離にあるためです。その星から発する光だけで見えても、その光はわたしたちにまで達するほど反射してくれません。

このように多くの星座をともなった天空は、いったい何のためにあるのでしょうか。宇宙の創造の目的は人間です。すなわち人間によって天使的天界が構成されるためです。無限の創造主にとって人類は何でしょう。ただ一つだけの天体から天使的天界を造られるのでしょうか。創造主にとって一千個の天体でも、いなむしろ何万個あっても十分とは言えません。

この宇宙に百万個の天体があり、それぞれの天体に三億の人がおり、それで六千年で二百世代続いたとします。そして一人ひとりの人間あるいは霊に三立方キュビット（訳注・約1・35立方メートル）の空間を与え、それだけの数の人間また霊を一か所に集めても、この地球の千分の一の空間さえ満たすことができません。それは木星や土星にある一つの衛星の空間さえ満たしえないのです。そのような衛星は宇宙空間の中では小さくて眼につかないようなものです。肉眼ではほとんど見えません。宇宙の創造主にとってこれが何でしょう。創造主にとっては、たとえ全宇宙がいっぱいになっても十分とはいえません。無限な方だからです。

わたしは天使たちと、これについて話しましたが、天使たちが言うには、かれらも創造主の無限性に比べて、人類の数が僅かでしかないことについて、同じような考えをもっています。しかし天使たちは空間をもとにして考えているのではなく、状態から考えます。すなわち天使たちの考えでは、天体の数は何十万・何百万あるか想像もつかないほどですが、それでも主にとっては何ものでもありません。星天にある天体については、これにつづいて経験から話していきますが、わたしが身体はそのまま、霊の面でどのように移動が起こったかが、そこではっきりすると思います。

星天の第一天体とそこにいる霊・住民について見聞したこと

127. 主は天使たちを介して、星天のある天体にわたしを連れて行って下さいました。そこでわたしはその天体を観察するチャンスが与えられたわけですが、その住民とは言葉を交わさず、その天体出身の霊たちと交わしただけです。それぞれの天体で過ごした住民すなわち人間は、現世での生活を終わったあと霊となり、自分の出身天体の側に留まります。その天体や住民の状態についての情報を得るのは、かれらからです。つまり、肉体を後にした人間は、前世の〈いのち〉と記憶を全部もっていくわけです。(t t)。

(t t) 人は死後この世のことがらについては全部記憶している。2476、2486参照。

宇宙の中の天体に連れて行かれるといっても、それが肉体の面ではなく、霊の面でそこに連れて行かれ移動することです。霊は内的〈いのち〉の状態がいろいろ変化することで連れて行かれるわけですが、その変化は本人にとって、空間を進んでいくように思えます(s s)。

〈いのち〉の状態が和合している、また似ているなど、このような天体接近が行われます。すなわち〈いのち〉が和合や類似を結びつけ、不和合や非類似を離反させるものだからです。したがって、人が同じ場所に止まっていながら、霊の面で移動したり、隔たったものに接近するなどとは、どんなことかはっきりします。

しかし、人の内部の状態におうじて、ある霊を地球外に連れて行ったり、その霊の状態が目標の住民に和合・類似するようになるまで、順次その状態を変化進展させていくことは、ただ主のみ力によります。そこには最初から最後まで、前進と後退を重ねつつも、絶え間のない導きと先見的配慮が必要です。まだ肉体の面では現世の自然の中にあり、しかも空間の中にいる場合は、とりわけそうなります。

身体的感覺性に漬かり、それを元にして考えている人にとって、以上のようなことが起こるなど信じられません。なぜなら身体的な感覺能力では、空間をぬきにした進展など理解できないからです。それにたいし自分の霊にある感覺性を差しおき、また肉体の感覺性から脱却し、自分の内部に入って考える人は、信じ理解できるようになります。なぜなら内部思考の概念の中では、空間も時間もないからです。空間や時間のかわりに、時間や空間の出発点になるものがあります。

星天にある天体に関して述べるのは、以上のような人たちのため、それ以外の人のためではありません。もちろん是が非でも、みずから教わりたいと思っている人は別です。

128. 主は天使たちを介し、覚醒の状態、霊にあるわたしを宇宙の中のある天体に導かれました。そのさい、この地球出身の霊たち何人かが同伴し、右のほうに向かって二時間ほど進んでいきました。わたしたちの太陽系が果てるあたりで、最初に真っ白で厚い雲が現れました。その雲の後には、大きな裂け目から、火を伴った煙がたちのぼっています。それは巨大な深淵でしたが、その場所を境に、星天にある諸世界からわたしたちの太陽系が分離されています。その火を伴った煙は相当遠くまで見えています。

わたしはその中間帯の上を越えて行くよう導かれていましたが、その裂け目つまり深淵の中の下の方に霊になっている多くの人を見ました。（霊たちはみな人間の形で現れます。あるいは現実に人間です）。わたしはかれらがお互いに話しているのを聞きましたが、どこからきた人たちか、どんな人たちかは知らされませんでした。ただしその中の一人が、自分たちは、この世界の霊たちが宇宙の他の世界に許可なく移動しないように見ている監視人だと言いました。

またそのとおりかどうか、確かめられました。同伴霊の中に、そこからさき移動する許可のない者がいましたが、その巨大な境目にくるや、自分は滅びると大声で叫びだしました。死の苦しみに嘆き悶える人のようです。それで、裂け目のその部分から先は行かれませんでした。裂け目から出る火を伴った煙が、かれらを窒息させ苦しめたのでした。

129. その巨大な裂け目を通過したあと、わたしはとうとう自分のとどまるべき場所に到着しました。するとその時、上のほうから霊たちがわたしに姿をみせ、その霊たちと言葉をかわすことができましたのです。かれらの話しぶりや物事を感じとったり説明したりする才能から、わたしはかれらが他の天体の人たちであることが、はっきり分かりました。なぜなら、かれらはわたしたちの太陽系の霊たちとは全く違って、かれらもわたしの話し振りから、わたしが遠くからきていると感じとったようです。

130. しばらくのあいだ、いろいろな事柄について話したあと、わたしはかれらに、どのような神を礼拝しているか尋ねました。するとかれらは、ある天使を拜むと言います。その天使はかれらには神人として現れ、光輝いて見えるそうです。かれらに教えを説き、なすべきことを分からせてくれるのも、その天使です。つけ加えて、天使的天界の太陽の中には最高の神がましまし、その方はかれらには現れず、ご自身の天使にお現れになるだけで、敢えて礼拝することができないほど偉大なお方であると言います。かれらが礼拝する天使は、天使的社会 **Societas angelica** であって、かれらを指導し、正義と公正の道を

教えるよう、主がとり計らわれたそうです。すなわちかれらにとっては、その天使社会はある種の炎から出た光です。その炎は松明に似た様子で、勢いよく燃える黄金色を呈しています。

そのわけは、かれらが主を礼拝するのではないところからきます。したがって、かれらを照らす光は、天使的天界の太陽からのものではなく、天使的社会からのものです。天使的社会は、主から与えられれば、下位の領域にいる霊たちに、このような光を示すことができます。

その天使的社会がわたしにも姿をみせましたが、かれらよりずっと高いところにありました。またそこでの炎は、そこから発する光のように見えました。

131. それ以外では、かれらは謙虚です。そして少しばかり単純です。ただわりによく考える霊たちです。かれらがもっている光から、その理知性がどんなものか結論づけられました。いわば、天界にある光を受けるに応じて理解が生まれます。すなわち太陽から発するよう、主から発する神的真理が、天界で輝いており、それによって天使たちは見ることができるだけでなく、理解することができます（u u）。

（u u）諸天界には大きな光がある。1117、1521、1522、1533、1619～1632、4527、5400、8644参照。諸天界におけるあらゆる光は、そこにある太陽として主から発する。1053、1521、3195、3341、3636、4415、9548、9684、10809参照。天界では、神の真理は主から発する光として現れる。3195、3222、5400、8644、9399、9548、9684参照。その光は天使たち霊たちの視覚や理性を照らしている。2776、3138参照。天界の光はまた人間の理性をも照らしている1524、3138、3167、4408、6608、8707、9126、9399、10569参照。

132. その天体の住民や霊たちは、巨大人の中では脾臓の中の何かを表すと、わたしは教わりました。かれらがわたしと話してしるとき、脾臓への流入があつて、わたしはそれが確かめられました。

133. かれらの天体を照らしているその世界の太陽について、わたしは質問しました。そこでは太陽は燃える炎として現れるそうです。わたしが地球を照らす太陽の大きさを言うと、かれら方はもっと小さいそうです。かれらの太陽と言ってもわたしたちの肉眼では

星です。天使たちはさらに、その星は小さい部類にはいり、自分たちの天体から星天が同様に見られると言います。また他の星よりも大きなものとして西に現れている星がありますが、それがわたしたちの太陽であるのを、天界から聞きました。

134. そのあと、その天体をある程度観察できるよう、わたしの視界が開かれました。すると多くの草原、葉の生い茂った樹木の森、そして毛で覆われた羊たちが現れました。そこでわたしは何人かの住民を見ましたが、かれらは下層民で、ヨーロッパの田舎人が着るような服を身につけています。一人の男とその妻が見えました。妻のほうは背丈うるわしく身振りにも気品があります。男の方も同じですが、驚いたことに、かれは偉人のように、尊大とも思える歩調で歩くのです。それにたいして、夫人のほうは謙虚な歩き方をします。天使たちから聞いたことは、ここの天体ではそのような風俗習慣があり、男たちがそんなふうでも、善良なため愛されているそうです。また同じく、かれらの間では、一夫多妻は法律で禁じられていて許されていないそうです。

わたしが見た婦人は腹部の前に広い前掛けをつけており、それで自分を隠せるわけで、またそうになっているのも、腕を中に入れて前掛けを引き付け、こうして逃げることができるようになっています。また裾の方をからげ、その絡げた部分を体につけると、わたしたち地球の女性がしているような胸覆いのようなものになります。

同じ前掛けが男性にも覆いとして使われます。女性からそれを受けとって、男性は自分の背中に当てます。そして身体の下部に垂らします。それが両足まで垂れてガウンのようにして、これを身にまとって歩きます。わたしは以上をその天体で見ましたが、自分の肉眼で見たのではなく、自分の霊の眼でみました。霊は主からチャンスが与えられれば、天体にあるものを見ることができます。

135. 遙か遠方の天体を霊の眼で見ることができるのを疑う人もいるでしょう。わたしはその疑いが分かるので、なぜそのようなことがあるかを述べます。来世での距離は地上での距離とは異なります。来世での距離は、完全に各自の内的状態によります。同じような状態にある者同士は、一つの社会のなかで同じ場所にいるということです。そこではすべての現存は、状態の類似からくるものであると同時に、すべての距離は状態の差異からくるものです。

したがって、わたしがその天体の近くにいたとき、主はわたしをその天体の霊たち住民たちと同じ状態に導き入れられ、そのときわたしは現存することで、かれらと話すことが

できました。以上ではっきりすることは、霊界での諸天体は、自然世界の場合のように隔たっていないこと、ただそこにいる住民や霊たちの〈いのち〉の状態とは、見掛け上現れることです。〈いのち〉の状態とは、愛と信仰の面での情愛の状態です。

天体にあるものを霊が見ることができること、同様に、人も霊の状態でそれが可能なことについて、それがどのようにになっているかを説明します。霊たちも、また天使たちも、この世にあるものを自分の視覚で見ることができません。かれらにとって、この世の太陽系の光は深い闇に包まれています。それはちょうど人が、自分の肉眼で来世にあるものが何も見えないのと同じです。それには天界の光が必要で、人にとってはそれが深い闇に包まれています。それにたいし霊にしても天使にしても、主の思し召しなら、人間の眼をとおしてこの世界にあるものを見ることができます。ただこのようなことを主がお許しになるとすれば、霊たち天使たちと言葉を交え、かれらと一緒にいるチャンスを与えられた者に限られるわけです。かれらは、わたしの眼をとおして、この世にあるものを見、しかもわたしと同じようにはっきり見るチャンスを与えられました。わたしと話している人の言うことを聞くこともできました。

ときとして起こったことですが、ある霊は肉体の〈いのち〉をもっている自分の友人をわたしを通して以前と同じように全くそこにいるように見て、驚いていました。かれらは自分の夫や幼児たちを見て、自分が側にいてかれらを見ており、しかも来世での自分の状態について、わたしが伝えるよう望みを託しました。

とは言え、わたしがこのようにして見たことを、かれらに伝えたり啓示したりすることは、わたしには禁止されています。そのわけは、かれらはわたしが気が狂っていると言うだろうし、わたしの精神が白昼夢を見ているに違いないと、考えるからです。またかれらは、口で信じると言っても、霊たちがいるとか、死者が復活し霊たちの中にいるとか、人を通してかれらが見たり聞いたりできるなどとは、信じられないでしょう。

初めてわたしの内部の視覚が開かれたとき、また来世にいる者がわたしの眼をとおしてこの世とこの世にあるものを見たとき、かれらは仰天して、これこそ奇跡中の奇跡であると言い、また地上と天界との間、天界と地上との間にこのような交流ができたこと、新しい喜びで感動した様子でした。そしてこのような喜びは何か月も続きました。しかし、それに慣れてくると、そのあと何も驚かなくなりました。

わたしは、他の人たちのそばにいる霊や天使たちは、この世にあるものは何も見えず、ただかれらが寄り添っている人間の考えや情愛を感知するだけであることを知らされました。

以上から、人はこの世で人間同士生きているあいだも、同時に天界で天使たちと一緒に生きていることがはっきりしました。また人間の中に、天界とこの世が同時に存在し、行動を一つにしており、人間は天界にあるもの、天使たちはこの世にあるものを、知ることができるようになっていきます。

人が死んで、この世における主のみ国から、天界における主のみ国へ移るとき、本人がこの世で肉体をもって生きていたときと同じような状態のところへ行くわけで、それ以外のところへは行きません。しかし人は肉的となってしまった結果、天界は閉じられてしまっています。

136. 最後にわたしは、その天体出身の霊たちと、わたしたち地球の種々様々な事柄について話しました。とくにここでは他の天体にはない科学というものがあることについて語りました。例えば天文学、地質学、工学、物理学、化学、医学、光学、哲学などです。その他技術がありますが、これも他の天体にはありません。例えば造船、冶金、紙に文字を書いたり、活字で印刷し広報に供したり、地球上にいる他の人間とこのようにして交流したり、さらに何千年もの後代のためそれを保存したりするなどですが、このようにして、主のみ力による〈みことば〉が保存されるようになりました。したがってわたしたち地球には、こうして啓示がいつまでも保存されます。

137. そして最後に、その天体出身の霊たちにいる地獄が示されました。そこで姿をみせた霊たちは、わたしを驚愕させるものでした。わたしはかれらの奇怪な形相を記すことができません。そこでまた魔女たちも見えました。恐ろしいテクニックを使います。かの女たちは緑色の装いをして現れ、身の毛もよだつばかりでした。

星天の第二の天体とそこにいる霊・住民について

138. わたしは主によって、第一の天体以上に地球から隔たっている宇宙の天体に導かれました。それについて今記します。わたしは霊の状態でそこまで行くのに二日かかったことから、それがどれ程遠いかが分かります。第一の天体が右であったのにたいし、第二のものは左でした。霊界での遠さは、前述したように場所的な距離ではなく、状態の差異によるものです。要するにそこへ行き着くまで、二日かかったことから結論として言えることは、かれらがもっている内的状態、つまり情愛の状態と、それに由来する思考の状態は、わたしたち地球出身の霊たちがもっている内部の状態とは、相当違っていることとなります。

わたしは霊にあって、内的状態の変化をとおしてそこへ連れて行かれました。それゆえそこに着くまで、継続的な変化そのものをよく観察するチャンスがありました。しかも、それは覚醒状態で起こったことです。

139. そこに到達したとき、土地が見えず、その代わりに、その天体出身の霊たちが見えました。なぜなら以前にも記したように、どの天体でもその霊たちは、出身天体の近くに姿を現します。それはその住民と同じような気質と天性をもっているからで、しかもその住民に仕えるためです。その霊たちはわたしの頭よりやや高いところに姿をみせました。それでわたしがそこへ行くのを見ていたわけです。

知っておくべきことがらを次に記します。来世で高いところにいる者たちは、低いところにいる者を見ることができます。しかも高ければ高いほど、広い範囲に見えます。そして見えるだけでなく、話すこともできます。かれらは、わたしがかれらの天体の出身者ではないこと、他の遠いところからやってきたことを観察で知りました。それでかれらは、わたしに話しかけ、いろいろなことを質問し、わたしもそれに応えるチャンスがありました。

わたしはとりわけ自分がどの天体出身であるか、それがどんなところかを説明しました。それから、わたしたちの太陽系にある諸天体について話しました。またその時、ある天体、すなわち水星という惑星の霊について、かれらが物事の認識にかんして比較するためあちこちの天体を経巡っていることを話すと、かれらはそれを聞いて、水星の霊たちが自分たちのところにも来たので会ったと言いました。

140. わたしたち地球出身の天使たちがわたしに言ったことですが、この天体の住民や霊たちは巨大人の中で鋭眼 *acies visus* の部分に該当するため、高いところに現れるということです。しかもかれらは著しい鋭眼を備えているそうです。それだけでなく、下にあるものを鋭敏に見分けることで、わたしはかれらと話をしている途中、かれらを驚に譬えました。高いところを飛んでいるし、広範囲に鋭敏に見分けることができるためです。そのように言うと、かれらはわたしが驚が強欲で、邪悪であるという点で、驚に似ていると言ったと思って憤慨しました。わたしは強欲という点ではなく、鋭眼の面で驚に似ていると応えました。

141. かれらの礼拝している神について質問したところ、それにたいして、見える神と見えない神を礼拝していると言います。見える神とは人間の形をしており、見えない神とは形を備えていない神です。かれらの話の中からと、わたしと交流しているさいの思考概念から気づいたことは、見える神とは、われらの主ご自身を指し、しかもかれらは「主」と呼んでいることです。

それにたいして応えるチャンスが与えられました。つまりわたしたちの地球でも、見えない神と見える神を礼拝しており、見えない神は「父」と呼ばれ、見える神は「主」です。しかも両者は一つであることは、主がお教えになったとおりです。すなわち、父の姿を見た者はないこと、父と主ご自身は一つで、主を見た者は父を見たこと、また父は主ご自身の中におり、主ご自身は父の中にいるということです。したがって、両者とも神であると同時に、一つの人格です。以上が主ご自身の〈みことば〉です。ヨハネ5・37、10・30、14・7、9、10、11参照。

142. そのあと、わたしは当該の天体出身の他の霊たちにも会いました。その霊たちは、わたしがコトバを交わした霊たちの下の方に姿をあらわしました。かれらは偶像崇拝者で、美しくもない人間に似せた石像を拝んでいます。来世にやってくると、だれでも初めは、この世でもっていたような信心を行うことは、知っておいていただきたいと思いません。そしてそれが次第に取り除かれていきます。どんな信仰でも人の〈いのち〉の内部に植え付けられていて、それが取り除かれるとしたら、徐々にしか行われません。以上を眺めていると、かれらにたいして、死すべきものではなく、生きている方を拝むように言われました。それにたいして、かれらは次のように応えました。

「生きているのは神であり、石像ではないことは知っています。むしろわたしたちは、人に似せて作られた石像を見ながら、生きている神を考えるようにします。そうしなければ、見えざる神についてのイメージを作り、それを固定化させる思考概念ができません」と。それにたいして、次のように言われました。

「主こそ、人間の形のもとで考えられた見える神です。主に向かうとき、見えざる神のイメージづくりをし、固定化させることができます。人は、こうして主と結ばれますが、そのとき初めて、考えと情愛つまりは信仰と愛で、見えざる神と結ばれることができるようになります。それ以外のやり方ではできません」と。

143. 高いところに姿をみせていた霊たちは、かれらが帝国また王国の支配下にあって生活していたかどうか、質問されました。それにたいしてかれらは、

「帝国と言っても、何のことか分かりません。わたしたちは種族、家族、家々に分かれて生活していました」と。

「それで安全でしたか」と聞かれて、

「安全でした。家族同志で嫉妬心をもったりしないし、人の物をほしがるようなことはありませんでした」と。

こんな質問をしたことで、互いに敵意をもち、侵害を防ぐために防御を必要としていたかのように思われたため、憤慨していました。かれらは、必要なものは衣食だけで、それさえあれば静かに満足して生活したと言っていました。

144. それからかれら自身の天体について尋ねたところ、かれらは、草原あり、花園あり、果樹が生い茂った森があり、また湖があって魚がいると言います。また金色の羽根をつけた青い鳥や、大小の動物がおり、小型の動物の中には、わたしたちの地球のラクダに似ていて、背中が隆起していると言います。ただ動物の肉を食べずに、魚を食べるだけだそうです。もちろんそれ以外にも木の実や土地に生えるマメ・野菜類を食べます。そして、かれらは建築された家屋に住まず、林の中に住むと言います。雨や太陽の熱を防ぐためには、樹木の葉が屋根がわりをします。

145. かれらの太陽について質問しました。それはわたしたちの地球からは肉眼で見える星のことです。かれらは、太陽は燃える炎として現れ、大体人間の頭くらいの大きさ

に見えると言います。天使がわたしに言ったことは、かれらの太陽となっている星はどちらかといえば小型のもので、天球の赤道からあまり遠くないところに見えるそうです。

146. かれらの天体にいる人間に似た霊たちが見えてきました。その容貌はわたしたち地球の人間の顔に似ていなくもありません。ただかれらの眼は小さく、その鼻も小型です。わたしの眼からすると、それが割りと醜い感じがしましたが、かれらは、眼も鼻も小さいほうが美しいのだと言います。女性を見ると、多色のバラのあるガウンを身にまとっています。わたしが、この土地ではどのような材料でそのような衣装を造り上げたのか尋ねました。かれらは糸にする材料は草からとって織ったと言います。そして糸はそのまま二重三重に組み合わせて水糊で堅め、草の汁でその繊維を染めるそうです。それからどのようにして糸を集めるかを見せてくれました。地面に仰向けになって座り、足の指でその糸を繰り、繰った糸とたぐり寄せて、手でうまく合わせました。

147. その土地では、夫にとって妻はひとりだけだそうで、複数の妻をもつことはありません。そして子供は十人から十五人つくります。またかれらが付け加えたことは、その土地にも娼婦が見つかるそうです。でも肉体の〈いのち〉が終わって霊になってから、魔女になり、地獄に投げ込まれます。

星天にある第三の天体とそこにいる霊・住民について

148. 遠くの方に霊たちが現れましたが、近づこうとしません。ときにわたしの周りにいた地球出身の霊たちとは一緒になりたくないそうです。それでわたしはかれらが他の天体の者と分かりました。あとでわたしに言われたことは、かれらは宇宙のある天体出身者だそうですが、それがどこにある天体であるのかわたしには告げられませんでした。

その霊たちは自分の肉体について考えることを全然望まず、わたしたちの地球出身の霊たちとちがって、肉体的なことにも物質的なことにも興味がありません。それで近づいてくることを望まないわけです。しかし何人かの地球出身の霊たちがそこを離れてから、近づき、わたしと話しました。それでも、そのときスフェアの衝突からおこる不安のようなものを感じました。

霊たちや霊の社会の周りには、霊的なスフェアが取り巻いており（c c）、かれらの情愛やそれに由来する思考の〈いのち〉からはそれが流れ出てきます。したがって、そこに相反する情愛が存在すると、衝突があり、その結果不安が起こります。

かれらはあえてこちら側に近づかないことを、わたしたちの地球出身の霊たちが話してくれました。近づくと不安でたまらなくなるだけでなく、手足がへびにからまれたような感じになるそうです。そしてそこを去るまでは解放されません。そのように感じるのには、相応が原因です。なぜならわたしたち地球の霊たちは巨大人のなかでは、外部の感覚に該当します。それは肉体的な感覚性です。そしてこのような感覚性は、来世ではへびによって表象されます（x x）。

（x x） 霊界では人間の外部的な感覚性はへびで表象される。なぜなら外部的な感覚性は最下層にあり、人間の内部的なものに比較して、地面に伏したもので、ちょうど地面を這っているようだからである。したがってそのような感覚性をもとにして推論する人はへびと呼ばれている。195、196、197、6398、6949参照。

149. その天体の霊たちはそのような様相から、他の霊たちの眼にかれらは、はっきりした人間の姿をもつ他の霊たちと同じようには見えません。むしろ雲のようです。それはほとんどの場合、明るい人間性が染み込んでいる黒雲に似ています。しかしかれらは、内部は明るく、天使になると、黒ずんでいたものが美しい青色に変わると言います。以上がわたしにも示されました。

わたしは、かれらがこの世にあったときも、みずからの肉体についてそのように考えていたのかどうか尋ねました。かれらは応えて、自分たちの天体の人間は、肉体的なものには何の価値も置いておらず、肉体の中にある霊だけに価値を置いていると言います。霊は永遠に生きるのにたいして、肉体は滅びるのを知っているからです。

かれらはまた次のようにも話しました。かれらの天体には、肉体にある霊は永遠から存在し、はら孕まれたとき、肉体に注入されたものと信じている者が沢山いるそうです。ただし、現在、事実はそうではないことを知って、そのような誤った考え方をしていたのを後悔していると付け加えました。

150. わたしはかれらに、わたしたち地球にあるものを見たいかどうか尋ねました。わたしの眼を通してそれができるからです（前135節参照）。ところがかれらは、まずそれが出来ないし、望まないと言います。なぜなら、地上的なものや物質的なものしか見られないし、自分たちは出来るだけそのようなものを考えないようにしているからだそうです。

それでもかれらの面前に、わたしたち地球で王公たちが住んでいるのによく似た壮大な宮殿が表象的に現れました。このようなものは霊たちの面前に表象的に現れることが可能だし、表象された場合は、そっくりのものが現れます。するとその天体出身の霊たちは、それを評価することなく、大理石の偶像のようだと言います。それでかれらが話してくれたことは、かれらのところにはもっと素晴らしいものがあり、それは石造でなく木造の聖殿だということです。

かれらに向かって、それもまた地上的ではないかと問うと、そのようなことはなく、天界的だと言います。なぜならそれを眺めると、地上的な思いではなく、天上的な思いを抱くようになるそうです。死後はそのようなものを見ると信じています。

151. その時、わたしたち地球出身の霊たちの眼前に、かれらの聖殿が表象されました。霊たちはこんな壮大なものを見たことがないと言います。わたしも見ることができましたので、それを記すことができます。

伐採された木材で造られず、自然に生い茂ったものだけで造られています。かの天体では驚くほど長く高い樹木を使います。樹木は最初苗木のときに順序ただしく植えます。そしてポーチや散歩道などもそれで造り、その枝も若いうちに綺麗に剪定して整え、生長するとそれが聖殿の土台になり、床になるように組み合わせられます。側面は壁になるように

持ち上げ、上のほうは屋根になるようアーチ状に織り成されます。そのようにして驚くべき技術で地上に聳える聖殿を造ります。聖殿への登り口は樹木の枝をずっと伸ばして絡ませ、しっかりと結合するように造ってあります。また聖殿の内外は、いろいろな形に枝葉を利用し、このようにして、やしろ社全体に装飾をほどこします。

ただし聖殿の内部はどうなっているのか見るチャンスは与えられませんでした。ただ聞いたところでは、かれらの太陽の光が枝葉の間からもれて入ってくるそうで、ところどころに水晶があり、それを通して壁の回りに虹のように色とりどりの光が映り、とりわけどの色よりもかれらが好む群青色と黄金色に映えているそうです。以上がかれらがわたしたち地球で一番壮大と思われる宮殿以上に好む建築です。

152. それから、住民は高いところに住もうとしません。むしろ地上でみすぼらしい小屋に住んでいますが、それは高いところは天界にいらっしゃる主のもので、地上にいる者にはみすぼらしいのが当然だそうです。

わたしはかれらの小屋を見せてもらいました。長方形をしていて、内部の壁にそって一人ひとりが横になる寝床が並んでいます。その反対側の入り口には、円形に引込んだ場所があり、その前にテーブルが置いてあり、その後ろに暖炉があり、その暖炉の光で部屋全体が明るくなります。その暖炉には燃える火はなく、光をはなつ木が置いてあり、その木から、暖炉の炎ほどの光が発しています。その木は夕方になると、残り火がある木のような感じで現れると、かれらは言います。

153. かれらは社会を造って生活しているのではないそうで、むしろ家単位です。礼拝のときに集まるさい、社会になります。そのとき教える人は聖殿の中を歩き、他の人たちは側面のポーチにいます。そのような集会は、かれらにとって聖殿を見、その中で礼拝できる喜びによって、内面的になります。

154. 神礼拝についてかれらは言っていました。かれらは人の形をした神を認めます。つまりそれは、わたしたちの主です。人の形をしている神を認めれば、だれでもわたしたちの主によって受け入れられ、導かれると言います。それ以外の場合は、形をもたないものを考えているわけで、導かれることはありません。それに付け加え次のように言いました。

「この天体の住民たちは、天使や霊たちとある種の直接交流をもっていて、それで天界について教わります。それで、自分たちの思考・情愛から肉的なものを排除するので、他の者より比較的たやすく主によって導かれます」と。わたしはかれらのもとで悪い者たちは、どのようになるか尋ねました。すると、

「この天体では、邪悪な人間になることは許されません。もしだれかが悪いことを考えたりしたりすれば、ある霊がいてその者を非難し、悪に固執すると死をもって脅します。そして悪いことをし続けると、気絶して死にます。そのようにしてこの天体では、人々が悪の伝染から守られているのです」と。

そのような霊で、わたしのところに遣わされた者がいました。そして住民と話す調子でわたしに話しました。さらにその霊はわたしの腹部にある種の苦痛を与え言いました。

「悪いことを考えたり、悪いことをしたりする者には、このようにします。そのような悪に浸りつづけると、死をもって脅します」と。

かれらはまた言いました。

「神聖なものを冒瀆する者は厳しい罰を受けます。罰を与える霊がやって来る前には、生々しい色をして大口を開けたライオンの幻でかれらに現れます。それがあたかも頭から食いかかってきて、頭を胴体から引きちぎるように見えます。それでかれらは恐怖にかられるわけです。かれらは制裁係りの霊を悪魔 **diabolus** と呼んでいます」と。

155. わたしたち地球では啓示がどのように扱われているか、かれらは知りたがっていましたが、わたしは言いました。

「啓示は〈みことば〉をもとにした記録と説教によっており、霊たちや天使たちとの直接交流はありません。その記録は印刷で広く一般に読まれ、公の集会で朗読されたりするので、理解が行き届き、生活も改められます」と。

かれらは他のところでは知られていないこのような印刷技術が存在することに、非常な驚きを示しました。同時に、わたしたちの地球では肉的・地上的なものがこれほどまで愛されている結果、天界からくる神聖なものは、そうしなければ影響を与えたり、受け止められたりしないということも分かっただけです。地球人にとっては、天使たちと話すなど、かえって危険なわけです。

156. その天体の霊たちは頭部領域の右よりの上のほうに現れます。霊たちはみな人間の体に対応するところから判別されます。それは、全天界は人間のあらゆる部分に相応

関係をもっているからです（f）。その霊たちはその領域にじっとしていましたが、それ
もかれらの相応関係は、人間の外部でなく、内部との関係であることから、そのような遠
隔性を保っているのです。かれらの行動は、はなはだ感じやすいある種の振動をともなっ
て、左膝に及び、膝の上と下のほうにもわずかの影響を与えます。それは自然的なもの
と天界的なものとの間の結び付きに対応する印です。

星天における第四の天体とそこにいる霊・住民について

157. 太陽系外の宇宙にあるもう一つ他の天体にわたしは連れて行かれました。それはわたしが霊にあって、わたしの精神の状態が変化することで実現したわけです。それは、前に何度か述べてきたように、霊にあって場所から場所へと導かれることは、とりもなおさず、本人の内部の状態の変化によるわけで、そのような変化は本人にとって、場所から場所へと進行していくこと、つまりは前進 *profectiones* のように思われます。わたしの〈いのち〉の状態から、かれらのもっている〈いのち〉の状態に到達するのに、10時間かかり、霊がそこまで至るのに、以上のようなことがありました。

わたしは左側に、つまり東のほうに向かって連れて行かれ、地平線から少しづつ上昇しているように思われました。同時に、わたしのいた出発点がもう見えなくなるほど、以前の場所から前進していくのがはっきり観察できました。そのあいだ、わたしといっしょだった霊たちと、いろいろ話すことができました。

ある霊がわたしたちといっしょでしたが、その霊は地上で生活していたとき、高位聖職者で説教家であるとともに、すこぶる悲劇的な小説を書く人でした。わたし自身かれについて考えたことで、同伴の霊たちはその人が他の人以上に心からのキリスト信者であると思いました。なぜならこの世では、考えが先行し、説教や著書で判断され、本人がこの世にいなければなおさら、〈いのち〉から判断されることはありません。さらに生活の上で何か問題があっても、弁解を耳にします。なぜならある人については、その考え、思考、感じとったことなどが、すべてをその人の都合のいい方向にもっていきます。

158. わたしは霊の面で、太陽系の外の星天に長期間滞在したことに気づきました。（それに気づいたのは、状態の変化や、見かけ上の継続的前進で、それもおよそ10時間くらいでした）。そしてある天体の側にいる霊たちの話しているのを耳にしました。そのあと、わたしにもその天体が見えました。すこし話してから、わたしはその霊たちに近づきました。そのときかれらが言いました。

「他のところから来訪者が来るたびに、かれらと神について話をかわすのはいいのですが、かれらはわたしたちの思考概念を乱します」と。

そしてかれらがやってくる道順を示しました。それは、わたしたちの地球出身の霊たちだったことがそこでわかりました。それにたいしどんな点で混乱するのか尋ねたところ、かれらは、一人の神と言いながら、三つのペルソナに分かれていることを信じなくてはな

らないということだと言います。かれらの考えを調べた結果、それが連続した三性でなく、分離した三性であることが分かりました。ある場合は三人の神が、一人がもう一人にというふうに互いに話していて、ある場合は二人が並んで座り、第三番目の神がその二人に耳を傾け、その二人から出てくるように言います。一人ひとりのペルソナについて、それを神と呼びながら、それぞれが別であると考え、それでも一人の神であるとしします。以上のような考えは混乱させるものだといひに不平を言いました。三つを考えながら一つであると言うからです。だいたい言うように考え、考えるように言うのが当たり前だからです。

この世で高位聖職者で説教家であった霊もわたしと一緒にでしたが、その人も、ひとりの神と三つのペルソナについてどんな考えをもっているか調べられました。すると三人の神が表象され、それがしかも連続して一つとなっています。しかもその三性は神であるから見えないものとして一つだと言うことです。

このようにして表された結果、かれはそのとき主についてではなく、ただ父についてだけを考えていたのが分かりました。そして見えない神とは、原初の状態の自然です。それで自然の内部こそ神性そのものとし、その結果、簡単に自然を神の代わりと認めるように導かれて行きます。

来世でのことがらで知っておく必要があるのは、人の考えは一つ一つが見えるものとなることです。それで一人ひとりがどんな考えをもっているかまた、信仰に関係あることをどんなふうに感知しているかを調べられます。神についての考え方が、あらゆることの中で一番大切です。なぜならその考えが純粹であれば、それによって、神および天界との結びつきがあるからです。

それからかれらが神についてどんな考え方をしているか質問されましたが、かれらが応えるには、見えない神のように捕えておらず、人の形をした見える神として考えているそうです。そうと知っているのは内的な感知力によるだけでなく、神がかれらにたいして人として現れたことからくるからだそうです。さらに付け加えて言いました。

「来訪者の中には神を見えない方として、つまり形も性格もはっきりしないものとして考えている人がいますが、その人たちは神について概念を得ることは不可能です。なぜなら見えないものは思考概念のうちに入ってこないからです」と。

それを聞いて、かれらにたいして言いました。

「神について考えるとき、人の形を通じて考えることは、いいことだと思います。わたしたち地球でも、とりわけ主について考えるとき、そのように把握している人が沢山います。古代人はそのように考えていました」と。

わたしはそのとき、アブラハム、ロト、ギデオン、マノアとその妻について話しました。またわたしたちの〈みことば〉には、かれらについて記されており、かれらは神を人の形で見たとということ、またその見えた方が宇宙の創造主であるのをかれらは認め、エホバとお呼びしたこと、しかも同様な内的な感知力によってそうしたこと、それとともに、現在ではキリスト教の世界では、その感知力が消滅し、ただ信仰をもった無学単純な人の中に残っているに過ぎないと伝えました。

159. わたしが以上を口にするまでは、かれらはわたしたちの同伴者が三神の考え方でかれらを混乱させる意図のある者だと思っていました。しかし以上を聞いて喜びを隠し切れず、次のように言いました。

「わたしたちが現在主と呼んでいる神は、ご自身について教える人々を遣わされました。かれらは、外から人が来て、神には三つのペルソナがあるなどと言って、わたしたちの心を掻き乱すようなことをさせません。なぜなら神が唯一であることをわきま弁えているからです。ただ三性については、一つの魂 **unanimum** としてしか捕らえておりません。それは神を天使のように考えることでもあります。つまり天使にあっては、〈いのち〉の内部は思考や英知の源ですから見えません。ところが外部は人の形をしているように見え、その外部がもとになって、天使は見たり行動したりします。そして天使には愛と信仰のスフェアがあり、それが〈いのち〉の発出となります。なぜなら、一人ひとりの霊や天使から〈いのち〉のスフェアがでており、そのスフェアをもとにして遠近を知ります (c c)。主に関して述べれば、ご自身のみ力がもとになって〈いのち〉の発出があり、それが天界を満たし、天界を天界にしている神性そのものです。なぜなら、その方から発出しているのは、愛と信仰の〈いのち〉の存在そのものだからです」と。

そしてまた、以上のように考えなければ、三性を一つのものとして感じとることはできないと言いました。それを聞いて、次のようにわたしは言いました。

「そのように、三性 **Trinum** と一つ **Unum** を一緒に考えれば、主について天使たちが考えていることと一致します。それこそ、主がご自身について教えられる教義に基づいています。なぜなら主は父とご自分是一つである、また父はご自分の中にあり、ご自分は父の中にある、そしてご自分を見る者は父を見ると言われました。また、ご自分を信じる者は父をも信じ、父がどんな方であるかが分かるとも教えられました。それから「真理の霊」また「聖霊」と呼ばれる弁護者 **Paracletus** がご自分から出て、聖霊みずからの力では

く、ご自身の力で語られると言われましたが、それによって聖霊が発出する神性であることが分かります。

また、この三一性の考えは、主のご在世当時の主の〈いのち〉にある存在と実在とも一致します。ご自分の〈いのち〉の存在は、エホバによってみごもられたわけであり、神性そのものでした。だれでも自分の〈いのち〉の存在は、みごもりを招来させた者に由来します。その存在に根差した〈いのち〉の実在は、形をもった人間性です。人間一人ひとりの場合、〈いのち〉の存在は父に由来し、それを靈魂と呼びます。そして〈いのち〉の実在を肉体と呼びます。靈魂と肉体が一人の人間を形成します。

両者間の関係は、潜在的推進力をもったもの *id quod est in conatu* と、それが現実化したもの *id quod est in actu* との関係に似ています。なぜなら、活動 *actus* とは行動する推進力 *conatus agens* を表すからです。したがって両者は一つです。人間の場合、推進力を「意志」と言い、行動する推進力を「行為」と言います。肉体は、主要部である意志が行動するときの手段 *instrumentale* です。そして手段と主要部とは、行動するさい一つになります。靈魂と肉体の関係もそれと同じです。天界にいる天使たちは、靈魂と肉体についてこのように考えています」と。主がご自身の人間性を神化されたのは、ご自身の中にある神性に由来します。その神性とは、父からくる靈魂です。こうして霊たちにはそれが分かりました。キリスト教の世界ならどこでも、このような信仰を受入れ、意見を異にすることはなく、次のように教えられています。

「キリストは神であるとともに人でもあります、それは二つでなく、一人のキリストです。すなわち唯一独自のペルソナ人格です。それは肉体と靈魂が一人の人間を構成しているのと同じように、神と人は一人のキリストになっています」(y y)。

(y y) アタナシオス信条

このような一致が存在したこと、つまり主にはこのような一体性があるわけで、主は靈魂の面だけでなく肉体の面でも、この世で栄化され復活されたことになります。そうでなければ、人ではないことになります。それについては、弟子たちに教えて、「わたしに触って見なさい。霊には肉も骨もないが、ご覧のとおりわたしにはある」(z z)と言われました。

(z z) 人は死後ただちに霊の面で復活するが、それでも人間の形をしており、個々全体にわたって人間である。4527、5006、5078、8939、8991、10594、10597、10758参照。ただ復活するのは霊の面だけで、肉体の面ではない。

10593、10594参照。主だけが肉体の面でも復活された。1729、2083、5078、10825参照。

その霊たちは、以上のことがよく分かったようでした。なぜなら、以上は天使的霊であるかれらの理性に、すっと入っていったからです。そのときかれらが付け加えたことは、天界の権能は主だけのもの、天界は主ご自身のものであることです。

主が天に昇られるまえ、ご自身口ずから言われた〈みことば〉があるので、わたしたち地球の教会はそれを知っていると応えました。つまりそのとき、「天においても地においても、一切の権能はわたしに与えられている」と言われました。

160. そのあとわたしは、その霊たちとかれらの天体について話しました。なぜなら、主がかれらの自然的・外部的な記憶を開いてくださる場合、霊たちはみな以上が分かるそうです。自分たちの世界にいたときの記憶を伴ってくるのですが、主の思し召しがなければ、開かれないそうです。かれらは、自分の出てきた天体について言ったことは次のようです。

「その許しができると、自分たちの天体にいる住民が現れます。それから人間同士のようにかれらと言葉を交わしますが、それが起こるのは、みずからの自然的・外部的記憶に戻され、この世で生きていた頃もっていたような思考に入るときです。住民たちとしては、そのときかれらの内的視覚、すなわち霊眼が開かれ、それによって見ているわけです」と。さらに、

「住民たちは、自分たちの天体の人ではないことは分からないけれど、かれらの眼前からたちどころに取り去られてしまうので、自分たちの天体の人ではないと感じとります」と。

わたしは、かれらに次のように言いました。

「わたしたちの地球でも、古代人たちには同様のことが起こりました。アブラハム、サラ、ロト、ソドムの住民、マノアとその妻、ヨシュア、マリア、エリザベツ、それから大體預言者たちの眼前に現れたのはそうです。主もまた同じように現れましたが、主を目撃した人たちは、主がそれを明かされるまでは、地上の人としか思えませんでした。しかしこれが今日ではめったにないことになりましたが、それはこのような出現で信仰を強制されるようにならないためです。なぜなら奇跡をとおして入ってきた信仰は、根つきません。それに〈みことば〉をとおして信仰が植え付けられる可能性があっても、強制されないのので、かえって害になるのです」と。

161. この世にあって高位聖職者また説教家だった霊がいて、わたしたちの地球天体以外の他の天体があるとは全く信じていませんでした。なぜなら、主はこの地球にしかお生まれにならなかったし、主なくしては、いかなる人にも救いが存在しないと考えていたからです。それで前述したように、自分の出身天体で人間として現れるときには、霊たちが戻されるのと同じ状態に戻されました。つまりその天体に遣わされ、その天体を目撃しただけでなく、そこにいる住民とも言葉を交わしたのです。そのようなことがあって、わたしとも交流が行われましたが、それはわたしも住民を目撃し、その天体にある他のものを目撃するためだったわけです（前135参照）。

そのさい、人類のなかの四種族が現れました。それも一種族ずつ交替です。最初に現れてきたのは衣服を身につけた人たちでした。それから肉色の肌で裸の人たち、それから燃えるような体をした裸の人、最後に黒人が現れました。

162. 高位聖職者で説教家だった霊が、洋服をきた人たちの側にいたとき、非常に美しい顔の女性が現れました。簡素な服装をしており、ブラウスは肩から優雅に下に垂れ、それが腕にも延びています。頭は、花を織った形の美しい被りもので覆われています。霊は、その乙女を見て非常に喜び、話し合い、またその手を取りました。しかし、乙女はかれが霊であり、その天体出身ではないことを感じとって、その霊から離れました。そのあと、その霊には右側からたくさんの女性が現れましたが、かの女たちは、羊や子羊を牧しっていて、そのとき湖から溝をつたってひいてきた水を飲ませていました。

かの女たちも同じような服装で、手には牧杖をもち、それで羊や子羊たちを水飲み場まで引いてきます。かの女たちによると、羊は牧杖の差し示す方向に向かって行くそうです。見たかぎりでは羊たちは大型で、尾には毛があり、タテもヨコも柄が大きく、女性の方は、近くで見ると、豊かで美しい容貌をしています。男達も姿が見えましたが、その顔は我々地球人のように肉色をしています。ただ違うところは、顎鬚のある顔の下部分は黒く、鼻は肉色というより白色です。

そのあと、前述の以前この世にあって説教家だった人の霊は、その先にも案内されましたが、どうも気が進まない様子です。というのもさっきの気に入った女性のことをまだ考えていたわけですが、それが分かったのは、あの以前の場所には、かれから出てくる雲のようなものが現れていたからです。そのときかれは裸になっている人たちのところにやってきました。かれらは二人ずつ一組で歩いているように見えました。それは夫と妻で、腰に覆いを巻き付け、頭にも巻いています。

かれらのところにきて、かの霊はこの世にいたときのような状態に導かれ、説教をしてみたくになりました。そしてその際かれは、十字架にかけられた主について、かれらの前で説教をしたいことを告げました。しかしかれらは聞きたくないと言います。主が生きておられることを知っているけれど、その十字架のことは知らないと言います。それでかの霊は、生ける主について説教したいと言いましたが、これも断られました。かれらはその霊の口にする音声は天界的ではないし、自分のため、自分の名声のため、自分の名誉のためのものが一杯であるのを感じ取れるし、本人の発する音声を聞いただけで、それが心からのものか、そうでないかが分かるそうです。そんなふうでは、自分たちを教えることは出来ないと言います。

それでかれは黙ってしまいました。この世にいたときは、非常な感動家で、神聖なものにたいして聴衆をいたく感動させることが出来ました。しかし、その感動させる能力はテクニックとしてえとく会得したもので、自分からでたもの、この世に発するもので、天界からではありませんでした。

163. そしてかれらの言ったことは次のようです。

「わたしたちの種族は裸ですが、この種族出身者には結婚的なもの **Conjugiale** があるかどうか、わたしたちはぴんときます」と。

そして次のことをはっきりさせました。それがぴんとくるのは、結婚にかんする霊的概念がもたれているからです。結婚についてはわたしと交流したかぎりでは、こんなふうです。すなわち、善と真理、あるいは信仰と愛との結び付きをとおして、お互いの内部の類似性が出来上がりますが、肉体に向かって流れて行くその結び付きから発して、ここに結婚愛が出現します。すなわち、二人がお互い内部にあって愛し、その愛をもとにして、お互いが欲すること考えることを同じくしたいと思い、精神的な内部の面でいっしょにいるとともに、結びつきたいと思うかぎり、精神的なものはすべて、肉体の中にある種の自然的形象を伴って現れてくるものです。

それで、二人のころにある霊的情愛は肉体の中で自然的なものとなり、結婚愛の感覚を身につけます。二人のころにある霊的な情愛は、善と真理との情愛であるとともに、その二つの結合です。なぜなら、精神にあるすべて、すなわち思考も意志も、真理と善とにかかわりをもつからです。

かれらはまた次のように言いました。

「一人の男と複数の妻とのあいだには、結婚的なものは何ともありません。なぜなら、二人の精神にある善と真理との結婚は、二人だけの間でしか生まれえないからです」と。

164. 前述の霊は、裸で燃える炎の色をした人たちのところに、そして最後に、裸だったり、衣服をまとったりしている黒人のところにやってきました。前者も後者も、同じ天体のどこかに住んでいたということです。霊になると地上隔たったところまで導かれることができるわけです。霊は人間が空間を通過するように移動するのではなく、状態の変化をとおして前進したり移動したりします（前125、127（s s）参照）。

165. わたしは最後に、わたしたち地球の住民の復活について信じていることを、その天体の霊たちと語りあいました。

「人が死んでからすぐ来世にやってくるなど理解できないことです。また顔も体付きも腕も足も、また外部と内部の感覚においても、人間としての姿をもって現れるなど考えられません。さらに衣服を身につけていることや、住居や家があるなどなおさらです。なぜなら、地球上では肉体の諸感覚をもとにして考える人がほとんどで、見たり触れたりできるものしか信じようとしません。その外部の感覚から内部に入っていける人も少数で、天界的なものが感知できる天界の光に上げられることもまれです。それで霊魂や霊についても、人としてはっきりした概念をもちえず、何か命があっても、形のない風、空気、呼吸ぐらいにしか考えていません。

その理由は、かれらが最後の審判と呼んでいる世の終りになって、初めて復活すると信じているからですが、そのさい、肉体は塵に帰り空中に消え去ってしまったものが戻ってきて、自分の霊魂または自分の霊と合体します」と。

わたしはさらに付加えました。

「前述したように、外的な感覚しか用いない場合、その人は自分の霊魂または霊が、外界に拡散した肉体を取り戻さないなら、人間として、人間の形をもって生きることにはできないと思っているわけであり、かれらにはそう信じていることが許されています。したがって、それが復活することを言わなければ、復活や永遠の生命の教義は不可解なものとして精神的に拒否してしまいます。復活をそのように考えるとき、それなりに有益となるのは、病床に横たわって、以前のように現世的・肉体的、また感覚的に考えるのではなく、死んでからすぐ再び生きるようになると信じていることです。そのときかれらは天界について話し、最後の審判と関係なく、死後ただちに続く生命への希望について話します」と。

わたしはまた次のように話しました。

「わたしは何回となくびっくりしたのですが、信仰をもっている人が死後の〈いのち〉また死に向かう人・亡くなった人について話すとき、同時に最後の審判について考えさえしなければ、死んだ後すぐ生き、人間として生活することを信じるのですが、最後の審判の考えが入ってくるや否や、自分の靈魂と再び結合する地上の肉体について、本人の考えが物質的なもの変わっていきます。それは、かれらは人間一人ひとりがその内部で霊であること、肉体とそのあらゆる部分の中で生きているのは霊であって、肉体は自分自身からは生きられないことに気づいていないからです。さらに肉体が人間としての形をもっているのは、各自にある霊のおかげです。すなわち、人が人であり得る根拠は、霊のためです。そして霊は同じ人間の形をしていても、肉眼では見えませんが、霊たちの眼には見えます。したがって、肉体の視野が除かれ、霊的視野が開かれてくると、天使たちが人間として現れてきます。〈みことば〉にもあるように、天使たちは、こうして古代人たちに姿を現しました。

わたしはまた、この世に人間として生きているとき、わたし自身知っていた霊たちと何度か話しました。わたしはかれらに以前考えていたとおり、自分の地上的肉体と再結合したいか尋ねました。肉体との結合という考え方に長い間逃げ込んでいたと聞いただけで、かれらは驚き呆れ、この世では訳も分からず、めくらの的な信仰でそのように考えていたということです。

166. その他に、その天体で見たものの中に、かれらの住居があります。それは細長く造られた貧しい家で、側面には内部に分けられているアパートすなわち小部屋の数にしたがって、窓がついています。屋根は丸屋根で、両端には入り口があります。かれらが言っていました、家は土で造られ、屋根は茅葺きだそうです。また窓は草の繊維を織って造ってあり、光が通過できるようになっています。

幼児たちもそこに姿を見せました。かれらは、近所の人たちが、格別幼児のためにそこにやって来ると言います。それは両親が注意して見ているところで、他の幼児たちの仲間入りをするのが目的です。

収穫を待つばかりになっていて、白く光る農地を見ました。その収穫の種つまり穀物を見せてもらいましたが、それは中国の小麦に似ていました。またそれで作ったパンも見ましたが、それは小さく四角に切ったものでした。その他また花の咲いた草原を見ました。

またザクロに似た果物がなっている果樹もありました。葡萄の木とは違った灌木を見ましたが、それは丸い実を結ばせるもので、それからワインが作れるそうです。

167. その天体にとっての太陽は、わたしたちにとっては星ですが、わたしたちの太陽の四分の一くらいの大きさで、燃え輝いています。わたしたち地球の日時と比較して、一年はだいたい200日、一日は15時間くらいです。その天体は星天のなかでも小さいものに属し、その一周はおよそ500ドイツ・マイル（訳注・3700キロメートル）です。そう言ったのは天使たちで、かれらはわたしの中、つまりわたしの記憶の中を見て、わたしたち地球の長さと比較して、そう言いました。

そのように結論づけたのは、天使たちの概念構成に基づいていますが、かれらはそれによって他の天体の空間や時間に対応する正しい基準で、時間空間の計り方を知っているのです。天使たちの概念構成は霊的であり、このようなことでも、人間の自然的概念構成をはるかに凌駕しています。

星天の第五天体とそこにいる霊・住民について

168. わたしは再び、宇宙にあるわたしたちの太陽系外にある他の天体に連れて行かれました。それもまた状態の変化によって行われ、継続して12時間かかりました。わたしと一緒に地球出身の霊や天使たちが大勢いて、道々つまり進行中かれらと話しあいました。あるときは斜め上方へ上ったり、斜め下方に降りたりしましたが、右の方へ継続的に進みました。来世ではそれが南に向かうこととなります。わたしは二か所でしか霊たちを見ませんでした、かれらと話したのは一か所でした。

道々、すなわち進行中、わたしは天使や霊たちのための〈主の天界〉がいかに広大かを観察するチャンスが与えられました。無人の天体を見て結論づけたことは、何万という天体があって、各天体に地球上の人間の数ほどの人が住んでいても、そのための住居は、永遠に、しかも決して、いっぱいにならないほど広大であることです。わたしたちの地球の周りには、地球のために、天界の延長がありますが、それと比較して、結論的に分かってきたことは、その広がり相対的に小さなもので、無人の広がり何千万分の一にもならないということです。

169. さて当該の天体出身の天使的霊たちが面前に現れました。そしてわたしたちに話しかけ、わたしたちが何者で、何を求めているかを尋ねました。それでわたしたちは次のように言いました。「あちらこちらを巡回しています。こちらに連れてこられたからと言って、わたしたちを恐れないでください」と。かれらはわたしたちが、神や信仰など、それに類することがらで、かれらの心を乱す人たちの仲間ではないかと恐れていると言います。かれらはそのような人間を避けるため、どこへでも行くつもりで、自分たちの天体のこの方位にまで越してきたのだそうです。なぜそのように乱されるのか尋ねると、三位の考え方と、神の中に人性の欠けた神性をもってくることだと応えました。神は唯一にましまし、しかも人であることをかれらは知り、感じとっているということです。

かれらの心を乱すため避けられている人々は、わたしたち地球出身者であることが感じとられました。同時に地球出身者の中には、この世で身につけた遍歴への執念と楽しみで、来世でもこのように経巡っている者がいるため、そのようなことが起こったわけです。他の天体にはこのような旅行癖をもった者がいません。それから、かれらは地球で異邦人を改宗させる熱意から旅行していた修道僧であることが分かりました。

それでわたしたちは、かれらに言いました。

「あなたがかれらを避けておられるのは結構なことです。かれらの意図は教えることよりも、むしろ利得を得、支配することです。最初はいろいろ手段をろうして人の心を掴もうとしますが、結局はかれらを奴隷にします。とにかくあなた方が神について考えておられることを、そんな人達によって乱されないよう努めておられるのはいいことです」と。するとかれらは言いました。

「かれらは自分たちが言っていることに信仰をもち、信じ込まなくてはならないと言うので余計混乱します。わたしたちはむしろ、そうだと心に感じとるわけですから、信仰また信じるということが何か分かりません。わたしたちは主の天的王国の出身で、天的王国では、各自が内的な感知力で、あなた方が信仰と呼んでいる真理を知っています。わたしたちは主のみ力で照らされています。そうでなければ、靈的王国にいる者ということですよ」と。

かれらはその天体の天使的靈で、天的王国出身者であることが、かれらの考えの元になっている炎を見てわかりました。すなわち天的王国においては、光は炎のようですが、靈的王国では白色です。天的王国の出身者は、真理について語られると、そうです、あるいは、そうではありません、としか言わず、それが果たしてそうかそうでないかなど推論することはありません。かれらについて主は、「あなた方の言うことは、〈はい〉または〈いいえ〉であって、それ以上は悪からでるものだ」と言っておられます。それゆえ、その靈たちは「わたしたちは信仰とは何か、信じるとは何か分からない」と言ったわけです。ある人が自分の眼で家屋や樹木をはっきり見ている友人にたいし、家屋や樹木が存在することにたいし信仰をもてとか、信じなくてはならないと言っているようなものだからです。主の天的王国からきているのは、このような人たちであり、また天使的靈たちとはこのような靈のことです（a a a）。

（a a a）天界は二つの王国に分かれ、一つは天的天界、もう一つは靈的天界と呼ばれている。3387、4138参照。天的王国の天使たちは、靈的天界の天使たちより無限に多くを知り、無限に深く英知を味わっている。2718参照。天的天使は靈的天使のように、信仰をもとにするのではなく、内的感知力をもとにして考えたり話したりする。202、597、607、784、1121、1387、1398、1442、1919、7680、7877、8780参照。天的天使たちは信仰の真理については、ただそうです、そうではありません、と言うだけであるのにたいし、靈的天使たちは、それが果たしてそうかそうではないかを推論する。202、337、2715、3246、4448、9196参照。

わたしたちは、かれらに向かって次のように言いました。

「わたしたちの地球には、内的感知力をもっている人は少数です。それは、若い頃から真理を学びますが、それを実行しないからです。人間には、理性と意志と言われる二つの能力があります。記憶の中や理性の中にある程度真理をとりいれても、それ以上を出ることなく、〈いのち〉の中、意志の中に取り入れることをしない人は、主からの照らしや内的視覚をもつことができません。それゆえ、あれこれ信じなくてはならないとか、信仰をもたねばならないなどと言い、それが真理であるか真理でないかと推理を働かせることがあっても、内的視覚つまりある種の照らしによって、理性が感知するよう望んでいるわけではありません。

そんなふうにするのは、かれらのもとにある真理には、天界からの光がないからです。また天界からの光がないままで考えている人にとっては、虚偽が真理のように、真理が虚偽のように見えてきます。地球上では非常な盲目が多くの人々の心を支配しています。それは、人が真理を実行しなくても、その真理にしたがって生活しなくても、信仰のみによって救われ得ると言っているからです。人が人であるのは 〈いのち〉に根差し、〈いのち〉に基づくのではなく、〈いのち〉の欠けた信仰から出る知識によると言うわけです」と。

そのあと、わたしたちは主について、主への愛について、隣人愛について、再生についてかれらと話し合いました。主を愛するとは主によって命令されている掟を愛すること、すなわち愛に根差し、その掟にしたがって生きることだと言いました (b b b)。

(b b b) 主を愛するとは、主の掟にしたがって生きることである。1 0 1 4 3、1 0 1 5 3、1 0 3 1 0、1 0 5 7 8、1 0 6 4 8 参照。

隣人愛とは市町村民にたいし、祖国にたいし、教会にたいし、主のみ国にたいし、善を欲し、善を実行することですが、それを自分がそう見られたり報われたりするためでなく、善にたいする情愛に根差してそうすることです (c c c)。

(c c c) 隣人を愛するとは、善・正義・公正への情愛に根差して、あらゆる行為・役目のなかで、善・正義・公正を行うことである。8 1 2 0、8 1 2 1、8 1 2 2、1 0 3 1 0、1 0 3 3 6 参照。隣人愛の〈いのち〉は主の掟にしたがった生活である。3 2 4 9、8 1 2 1、8 1 2 2、1 0 3 1 0、1 0 3 3 6 参照。隣人愛の〈いのち〉が主の掟にしたがった生活である。3 2 4 9 参照。

再生について話しました。それは主の力で再生する人を指し、かれらはそこで真理を生活のなかに取り入れ、その真理についての内的感知力をもつようになることです。また、真理をまず記憶の中に入れ、それを願い望んで実行する人は、信仰の中にある人です。

なぜならかれらは、すでに良心と呼ばれるようになった信仰に根差して、実行するからです。かれらは自分自身そうであることを感じとっていると言いました。信仰とは何かについても同様です。わたしはかれらと霊的概念を介して話しました。霊的概念を用いると、以上の事柄が光のもとではっきり把握することができます。

170. わたしがいままで話してきた霊たちは、かれらの天体の北方領域出身者でした。ところで今度は西方領域出身である他の霊たちのほうに導かれました。かれらもまた、わたしがだれで、どんな人間かを調べようとしましたが、すぐ口からでたのは、わたしには悪以外のなにものもないということです。それでこれ以上わたしが近づいていくことを望みませんでした。かれらは、自分たちのところにやってくる者みなにたいして、まずそのように言うことが分かったのですが、次のように応えました。

「わたしはそのとおりということが分かっています。それはあなたがたにも同じように悪しかありません。なぜなら、みんな悪の中に生まれてきているからです。それゆえ人間でも霊でも天使でも、自分自身のエゴからくるものは、すべて悪以外のなにものでもありません。一人ひとりにある善はすべて主よりのものです」と。

それでかれらは、わたしが真理の中にあると感じたので、かれらと話すことが許されました。そのときかれらは、人間にある悪および主からくる善について、しかもそれがどのようにお互いに分離されているか、かれらの考え方を知らせてくれました。それはお互い接続しているが、区切られたものとしてあり、しかも両者とも口では言い表せないやり方で結ばれています。それは善が悪をリードしていて、悪が許された範囲以上に出ないように抑えられ、善は、悪自身にそれを気づかせないまま、悪の赴く方向で悪をたわめておられます。このようにして悪にたいする善の指導権を保つと同時に、自由な状態を保っています。

それからかれらは、わたしたち地球出身の天使たちには、主がどのように姿を現されるかを尋ねました。それでわたしは言いました。

「太陽の中であって人間として姿を現されます。天界の天使たちのあらゆる光の源になっている太陽の炎が、主を取り巻いています。それから発出する熱は神の善であり、そこから発出する光は神の真理です。そして両者とも、その太陽の中にいます主を取り囲む火として現れる神の愛からくるものです。

しかしながらその太陽は、天界の天使たちにだけ姿を現すもので、それより下にいる霊たちには姿を現しません。かれらは、天界にいる天使たちに比べ、愛の善と信仰の真理を受けられる状態からはるかに隔たっているからです（40節参照）」と。

主について、また地球出身天使の面前での出現について尋ねられました。それにたいして言ったことは、主はご自身をかれらに現され、天使たちは悪霊について不平を感じていたため、そこにいる悪霊たちが引き起こした混乱を回復されることが、主の思召しであったということです。わたしがそこに導かれて行ったのも、それを目撃するためだったのです。

171. その時、下って来る高みの出所の方向に、ぼんやりとした雲が見えてきました。下ってくるにつれ、その雲は次第に光をまし、人間の形になって現れました。そしてついにはそれが燃えるような輝きとなり、そのまわりを同色の星が取り巻いていました。わたしが話し合った霊たちには、このようにして主が現存を現されたのです。

そこにいた霊たちは、みなあちらこちらからこの現存されているところに集まってきました。そしてやってくるなり、善霊は悪霊から離れました。善霊は右に、悪霊は左に寄りましたが、そこではみずから自発的にそうなるのです。右に寄った霊たちはそのもつ善の性格にしたがって並び、左に寄った霊たちも、かれらがもっている悪の性格にしたがって並びました。善霊たちは天的社会をおたがいに形成するためそこに残り、悪霊たちは地獄のほうに投げ込まれました。

そのあとわたしが見たのは、かの燃えるような輝きは、その地の相当深いところに下っていき、そこで今度は白色に変わって行く炎の中に現れ、次にその白色が鈍い色に変わり、とうとう鈍い色のままになりました。天使たちはわたしに向かって言いました。

「あのようになつたのは、その土地の下層部に住んでいる者らの中で、善が真理を受入れ、悪が偽りを受入れる程度に応じてそうなったのです。燃えるような輝き自身がこのような変化を行っているのでは決してありません」と。また、

「その土地の下層部には、善霊も住んでいるし、悪霊も住んでいます。しかし悪霊が善霊をとおし、主によって導かれるようになるために、両者は分離しています」と。さらに、

「善霊は順次主によってそこから天界に上げられて行きます。そしてその代わりに他の者がそのあとを埋め、それがずっと続きます。あの輝きが下っていくにつれ、善霊はどのように悪霊から分離され、万事が秩序よく整えられました。悪霊はあらゆる種類の手段と策略で善霊の住居に押し入り、善霊を苦しめます。それがために主の訪問があるのです。」

下ってくるにつれ明るく段階的に現れ、人の形になり、ついには燃える輝きとなった雲は、天使的社会では、その真ん中に主がおられます。そこで福音書にあるように、最後の審判についての主の〈みことば〉がどんな意味か分かってきます。

『栄光と力を帯び、天の雲にのって、天使たちとともに来るであろう』と」。

172. そのあと修道僧的霊たちが姿を現しました。かれらはまさしく、前述したように、この世で巡回修道僧つまりは宣教師でした。かれらはまた霊たちの一団として姿を現しました。かれらはその天体出身者、しかもほとんどが悪霊で、味方に引き込まれ、かどわかされた人達です。かれらが姿を現したのは、その天体の東の方位で、そこからかれらは善霊たちを追い出してしまいました。その善霊たちとは、前述のとおり、その天体の北の側面に移動したわけです。その一団は、自分たちをかどわかした者と一緒になると何千人にもなりますが、かれらは分離されています。その中でも悪霊は地獄に落とされました。

その修道僧の一人と話し、そこで何をされたのか尋ねるチャンスが与えられました。かれは、主について教えるためだと言います。その他について尋ねると、天界と地獄について教えるためだそうです。その他はと尋ねると、自分が口にするあらゆる事柄を信じる信仰についてだと言います。さらにその他はと尋ねると、罪を許す権能と、天界を開いたり閉じたりする権能だと言います。

それでかれは主について、信仰の真理について、罪の許しについて、人間の救いについて、天界と地獄について知っていることを調べられましたが、分かったことは、かれはほとんど何も知らないということ、個々全体にわって、漠然としかも偽りの中にあるということでした。ただ本人をそそのか唆したのは、この世で会得し、身につけた利欲、支配欲だけでした。それでかれに言われたことは次のようです。すなわち欲に促されて遍歴し、しかも教義にかんしてはそんなふうですから、自分の天体の霊たちから天界の光を取り去り、地獄の暗闇をもたらし、こうして主が支配されるのではなく、地獄がかれらを支配するようになったということです。それだけでなく、かれはずるがしこく人を唆しますが、天界の事柄については無知です。そのようなわけで、そのあと地獄に落とされ、その天体出身の霊たちは、このような者たちから解放されました。

173. その天体出身の霊たちは、その他にも次のように言いました。つまり前述したように、修道僧の霊だった新来者たちは、離散したり孤独になったりせず、社会をつくって一緒に生活するよう一生懸命勧めるのです。霊や天使たちは、この世にいたときのよう

に、住まいをもうけたり、共住したりします。この世で集団として生活した人たちは、あの世でも集団として生活します。一戸建て家屋や家族同士で分かれて生活した人たちは、あの世でも分かれて生活します。

自分の天体にいるこのような霊たちは、人間としてそこで暮らしていたとき、家々、家族同士、種族同士で分かれて生活していたため、社会をつくって一緒に生活することが何のことか分からないそうです。かの新来者が勧めるのは、かれらに命令をくだし、支配的に振る舞うためであること、命令に従わせ奴隷にするつもりだと言われても、かれらは命令したり支配したりすることが何のことかまったく分からないと応えます。つまり命令や支配という概念を考えただけで、逃避してしまうのです。かれらの中で、わたしたちに付いて戻って来た者が一人いて、わたしが住んでいた都市を見せたら、それを一目見るや逃げ去り、もう二度と顔を見せなくなったので、わたしは以上のことに気がつきました。

174. そのとき、わたしのそばにいた天使たちと、支配 **dominium** について話しました。つまり隣人愛的な支配と自己愛的な支配の二つがあることです。家々、家族、種族同士で分かれて生活する人たちのあいだには、隣人愛的な支配があり、社会をつくって一緒に生活する人たちには自己愛的支配があることです。家々、家族、種族同士で分かれて生活する人たち、種族の父たるべき人が支配し、その人の下に家族長がおり、また家族長の下には家々の父たちがいます。種族の父と呼ばれているのは、その父から家族が生まれ、その家族から家が出来てくるからです。しかしながら、全員は父の子供達にたいする愛に似て、愛に根差して治められます。父はかれらに生活の方法を教え、かれらを恵み、出来るだけ自分のものの中から、かれらに与えます。子供たちを自分の部下や、僕の扱いにして従わせようとする考えは全くなく、息子たちが自分の父だから従うような愛し方をします。なぜなら周知のように、このような愛は下ってくるにつれ大きくなっていくからです。したがって種族の父は、自分の子供を身近にもっている父以上に、内的な愛から愛することになります。

天界ではこのような治め方をします。なぜなら主がこのような治め方をなさるからです。主のご支配は全人類にたいする神の愛に根差しています。自己愛による支配は、隣人愛の支配に対立するもので、人が主から離れて行くにつれ頭をもたげます。それは、人が主に愛し仕えなくなればなるほど、自分を愛し自分に仕え、またこの世を愛するようになるからです。そうなると、守護されるための必要性から、諸民族は家族と家々をひっくるめて一つになり、そこからさまざまな体制で、王政が始まります。この種の愛が増せば増すほ

ど、自分たちに対立する者すべてにたいして、敵意、嫉妬、憎悪、復讐、残虐、策謀などのようなあらゆる種類の悪が増大します。自己愛のうちにある人にはエゴがあり、そのエゴから流れでてくるのは悪だけです。なぜなら人間のエゴは悪以外の何ものでもなく、しかもそのエゴは悪である以上、天界から善を受け止めることはできません。それゆえ自己愛は支配的であるあいだ、あらゆる種類の悪の父ということです（d d d）。

（d d d）人のエゴ **proprium** は両親からくるもので、奥の深い悪以外のなにものでもない。210、215、731、874、876、987、1047、2307、2318、3518、3701、3812、8480、8550、10283、10284、10286、10731参照。人のエゴは、神以上に自分を愛し、天界以上に世を愛する。そして自分自身と比較すると、隣人には価値がなく、自分に役立つかぎりの隣人であり、つまりは自分だけであって、これこそ自己愛と世間愛である。694、731、4317、5660参照。自己愛と世間愛は、優勢になれば、それだけあらゆる悪の源になることは1307、1308、1321、1594、1691、3413、7255、7376、7480、7488、8318、9335、9348、10038、10742参照。他の人にたいする軽蔑、憎悪、復讐、残虐、策謀について。6667、7372、7373、7374、9348、10038、10742参照。またこのような悪からあらゆる偽りが生じることについて。1047、10283、10284、10286参照。

以上の愛は次のような性格をもっています。すなわち、手綱をゆるめると、このような者一人ひとは全世界の人々すべてを支配し、一人ひとりが他人のあらゆる財差を所有したいとさえ思います。むしろ、それでも満足せず、全天界をさえ支配したいと思うわけで、今日のバビロンをみても分かります。さて、これこそ自己愛の支配というもので、それは隣人愛とはまるで違うもので、天界と地獄ほどに違います。

しかしながら社会、王国、帝国での自己愛による支配はこんなふうでも、神への信仰と愛に根差した英知をもっている人たちの場合、隣人愛による支配もまた存在します。かれらは隣人を愛しています。このような人たちは、天界では社会を形成しながらも、同時に種族、家族、家々に分かれて生活しています。かれらは、主の神的慈悲によるもので、愛の善と信仰の真理である霊的な親愛の情にしたがっていることについては、別記に委ねます。

175. そのあと、わたしはその霊たちに向かって、出身天体にある種々の事柄について尋ねました。まずはかれらの神信心と啓示について聞きました。神信心については、種

族たちがその家族もろとも、三十日のあいだある所集って説教者の話を聞くそうです。説教者はそのとき地面から僅かばかり高い説教壇から、いのちの善にいたる神の真理をかれらに教えます。啓示については次のように言いました。

「啓示があるのは、睡眠と覚醒のあいだにある早朝時で、それは肉体的な感覚や現世的なものによって、内部の光がかき消されないときだからです。その際わたしたちは、天界の天使たちが神の真理について、またそれに従った生活について話すのを聞きます。はっきり眼がさめると、白衣を身につけた天使が寝床に姿を現しますが、その天使はかれらの眼前から急に消えて行きます。そこで耳にした事柄が天界からきたものであると知ります。このようにして、神からの幻と、神からのものでない幻の間の区別を知ります。なぜなら神からのものでない幻の場合、天使は現れません」と。それでまたつけ加えたことでは、かれらの説教者に与えられる啓示も、また他の者による場合にも、このようにして行われるそうです。

176. かれらの家屋について尋ねると、次のように言いました。

「家屋は木造で質素です。屋根は平たく、その屋根の回りの縁は下に傾斜しています。家の前面には夫婦が住んでいて、それに隣接して子供達がおおり、その後ろには下女や下男がいます」と。

食料については、水とともに乳を飲むそうです。かれらが飲むのは、羊のように毛で覆われた雌牛から取ったものだそうです。自分たちの生活については、次のように言いました。

「わたしたちは裸で歩きます。わたしたちにとって裸体は恥ずかしいものではありません。またわたしたちは家族同士の間で会話を行います」と。

177. その天体の太陽について話してくれたことでは、住民の眼には炎熱の太陽として姿を見せているようで、一年は200日あり、一日に地球時間で9時間のあいだ日が照っているとのこと。それはわたしたち地球において、わたしが感じた日の長さから結論づけたことでした。それから、かれらには春と夏も永久につづき、草原には花が咲き、樹木は毎年果実をみのらせるそうです。そのわけは、一年が短く、わたしたち地球の75日に匹敵する長さです。一年が短いところでは、冬には寒さがなく、夏には暑さがないので、土地はずっと春めいた感じであるということです。

178. その天体で行われる婚約と結婚にかんしては次の通りです。娘は婚期のころまで家にとどまり、結婚すべき日がくるまで出て行くことは許されません。時がくると娘は、結婚のための建物に連れて行かれます。そこには婚期の乙女たちが他にも大勢連れてこられ、男達の上半身のところまで高くした屏風の後ろにいて、裸の胸の部分と顔が見えるように姿を見せます。それで若者たちはそこにやってきて、その一人を妻にします。ある若者が自分の気質の向くある女性を見ると、その女性に手を出します。そのとき女性のほうがそれに従う場合、かの女を整えられた家に連れていき、自分の妻にします。若者たちは自分の気質にあうかどうかを、かの女たちの顔から知ります。なぜなら人の顔こそ精神の指標で、繕ったり偽ったりすることがないからです。すべてが上品に行われ、好色的にならないために、乙女である娘たちのうしろには老人が一人座り、その脇には老婦人がいて、注目しています。

乙女たちが連れていかれるこのような場所が沢山あるとともに、若者にも選択が行えるような一定の時機があります。自分に適した女性が、ある場所で見付からない場合、他の場所に赴きます。またある時機に見つからない場合は、次の時機に見合わせます。それからかれらが言ったことでは、夫はただひとりの妻を迎えるわけで、複数の妻はあり得ないそうです。これは神の秩序に反するものだからです。